

東方黒麗教 ～the Black Maiden.

rii11

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは幻想郷そこにイレギュラーが紛れ込む
妖怪の賢者八雲紫（自称17歳）によって

連れ込まれたのはチート能力者だった！

紫は未来を変えたくて主人公にたくす

目次

第1話森の中	1
第2話博麗神社にて	9
第3話八雲邸にて	13
第4話周辺案内 (ry)	19
第5話人里にて	26
第6話新月の日	29
第7話夜斬刀	35
第8話黒麗教?	39
東方紅魔郷〜the Embodiment of Scarlet Devil.	
第9話瀟洒なメイド	41
特別話新年	47
第10話紅の悪魔	50
第11話 the Embodiment of Scarlet Devil	52
紅魔異変終了	
第12話キャラ紹介?	58
第13話名無しの西洋人形	62
第14話名無しの西洋人形	65
第15話文	71
名称しがたき話	74
第17話 ■ ■ ■ ちゃん	78
ua2000突破記念話 敵視点	81

第19話バージョン	84
第20話終わらない物は何も無い	87
東方妖々夢　くPerfect Cherry Blossom	
第21話乙	90
第22話桜の木	95
第23話Perfect Cherry Blossom	98
東方萃夢想　くImmaterial and Missing Power.	
第24話失われた力	102
第25話Immaterial and Missing Power.	105
三日置きの百鬼夜行　終了	
第26話キャラ紹介	108
第27話夜を斬れる程度の能力	112
第28話瀛夢の日常	115
ua三千突破話　敵視点	120
東方永夜抄　くImperishable Night.	
第29話うどんげえ	123
第30話永遠に留まったままのー。	126
第31話待たせたな！	129
東方忘却録　くbe a forget to	
第32話何かがおかしい。	133
第33話　忘れてしまう事の辛さ	137
第34話ルーミアは仲間	139
第35話go to the hell.	141

第36話死神	144
東方花映塚くPhantasmagoria of Flower View.	
第37話ボスは意外と優しい	147
第38話脱線させる程度の能力	150
花映塚は終わった	
第39話外の世界	153
第40話最近あんまり書いて無い	156
41話―諏訪湖	159
第42話	162
第43話タイトルを考えるのが面倒臭くなった人↑私だ。	165
第44話イツヌ	168
45話 すいません	171
第46話伊勢界	174
第47話 ロンドン	177
第48話霧の街	180
東方地霊殿 く Subterranean Animism.	
第49話こーいつし	184
第50話太陽信仰	187
東方星蓮船 く Undefined Fantastic Object.	
第51話「」	190
第52話UFO	193
星蓮船はおわった	
第53話幻想的なオブジェクト	196

第54話	ギニョル	199
第55話	はーつくぎよくろう	202
第56話	紅の館	205
第57話	フォーオブアカインド	208
第58話	霊夢う	211
第59話	ケツイ	213
第60話	黒麗異変	215
第61話	二代目へ(仮)	217

第1話森の中

ここは幻想郷。人々に忘れられた妖怪が最後の楽園として楽しむ場所。それが幻想郷である。そして、そこに有る、とある森にイレギュラーが発生する。

「うっ、ここは？」

周りを見回す。どうやら、森の中の開けた場所の様だ。

「ん？何で裸なのです？」

そう、身体を見ると、裸だった。寒く無いだけまだましです。何やってたです？私。それより、なんで森の中になんて居るのです？うん…思い出せないです。これが記憶喪失ですか？

「それに、辛うじて口は動くですけど、身体中が筋肉痛みたいに痛いです」

「あれ？筋肉痛って何だったです？」

「まあいいです」

それより、かなり痛いです。これ。治るのです？

「ん？何かあるです。つつ痛くて取れないです」

ん？手紙、です？何で手紙です？でも、読むしかないのは同じである。

「うー、痛むけど、読むしか無いです」

「えーっと」

「時間が無いから手短かに済ませるわね。」

私の名前は八雲紫よ。さて、貴方の事についてだけど、もう、察してるかもしれないけど、貴方記憶喪失なの。

理由については、私が貴方をこの世界に入れた時にミスしちゃったの。この世界に入れた理由については、貴方の能力が強すぎるからなの。

貴方の能力がもし外の世界で使えるようになったら。と思うと、ね。後、身体中が痛いはずよ。無くしたければ、私の書く通りにしなさい。

まず、右手を出して頂戴。そして薬指と小指だけ曲げて頂戴。痛む

でしようが我慢して頂戴。そして右手で縦に切る様にして動かして頂戴。

そうしたら、スキマが出てくるわ。その中に、貴方の為に用意した物があるわ。あと、まだ貴方の名前を書いて無かったわね。貴方の名前は、黒麗漓夢よ。こくれいりむあと、この世界は幻想郷って言うわ。それじゃあさようなら」

幻想郷？何か思い出せそうですけど思い出せないような、です。それよりスキマ？を出さないといけないのですか。えーっと、こうつ。ですか？あつ開いたです。

「えーっと、相変わらず痛いですけど、探るしか無さそうです」
探っていると、貼るロキ○ニンというのを見つける。

「うーん…、コレですか？えーっと何々？貼るロキソ○ン。何か、どこかで聞いた事ある様な名前です。えーっとコレを貼れば良いですね？うー、これまた貼るのも痛いです」

「つつ、貼れたです。はー、何か疲れたです、寝たいです。あれ？そう言えば幻想郷って妖怪や獣が居るんじゃない？それにまだ裸です。寒く無いだけマシです（小声）どうしようですうーん寝ちゃえです」

翌日

「（？□▽）ファゝ今朝はやっぱり冷え込むです」

「そう言えば、何処も喰われて無いですか。大丈夫そうですね、身体の痛みも治ってるですし」
？

良かったのです。初日から死ぬのは辛いのです。

「えっと、私の為に用意してるんだったつけ」

スキマの事である。何を用意してあるか、楽しみなのです。

「えっと、何が入ってるのですか？昨日は痛かったですから、中には入っていないですし」

「うーん…、気持ち悪いです。物凄い数の目が、こっちを見てるです。昨日はそんなの見てる暇、無かったですからね」

これが、本当に気持ち悪かった。あらゆる方向に目。あつちを向いても目。こっちを向いても目。目目目目目目目目目目。あつちを向い

「あつたです。服ですね何か黒い色ですね、とりあえず着るのです」
「サイズが丁度です。あとこれ、巫女服の黒版です。霊夢と色違いです?」

有ったのは霊夢の黒版だが、ここで引つかかる事がある。

「あれ?ちよつと待ってです。何で名前知ってるですか?うーんなんか知ら無いですけど、覚えてる気がするです」

そう、何故記憶喪失なのにも関わらず、人の名前を覚えているのか。です。でもまあ、覚えているかいないかは、大して関係ないのです。「まあいいです。それよりも、もうスキマの中には何も入ってないですか?ん?何かあるです。刀?でも錆びてるです。うーん、とりあえず持つとくです」

刀は、鞘だけ見てもかなり古い物であり、茶色く変色しているのが分かる。

「もう何にも入って無さそうです。結局入ってたのはこの服と、錆びた刀だけです」

「黒麗瀉夢。ですかー。それより、自分の能力が強すぎて、なんなんですか?チートなのですか?」

私の能力・気になるのです。

「うーん...とりあえず人里ですね。こんな服だと、怪しまれそうです」
「うーん...、人と妖怪が共存してるから、大丈夫なのでしょうけれど、服が、完全に霊夢の黒版ですし」

それに、問題はそれだけでは無く、里の方向も分からないのである。
「まあ仕方ないです、とりあえず川を探すです。里っていうのは、基本川を下った所にあるです」

これはリアル知識として知っている。川の周辺に町が出来るから、川をそって下れば、里に着くのです。

「よし、じゃあちよつと休憩です」

え?言ってる事が逆ですって?初めて(スキマを)使ったから、疲れたんです。だから、休憩してから下るです。

「何やってるんだぜ!」

「魔理沙です?」

不意に空を見ると、魔理沙がいる。ああ、疲れてる時に会いたく無かったです。

「何で私の名前をしっているんだぜ？」

「色々あったです」

逆に、私が聞きたいのです。そもそも、何でこんな所に居るのです？

「その格好はなんだぜ？」

「これしかないのです」

紫さんに聞いてください。私はこの格好自体は嫌いじゃ無いのです。

「何してるの、早くしてよね。こっちは無理矢理付き合ってあげてるっていうのに」

今度は霊夢が現れる。面倒臭い事になって来たのです。

「霊夢こいつを見やがれだぜ」

魔理沙はそう言い指を指す。相手に対して失礼なのです。

「その格好、私と色違い？」

「ええ、そうです。これしかないのです」

ここのやり取り、またやるのですか。

「だそうだ。私には、こいつが怪し過ぎると思うぜ」

「貴方名前は？」

やっと遅めの挨拶ですか。なんだか、転校生の気持ちが分かった気がするのです。

「私の名前は黒麗漓夢です。能力は知らないです」

能力は何なのか、早く知りたい所です。

「黒麗漓夢ねえ、聞いた事無いわ。外人かしら？」

「能力は知らないねえ、怪しいんだぜ」

疑われてばかりだと、心臓に悪いのです。ですので、手紙を出すのです。

「私は、昨日来たばかりの外人です。証拠はこの手紙です」

身体はとても気怠い。こんな事より、早く休みたいのです。

「手紙？」

「そうです、紫さんです」

「えー時間が無いから手短かに済ませるわね。私の名前は八雲紫（略）」

「何をしたいんだぜ？紫の奴。しかも、強すぎる能力ってなんだぜ？」
それは、私が1番知りたいのです。

「さあ、分からない事が多すぎるわ」

ふふふ呼んだかしら？

「何？紫」

突如として紫は現れる。びつくりしたが、反射的に挨拶する。

「あつ、おはようです。紫さん」

「あつ紫だぜ」

そう言うと、少し不満そうに口を膨らませ。

「もう、リアクションがなつてないわ。そこは誰だ！とか言うところでしょう」

リアクションにこだわる。

「知らないわよ」

「何しに來たんだぜ？紫」

そんな事を魔理沙に聞かれ、紫はこう告げる。

「貴方の能力についてよ。黒麗漓夢」

「私の能力？ですか？」

興味しか無いですけど、早くするのです。じゃないと、そろそろ限界なのです。

「そう、貴方の能力について」

「こいつの強すぎる能力が興味があるぜ」

「貴方の能力はコピーよ。正確に言うと、触れた“もの”の能力をコピーする程度の能力」

ああ・だからなのです？

「だから紫さんのスキマ能力を使えたんですね」

「ちよつと待ちなさい。今、スキマを使えたですって？」

ああもう。これ使ったらさらに疲れるです。力加減が分からないです。

「はいです」

「本当にスキマだわ。確かに、ここまでで出来れば大したものだわ」

霊夢が出来たスキマに手をつ突っ込んだりしている。

「でも、能力を使うには、何かしら霊力とか魔力とかが無いと使えないんだぜ」

「それもそうよね」

そんな的確な推理は当たり、

「貴方が能力を使うには魔力が必要な。そして、貴方の魔力は大魔法使い並よ」

「だ大魔法使い並だって!」

どれくらい凄いのか正直良く分からないです。

「でも、安心して頂戴。この子は、自分の能力でないと魔法とかは使えないわ」

「そう言えば、魔理沙貴方キノコ取りに来たんでしょ?」

「そう言えばそうだったぜ」

話を逸らす2人に、紫はどう思ったのか、

「ちよつと話を逸らさないで頂戴」

「で?結局何が言いたいんだぜ?」

「早くしてよね。早く神社に帰りたいわ」

こつちこそ、早く休みたいです。

「貴方、錆びた刀は持つてるかしら?」

これですよ。何の役に立つのかは分かりませんが。

「はいですー。応持つてるです」

「その刀は、新月の日に何かすれば使えるようになるわ」

へー、そう言えば、今何日だったっけ。

「そう言えば、今は何月何日です?」

「今は旧暦の3月22日新月まで後7日かしら?」

「ちよつと待つんだぜ。こいつを私と霊夢が放置すると思うんだぜ?」

放置はしなさそうですけど。なんか、霊夢の勘でばったり会いそうです。

「確かに危険だけど、生憎泊めるような事は出来ないわ」

「霊夢の奴お金無いんだぜ」

「うるさいわよ」

最低、雨風が凌げるテントが有れば充分なのです。

「だからといって私の所はかたずいて無いんだぜ」

「確かに魔理沙の所は私もおすすめ出来ないわ」

「何だぜ？」

醜い争いをしていると、紫が止めに入る。

「ハイハイ喧嘩は止めて頂戴。それで、何処に泊まるかは決まったよ
うね」

何処なのです？

「何処なんですか？」

「それは勿論、私の所よ」

紫さんの所ですか。まあ、何処でも構いませんけど。とにかく、早く
休みたいです。

「胡散臭い奴が怪しい奴を拾うんだぜ」

「まあ仕方ないわ。それより、大丈夫なの？」

「ええ、今更一人二人増えた所でね」

食費の話です？

「それじゃあ決定ね」

「おいおい良いのぜ？」

「ええ。良いわよね？」

勿論。私は構わないのです。

「はいです」

「ほら」

何か、今の感じだと、言わせている感が凄かった気がするのです。

「いや、それより紫の所なんかに置いていいのぜ？」

「さあ？でも、紫以外には受け取る人も妖怪もいないでしょうし」

「そうだけど」

「ね？早く行きましょ黒巫女さん」

ああ、早く休みたいです。

「失礼するのです」

私達はスキマで移動する。早く休みたいのです。

「結局何だったんだぜ？」

「取り敢えずキノコ取りは中止ね。早く神社に行きましょ」

「ああ、そうだぜ」

第2話 博麗神社にて

「取り敢えず整理するぜ」

「そうね」

「まず、あいつの名前は黒麗漓夢で」

「能力は、触れたものの能力をコピーする程度の能力」

「あいつは、昨日来たばかりの外来人で」

「紫の所で、住む事になった」

「能力を使うには、魔力を使い」

「その魔力は、大魔法使い並」

「それに、紫は最後にあいつの事、黒巫女って呼んでたぜ」

「それに、記憶喪失だったわけ？」

「それにしては、色々知ってたみたいだけど？」

「あれは、事故のような物だった。って書いてたじゃない。だから、残ってる記憶があってもおかしくないわ」

「それから、私の名前も知ってたみたいだぜ」

「とにかく、紫に聞くしか無さそうね」

「ああ、そうなんだぜ」

「ふう 黒麗漓夢、黒巫女ねえ」

「しっかし紫が来るまで暇なんだぜ」

他愛もない話を続けていると、声が聞こえる。

呼んだかしら？

「あつ紫」

「紫だぜ」

やはりご不満なようで、ぷくーっと口を膨らませている。

「やっぱり、リアクションがなっていないわ」

「知らないわ」

「何の用だぜ？ 私たちは、あいつについての情報をまとめる所だぜ」

「あの子は今、どうしてるの？」

「藍に任せてあるわ」

「何で？」

「あの子、まだ自分の能力に慣れなくて、力加減が上手く行かなかったの」

「それで藍が面倒を見ていると」

「へー、どうする気なんだぜ？」

「とりあえず、マトモに使えるようになってほしいけれど、能力が能力ですから」

「そんな事し始めたら、私がじつとしてないわ」

「そう言えば、藍には黒麗漓夢の事、知らせたのか」

「ええ、能力の事もね」

「それを知っていてなお、面倒を見れるのね。やっぱり、橙が居るからかしら？」

「何でだぜ？」

「いやあ：若干似てるじゃない。身長とか？」

「ええ、そうね。それはありそうね」

「自分の能力をコピーされる事に嫌気を感じないんだぜ？」

「無さそうよ、だってあの子、橙に式神の作り方とか、教えているもの」

「紫はどうなの？」

「どうって？」

「コピーされることよ」

「うーん：。私の能力は、式神も使えるから、あまり嫌では無いわ。でも、驚いたわ、ちゃんと出せるかは不安だったの」

「ああ、でも。そのせいで、面倒を見させてるんだろう？」

「本当あの子って、何なのかしら？」

「そう言えば、あれはちゃんとスキマだったんだぜ？」

「ええ、確かにスキマだったわ」

「そんな能力を、マトモに使われると思うと、敵にはしたく無いわ」

「ああそうだぜ」

「それじゃあ戻るわね。失礼」

紫は戻る。

「結局、何だったんだぜ？」

「さあ、でも。あの子はまだ、自分の能力を上手く使えてない。という

「ことは分かったわ」

「あと…、7日だぜ」

「ええ、それまでに使えてるか、そうでないか」

「使えてたら厄介だぜ」

「どちらにせよ、戦いたくは無いわ」

「ああ、そうだぜ」

「取り敢えず、また明日ね」

「ああ、それじゃあな。霊夢」

「ええ、さようなら。魔理沙」

魔理沙は箒に乗って帰って行く。

「ふう、晩御飯の用意をしましょ」

「あつ、何で魔理沙の名前知ってるのか、聞くの忘れてた」

「まあいいや」

「それより、ご飯ご飯」

「うーん、今日も質素なご飯」

「いただきます」

「ごちそうさまでした」

「今日は色々疲れたわ、そのまま寝るとするわ」

翌日

「んつつ、あー。なんだ、夢か」

「おう、起きたか？霊夢。おはようだぜ」

「ああ、居たの？」

「いや、さつき来た所だぜ」

「それより、お賽銭が溢れるほど貯まる夢を見たわ」

「はっ、霊夢らしい」

「はあ、それより朝ごはんね」

「ああ、頼むぜ」

「分かったわ」

「♪♪♪♪♪今日も参拝客は来ないんだぜ」

「何よ、その歌」

「この神社の何時もの日々を歌った物だぜ？」

「縁起でも無い」

「まあ、いいじゃん」

「それより朝ごはん。ほら」

「ありがとだぜ、いただきます」

「いただきます」

「ごちそうさまだぜ」

「ごちそうさま」

「あと6日か」

「そうね、今日は人里にでも行きましょうか」

「ああそうだぜ」

第3話八雲邸にて

「ここだわ。ここが、貴方が今日から暮らす、八雲邸よ」
「つつです」

今にも倒れそうである。

「無理しなくて良いわよ。加減が分からなかったのね？」
「はいです」

早くするです。

「藍を呼んで来るわね、ちよつと待ってて頂戴」
「はいです」

早くするです（威圧）。そんな事を思いながら。

数秒後

「待たせたわね」

「何ですか？紫様？」

「ちよつと、この子を休ませて頂戴」

「？お主、その服装は、あの巫女の色違いか」

「つつです」

早くです。

「早く寝かせてあげて頂戴」

「はい、分かりました。紫様」

「つつ」

「この子の名は何と言う？」

「黒麗滴夢よ」

部屋の中

「お主、能力が強いそうじゃな。しかもそのせいで加減が分からず、使ってバテた。と、何とも情けない」

何も言い返せないです。

「ご、ごめんなさいです」

「まあよい、休むといい。」

それに、ここに住む事になったのじゃろ？」

「そ、そうです」

「なら良からう。ここにも、お前と同んなじくらいの
、橙がいるんだが、これが可愛くて可愛くて」

「そ、そーなのかー。それより、おやすみです」

目を閉じて、寝る。はあ。やっとですか。

「ああおやすみ」

「紫様？ 瀉夢が寝ましたよ？」

「ああ、私はちよつと用事があるから。じゃ、失礼」

「ああ、紫様あ」

「行つてしまわれた」

「さて、面倒を見なくてはならないのか」

「特にうなされたりとかは無さそうだな」

「.....」

何十分か経つて

「何も起きない」

「ただいまー」

「紫様」

「何？」

「い、いえ。何も起きないので」

「うなされたりはしてないのね？」

「はい」

「そうじゃあ、そこ代わつて頂戴」

「はい？」

「もうこんな時間でしよう？」

「は、はい晩御飯ですね」

「この子には、おにぎりでもいいわ」

「分かりました」

「行つたわ、本当にうなされたりとかはして無いようね」

「良かったわ。それにしても、自分の能力をコピーされて嫌じゃないの？ って」

「私は、別に自分の能力の一部しか、コピーさせて無いから、別に嫌じゃないわよ」

「でも、この子には私の能力でも使えそうね」
「ふふっ」

「おにぎり持って来ました」

「ほら、起きなさい」

何ですか？

「うつ、うう。おはよう？です」

「まだ治ってないでしょ。ほら、おにぎり」

丁度、お腹空いてたです。

「ありがとです」

「それでは私は」

「まって」

「？」

「面倒見てくれてありがとうございます」

「ああ、それじゃあな」

「無理しなくて良いのよ」

「はいです」

「ゆつくり食べてね」

「おいしいです。これは紫さんですか？」

「いいえ。藍よ、藍は料理が得意なの。私の自慢の式神よ」

「へー、そうなんですか」

「ええそうよ」

「とっても美味しいです」

「でしょ？」

「紫様ーご飯ですよー」

「じゃ、行くわね」

分かったです。

「うん」

「はーい、今行くー」

「行っちゃったです」

「ああ、本当に美味しいです」

美味しく食べました。

「あら、もう寝てるわ。ちゃんと、全部食べてるわね」
「それじゃあ、お休みなさい」

翌日

「おはようです。ってまだ日が登って無いです」
「仕方ないです、もう1回寝るです」

1時間後

「(？□ゞ) ファゝ今何時ですか？」

「日が若干出てるって事は、今は3月ですから

虎4つ時くらいですね(5時30分ゝ6時くらい)」

「ん？」

「あつ、おはようです」

「おはよう。強いね、朝」

まだ冴えていないのか、目を擦っている。

「はい、朝に強いです」

「(？□ゞ) ファゝ」

「こうやって、暁を楽しむのもまた。です」

「暁？」

「えっと、日の出の頃の事を、暁って言うんです」

綺麗です。

「へえ、確かに。日の出も悪くないわね」

太陽の方を見る。まだ暗い空に、太陽の光が差し込み、幻想的な風景を作り出す。

「多分、私が早起きするのは、これを見たいからだと思うんです」

「何で？」

「だって、夕暮れだったら誰でも見れるですから」

「ああ、そうね。それに比べて暁は、早起きしないと見れないわ」

「だから私は、暁が見れるように、今日もまた、明日もまた、早起きをするのです」

「でも。たまに暁を過ぎてしまいうんじやない？」

「その時は…仕方ないです」

「ふふっ」

「さあ、身体を動かしますか」

「ええ、簡単な運動をね。身体が訛ってしまいうから」

「よいしょ、よいしょ、です」

「ふふっ」

「何です？」

「いやあ。人間って、そんな運動をするんだな。ってね」

「そう言えば、妖怪でしたっけ」

「ええ、そうよ」

「紫さんは何をするんです？」

「お姉ちゃん、と呼びなさい」

え？・ゆってる意味が分からないです。

「え？」

「お姉ちゃんと呼びなさい」

呼べばいいんですね。呼べば。

「お、お姉ちゃん」

「っ、良いわ。これからもそう呼びなさい」

あつ。これ絶対ハマったやつです。

「はい、お姉ちゃん」

「何やってるんですか、私の師は」

その通りです。

「え？お姉ちゃん。って呼ばせてるだけだけど？」

全くです。

「良いんですか」

「えっはいです」

「ね？」

適当にあいずちを打つときですか。

「お姉ちゃん♪」

「はあ、全く。私の師はどうして」

本当にそれです。

「良いじゃない。本人にもちゃんとゆってもいいか、確認とったのよ？」

「それよりご飯出来ましたよ」

あつ。もう、スルーの方向です？

「はい、ほら行くわよ」

はあ。仕方ないです。

「待つですお姉ちゃん」

「はあまったく」

（出来ればそう呼ばれたかった）

「ほらいただきます」

「いただきます」

食べ終わり

「ごちそうさまです」

「ごちそうさま」

「ごちそうさま」

「さて、今日は、この辺の案内と、貴方の能力をマトモに使えるようにする訓練よ」

「はい、お姉ちゃん」

「じゃあ、行ってくるわね」

「行ってくるです」

「ん、分かりました」

「はあ、暇だ。見回りでもするか」

第4話周辺案 n a (r y

「まず、ここが人里」

「へえ、人里。ここが人里ですか。じゃあ、ワーハクタクとかが居るの？」

「ええそうよ」

「へー、不思議ですね」

「何が？」

「いや、妖怪と人間が共存してるですから」

「たしかにそうね、普通じゃありえないわ。でも、霊夢が異変を解決したりとかするから。基本平和だわ」

一つ、気になる事があるです。

「そう言えば、今この世界は、どれくらい進んでるんですか？」

「いきなりめたい事を聞くのね。えーっと、スペルカードシステムを広めるのに手間取ってる所かしら？」

「へえ、じゃあ紅魔郷の前ですか」

「本当にめたいわね、ええそうよ」

「知ってるです？」

「ええ、外の世界については、この幻想郷一ね」

ふーん。じゃあ。

「じゃあ、イレギュラーである。私を入れたのは？です」

「本当すぎて困っちゃう。ええ未来を変えたいの」

未来ってまた。

「そこでコピー能力を持つ私に、何かして欲しいわけですか？」

「ええ、出来ればあの巫女には出来ない事をね」

「それは、どういう事です？」

「それは、自分で考えなさい」

自分しか出来ない事ですな。

「はあ、そうですかお姉ちゃん」

もうすっかり、この呼び方に慣れてきたです。

「それより、見て回るわよ」

「はいです」

少女移動中

「久しぶりに来たわね」

へー。

「そうなんです?」

「ええそうよ」

「何してるんです?紫さん」

あつ。阿求さん。

「ああ阿求ね、ちよつとこの子と見回りだわ」

「?その服」

「私が用意したものだわ」

おはようです。

「おはようです」

「おはようございます」

「私の名前h」

(ああ行ってしまった。

また今度、取材させていただきますね)

「行くわよ」

「ふう、これ位離れば大丈夫かしら?」

どうしたです?・

「何するんです?お姉ちゃん」

「ええ霊夢がいたの、それに魔理沙も。きつと、勘で来たんでしょうね。人里案内はお預けかしら?」

ああ。そうですか。

「はあ、そうですか」

「ええ。それじゃあ移動しましょうか」

「はいです」

何処なんでしょう。

「こっつよ」

「…ここは？」

「ここは、廃墟よ」

廃墟って。

「へえーですか」

「あと6日後に、霊夢達が何か仕掛けると思うわ。まずはそれまでに、私の能力を使えるようにしましょう」

「はいです」

「まずは、私に触れて頂戴。貴方にはまだ、私のごく一部しかコピーさせて無いの」

まあそうだと思ったですけど。いいんですか？

「分かったです あれ？何か能力をコピーしようと思ってその対象に目を向けると能力が見えるです」

「それが副作用みたいな物だわ。あと貴方は、触れたものに能力を付与する事も可能だわ」

付与？

「付与？です？」

「そう、簡単にいうと。能力を付けて、そのものが壊れない限り付与され続ける」

へえー。

「用するに、壊れない限り能力が付き続けるって事ですか？」

「ええ、そういう事よ」

「へえ、そうなんですか」

何それ。めっちゃ凄いです。

「それで、まずはこれを付けてみて」

「何ですか？これ」

髪飾り？

「これは、魔力を普通より、ちよつと多い位に制限する物よ。髪に付けてみて」

この位ですか？

「へえです。んっこうですか？」

「まず、この水の温度の境界を操って、熱湯にしてみても頂戴」

これまたいきなり無茶を。です。

「こうですか？」

「ちよつと熱すぎない？」

うるさいです。お姉ちゃん。

「つ、こうですか？」

「ええ上手ね」

（私より上手いわ）

「良かったです」

「それじゃあ次はそうね」

「何なのですか？」

何なんだろう。あつ嫌な予感がするです。

「じゃあ、光と闇の境界を操ってみて頂戴」

うわあいきなりハードル上げたです。それに、右手に乗ってる陰陽玉みたいなのあるけど、作れと？

「いきなりハードルが高くなったです」

「仕方ないの、スキマを使う上では必須なの」

へえ。じゃあ何でです？

「じゃあ何で使えたです？」

「貴方の能力はね、過程をすつ飛ばしてその能力を使えるの。でも、その飛ばした過程の分だけ、魔力も取られてるわ」

用するに、能力を使える様になるまでの努力が。どれ位重要だったかで、消費する魔力が変わるのですか。

「へーそうなんですか。じゃあ、飛ばさずにちゃんとやらないといけないのですね」

「ええそうね。闇を操るには、ルーミアだけど。結局1つの能力だけで済む様にしたいから。当分私の能力だけね」

「分かったですんつ、難しいです」

本当にこんなの作れるのです？

「ほら焦らない、もうちよつとゆつくり流していきなさい」
ゆつくりですか。

「分かったです。えつと　こう？ですか？」

「ええ。文句を言うなら、もうちよつと量を多くね」
はあ。難しいです。

「つつ、この微妙な感覚が、分かりづらいです」

「大丈夫よ、光と闇さえ分かれば、後はもうその感じをまんま使うだけだったか、ちよつと発展する位だから、ここを乗り超えれば」

「ふ、ふうこんな感じですか？」

ふう、何とかいびつだけど出来たです。

「ええ、私より上手よ」

嘘ですよね？

「本当です？」

「ええ、本当よ。私は何日もかかったもの、才能があるわ」

「絶対嘘です」

「本当よ」

「まあいいですそれより次はどうするんです？」

「ええ、予想外に早く終わったかしら？そうね家に戻りましょう」

「はいです。お姉ちゃん」

家の中

「藍？いないわね見回りにでも行つたのかしら？」

「ふう、若干疲れたです」

「ええ、初めてであれ位出来ればあとは大丈夫よ」

そうじゃ無かったら、死ぬのです。

「そう言えば、まだ昼ご飯食べて無いです」

「ええ、何か買って来ようかしら？」

「机の上にあるみたいです」

「あら、本当ね。おにぎりね」

「そう言えば、昨日も私、おにぎりだったです」

「ええ嫌だったかしら？」

「いや？全然、むしろおにぎりは、好きですから」

おにぎり大好き。カレーも大好きです。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

食事が終わりました

「ごちそうさま」

「ごちそうさまです」

「そう言えばご飯食べてる時って、何話したら良いのか分からないわ」

「逆に、食事中に話すのはマナーとして、良くないんじゃない？です」

「それもそうね」

「それにしても、時間の流れが遅い様な気がするです」

「ああそれは仕方ないわ。この世界の時間と外はズレてるもの。様は、時差みたいな物よ」

「へえ」

「暇ね」

「あと6日ですか」

「え？そうね」

「あと6日かあ」

「大丈夫よ。1日でこれなんだから」

「そうですね」

「昼寝でもしましょうか」

「はいです」

（☒ω☒）スヤア…

「ん。んん？何時です？」

「うーん羊3つ時くらいですか？」

（午後3時〜3時30分）

「今は猿3つ時だ（午後5時〜5時30分）」

「ああ居たんですね」

いつからそこにです。

「ああ晩御飯の準備をな」

「へえ」

「今日の晩御飯はカレーだ」

「やった、カレー大好きです」

「それは良かった。では、準備に戻るとしよう。あと、橙が遊びに来る

と思うから」

「はいです」

「ん、何かしら？」

あつ。以外と早いお目覚め。

「起きたですかお姉ちゃん」

「ええ、今何時かしら？」

「晩御飯時です」

「紫様ー」

あつ、橙です。

「あら橙どうしたの？」

「あれ？その子は？」

まあ、知らないですよね。

「黒麗瀉夢って言うですよろしくです」

「よろしくね。えーつと」

「りーって呼んでです」

皆も、そう呼んでくれて良いですよ？

「よろしくねりー」

「はいです」

「ご飯だぞー」

「はいです」

「今行くわ」

「はーい藍様」

こんな感じで、1日が過ぎて行つた。そして後の6日の間で私は、能力を使える様になった。といつても、本人みたいに盗み聞きしたりとかに使おうとは思わない。

そして新月の日

第5話人里にて

「はあ、早く着かないかしら」

「何でだぜ？」

「私の勘が、あの子は人里に居る。って指してるの」

「へえ、でも、霊夢の勘だから、当たるんだぜ」

「そうね、えつと…」

誰か知ってそうな人はいないかしら」

「それなら、阿求はどうだ？能力があるんだぜ」

「そうね」

「ああ」

少女移動中…。

「ねえ、私と色違いの服を着ている子を、

見なかったかしら？」

「えつとあつちです」

（ふふっ面白くなつて来ました）

「分かったわ。ほら、魔理沙行くわよ」

「へいへいだぜ」

「それにしても、今日はやたらと人が多いわね」

「ああ、何か見世物でもあるんだぜ？」

「さあ、分からない。でも、早くあつちに行きましょう」

「分かったぜ」

「さあ、こっちの方だわ」

「ん？何もいないんだぜ？」

「そうね、私達に勘ずいてどっかいったかしら？」

「どこいったんだぜ？」

「うーん、分からないわ。離れているか、移動中か」

「仕方ないぜ。折角来たんだ、人里で何か食べていけないか？」

「ええそうね、それじゃあ、あのうどんとかどうかしら？」

「ああ、それで良いんだぜ」

「ごめんください、きつねうどん2つ」

「そういえば、待つてる時とか、食べてる時って何も話す事無いよな」
「ええ、私は静かなほうが好きだから」

「私は、賑やかなほうが好きだぜ？でもたまには静かなのも良いぜ」
「やっぱり、腐ってるけど。根は日本人なのね」

「どういう意味だよそれ」

「いや？日本といえば、静かで、あまり派手では無いけれど、その質素な感じが逆に良い。みたいな？」

「へえ、それって要するに、私がうるさい。って言うてるんだぜ？」

「その通りよ」

「私は、派手な方が好きなんだぜ」

「ええ、そう」

「あつ来たんだぜ」

「来たみたいね」

「いただきますだぜ」

「いただきます」

少女食事中…。

「ごちそうさまだぜ」

「ごちそうさま、中々美味しかったわ」

「ああ、また来たいな」

「それじゃあもう用は無いけどどうする？」

「うーんあいつの事なんか知ってるやつなんて限られてくるだろうかな」
「あ、また来たいな」

「取り敢えず訛った身体を戻す為に」

あれ（弾幕ごっこ）やる？」

「ああ、でも、それにしても急で、霊夢らしくないぜ」

「う、うるさいわよ。ただあの子が強くなった時に対処ぐらい出来ないと」

「私は何日でも受けて立つぜ」

「じゃあ森の方に行きましょうか」

「ああ、そうだぜ」

私達は、この後、弾幕ごっこをして、その後の日は、弾幕ごっこを

したり、探したりしたけど、結局見つからず。そのまま新月の日を迎えてしまった。

そして新月の日

第6話新月の日

「さて、今日は4月1日、新月の日よ」

「そうですね」

私達は、廃墟に来ていた。

「そういえば、この刀をどうすれば良いんです？」

「それは、月に行きなさい」

「何ですか？」

「その刀の名前は夜斬刀。^{やざんとう}その名の通り、夜を切れる位切れ味が良くて、凄いい刀よ」

厨二臭いです。

「夜を？ですか？」

「そうその刀は、とある鉱石を月の石で研ぐ事によって作られたの」

「とある鉱石？」

「ええ、鋼や月の石、銀や緋^ヒ緋^イ色^ロ金^{カネ}、黒曜石などよ。」

色々あるです。どうやって作ったのか、謎です。

「どうやって月の石で？」

「わ、私の不注意で」

不注意で月の石って。

「はあ」

「だから、月の巫女と戦う事になるかもしれないけれど」

ああ、綿月ですね。

「分かったです、行けばいいんです？」

スキマを開けて、月に向かう。

「行つたわ、出てきなさい」

そこには、霊夢と魔理沙がいた。

「あら、気づいていたの？」

「ええ、狙ってくるのは、分かってたわ」

「それより、通してくれないのぜ？」

「この先は月よ、それでも？」

「ええ、行くわよ」

「ああ」

「言いたい事はそれだけね」

一方その頃月では

何か聴こえた様な　…　まあいいです。

「ここが、月ですか」

「ええ、そうよ」

……。

「綿月依姫ですか」

はあ、宣言通りですか。

「何故私の名前を？そんな事は置いといて、何故貴方が？貴方は、幻想郷で巫女をしていたはずですよ？」

「人違いです。私は霊夢じゃ無いのです。それに、この刀の錆を無くしたいだけです」

「その刀は？」

「この刀は、夜斬刀っていつて。夜を切れる位切れ味が良くて凄いなのです」

本当かどうかは知ら無いです。

「とにかく、ここは通しません」

（夜斬刀？何処かで聞いた様な）

「そうですか。じゃあ、戦うしか無いんですか？」

「ええ、精々頑張る事ね」

「じゃあ」

私はまず、依姫の後ろにスキマを開ける。中身は、何も入れて無い。そして、前にも開ける。前の方は、沢山の刀などの類がある。そして、右にも左にも開けて、前と同じ様に刀などがある。ここまでかかった時間は5秒。流石に私でも、この速度で来られたら、出来るかどうか。あれ？何かブツブツ言ってる。まあいいですそれより早く。…行け！

…　パリーン

ガラスが割れた用な音が響く。

何が起こったのです？えっと、スキマで攻撃しようとしたら、急に壊れたです。…（。ㇿ）ハッ！。依姫の力だとすると、厄介です。今のが能力だとすると、触れる事すら出来ないですね。うーん、向こうが孫悟空だったら、私は、ヤムチャぐらい差があるです。向こうが加賀さんだったら、私は暁型位差があるです。

正直、勝てる見込みは低いですね。そう言えば、そもそも戦う為に来た訳じゃ無いのです。月の石で研ぎ直したら治るはずです。じゃあ、石だけ取って帰るのが得策なんじゃ？

ん？何か足音がするです。

「此処に居たのね」

何で霊夢が？

地上では

「生憎時間がないから」

霊符「夢想封印」

「じゃあ私もだぜ」

恋符「マスタースパーク」

「ちよつと、同時にやるのは反則でしょう」

「反則じゃない。一応、ダブルスペルは、相手を完封してしまうから、あまり無いだけで」

「つつ、こんなにくらったら、ただで済まないわ」

ピチューン

「はあ、残機が一つ減ったじゃない」

「通してくれるわよね？」

「ええ、でも霊夢だけね」

「何でだぜ」

「貴方のせいで月に穴が開いて、困るのは私達よ」

「大丈夫だぜ、そんな事しないぜ」

「私も、魔理沙を月に行かせるのは、あまり良くないと思うわ」

「霊夢」

「それに、普通…の魔法使いだしね？」

「私は、別に良いんだぜ」

「あつ」

「帰っちゃったわね」

「見苦しいわね」

「そんな事はないわ。さあ、くぐりなさい」

さつきの続き

「此処に居たのね」

何で霊夢が？

「お前の噂は聴いている。博麗霊夢」

「あらそう。でも、その子に勝つのは私だわ」

勝つの前提なのですね。そうだ、この隙に依姫は無理だから、せめて霊夢だけでもです。よし、蹴る事にするです。私の能力は、何処か一部でも触れれば、コピー出来ますから。よいしょ。キック！それに掴んだとしても、触れた事になるので。

よし届くです。掴んだです。

「何やってるの？貴方そんな事しても意味がna（。ん）ハッ！」
いきなり振り払う。全くです。

「どうしたんだ？」

「忘れてた。この子の能力」

「能力がどうかしたのか？あいつの能力は紫と一緒じゃ」

「違うわ、あの子の能力は…」

「触れたものの能力を、コピーする程度の能力です。話は終わったですか？」

「まさか、この博麗の巫女の能力を、コピーされるなんて」
なんか…。カッコイイです。

「そんな能力を持っていたのか。チートじゃないか？」

（今、豊姫姉様は出張だし）

「まあ、さつきまで紫の能力しか持っていなかったんですから。でも霊夢の能力をコピーしたです。そういう理由で」

滴符「夢想天生」

おお、ちゃんと自分様に名前が変わるのですね。

ピチューン×2

「まさか、自分の技にやられるとはね」

「ああかなり強いな」

そんな事は置いとして、さっさと行くです。うーん。月の石で研ぎ直したらいいんです？だったら、何で新月の日じゃないといけないんです？

そこに…、お姉ちゃんがいた。

「あつ、お姉ちゃん」

「こんな所に居たのね。さあ、早くやるわよ」

「やる？です？」

何を？まさかr-18にする気じゃ。

「えつとね、その刀を治すには、研げば良いんじゃないの」

「じゃあ、どうすれば良いの？」

「それはね、月に直接刺して抜くの」

刺して抜く。ある意味卑猥です。

「それだけです？」

「もちろん。それだけじゃないわ。それを抜けるのは、選ばれた人じゃないと抜けないわ」

何それ、カリバーンの選定の剣みたいなのです。

「根元まで刺せば良いんです？」

「ええ、やるといういわ」

私は刀を地面に突き刺し、そして一旦手を離し、息を呑む。そして柄を右手で持ち引っこ抜く。すると、黒いオーラが纏いはじめる。鞘に入れると、鞘まで黒いオーラに侵食され。オーラが消えたときには、今まで茶色かった鞘が、真っ黒になっていた。

「おめでどう選ばれたみたいだわ。しかも、鞘までもが使用を認めるなんて」

「鞘が？です」

「ええ、これまで見てきたけれど、鞘の方まで使用を認める事は一切無かったわ。それより、早く逃げるわよ」

「はいです、お姉ちゃん」

「何処いったの？」

「もう帰ったと思う」

「そうなら私も帰らせて貰うわ」

「ええ」

（それより夜斬刀よ。お姉様は何か知ってるかな？）

第7話夜斬刀

この刀は夜斬刀。元々、色々な鉱石を月の石によって研がれ、その切れ味は、夜をも断ち切る。凄い刀らしいのです。ですが、この刀は主人を選ぶです。それで、私はその刀の主人として選ばれたです。それに、前回までは無かった、鞘も主人として認めたらしいです。でも、正直どういいう効果があるのか。全く分からないため、紫に聞く事にしたです。

「私が知ってるのは、夜の方が強いって事と、新月の方が強いって事位。あと満月の日の真昼間でも、数珠丸恒次（天下五剣）位じゃないと、その刀と互角に戦うのは、出来ないわ。でも、その力をまともに扱える人なんて、1度も現れたことは無いわけど。でも、鞘も認めた貴方なら、使いこなせるんじゃないかしら？」

「分かったです」

取り敢えず鞘から抜いてみるです。おお、刀身が真っ黒です。鏢つばは、付いて無いようです。ん？能力が付いてる、えーつと。

夜を斬れる程度の能力。

カッコイイです。えつと、刀身の長さは2尺3寸位です？（70cm）（和泉守兼定と同じ）それにしては、軽い用な気がするですけど。振ってみたら分かると思うです。右手で持って、左手もちやんと添える。そして振り上げて地面に当たらない様に振る。

普通、そんな長さの刀は、初心者にはこんな事、出来ないです。それじゃあ、右手だけで持ってみるです。

おお、両手で持った時とは違って、若干重いこの感じ。

それじゃ、右上に構えてみるです。そして、そのまま左下に袈裟斬り。何か不思議な感覚です。まるで、刀が動いてくれてる。みたいな？うーん、分から無いです。そもそも幻想郷では、刀はあまり要らないです。

まあ、後回しです。

そう言えば、お姉ちゃんに、人里で過ごしたいって言ったら、「仕方ないわよね」と言って、お金を出してくれた。

そう言えば、月から帰ってからは、霊夢の能力を、使える様にしようとしてるです。

ものに能力を付けた場合、普通にやるより魔力の消費が少ないです。普段は靴に飛行能力を付けてるです。

人里かー、どうやって生きて行こう。うーん、黒麗だから神社でも建てるんです？どうせなら、自分自身を元にした神様が良いです。そうだな。

その神様は、あらゆる、妖怪などの力を使う事が出来て、持っている刀は夜斬刀といい、夜を斬れる位鋭い刀である。その立場から、人と妖怪のどちらの味方をする。だが何故か、妖怪側に付く事が多い。それは巫女にも言える事で、どちらかと言えば妖怪の味方をする事になる。黒麗の巫女はそのせいで、批判を浴びる事が多い。

こんな感じで良いです？私的に博麗は人側で。黒麗は妖怪側って感じです。良し、じゃあ人里に住もう。まず、人里の門の前にスキマを開けて入る。

少女移動中…。

「あつ貴方は！」

「ああ、おはようです阿求さん」

そこには阿求がいた。まあ此処に住んでるだから、会っても仕方ないです。

「あの、宜しければ取材を」

「良いですよ」

「では、こちらに来てください」

「はいなのです」

「では、この部屋で待って居てください」

「分かったのです」

ふーん、the・日本家屋です。

「お待ちせしました」

「いえいえ、客人ですので」

「まず、貴方の名前って、何て言いますか？」

「私の名前は、黒麗漓夢です」

「能力は？」

「触れたものの能力を、コピーする程度の能力」

「チートですね」

「はいそうなのです」

そんな感じで話合ったです。此処に暮らそうと思ってるです。と話すと、丁度良い大きさの空地があるみたいなのです。私は、そこに行ってみたです。

外れにある空地。

妖怪側の神社。と、話していたですから、これで充分です。取り敢えず、建物を建てるにしても、資材が無いので、取り敢えず、紫から貰ったお金を渡したら、結構残ったです。それに周辺に家は無いです、何故なら、人里外れた土地を買ったからです。此処から妖怪の山が見えるのに。やっぱり森に近いから、妖怪が来やすいからだと思うです。取り敢えず家に帰るです。

「ただいまなのです」

「おかえりなさい、今、藍が食事の準備を

しているわ、何か買ったの？」

「取り敢えず、森に近い所に空地が

あったですから、村の土地関係をやってる人に、買っても良いですか？って聞いたたら、「あああそこなら別に良いさ」って言ったんで、「じゃあ一応皆さんに、建てるよっていう注意喚起の分でっ、て少量を渡したです」

「貴方ねえ。まあ、本人が良いんだったら別に良いわ、それより、明日はどうするの？」

「明日は、神社を建てようと思うです」

「そうなの」

「ご飯出来ましたよー」

「はい」

「今行くです」

美味しかったです。

「ごちそうさま」

「ごちそうさまなのです」

「ごちそうさま」

今日はカレーだった。美味しかったです。さて、お風呂です。まず、髪を解いて、服も脱ぐ、そして。

カット

ねえ、見られると思った？ねえ、今どんな気持ち？ねえ、どんな気持ち？あつ、石投げ無いで。あつ、そんなの投げられたら死んじゃう

↑作者

何やってるの作者

「おやすみです」

「おやすみなさい」

第8話黒麗教？

そこは人里の外れにある神社。名を、黒麗神社と言うらしい。黒麗神社に祀られているのは、黒麗様といい、あらゆる妖怪などの力を使う事が出来る神様。と、言われているそして、人と妖怪の間に立ち、両方の味方をするが、何故か、人より妖怪の味方をする方が、多くなってしまう。それは巫女も同様で、人に嫌われてしまう。この神社は、つい最近立ったばかりなので。余り信仰はされていない。が、依頼と言って、人間関係から妖怪退治まで、幅広く対処してくれる。しかもお金は、「私の働きに見合うと思えば、0 銭でも良いです」と言い、こうも言っている。「お賽銭箱に入れてくれれば、ちようど良い」と言っている。異変が無いと動かない、何処かの巫女とは大違いである。彼女は実質ボランティアをしていて、それに感謝した人は、お金をあげる。という様な構図である。また彼女自身は怒る事は無いので。事故で、お風呂を覗いちゃつても。

「ん？私の様な身体に、興味をお持ちなのですか？」

と言ってタオルで大事な部分は隠れてる。

あつ……。と、とにかく失礼しました。

何だったんだ？裸を見せても平然としてるなんて。それより、可愛くて胸が小さかった。我が生涯に一遍の悔いなし。まじ今死んでもいい……。って、何余韻に浸ってるんだ私は。この後私は、その辺にあった大きな石に頭をぶつける。何度も何度も。頭がおかしくなりそう、ハア、はあ、頭が痛い。取り敢えず家に帰ろう。それにしても何だったのか、良く分からない。頭の処理が、追いついていない。

何だったんです？あの子。まあ、私の身体が気になるのです？仕方ないですね。男の子は、小学六年生ぐらいから興味を持ち初めるです。まあこんな事はおいというて、読者は混乱しているです。それとも私のからだを？や、止めにするです。あの後は、自己流の剣術とかで妖怪を退治したり、人間関係を解消したりとかしたです。今思えば、結構やってるですね。あー。こうやって平和な日々も悪くないです。

まあ、もうすぐ暇じやなくなるのです。はあ、私は一週間に1日位の頻度で騒がしい位が、丁度いいです。そう言えば、まだ紅魔館来て無いです。お賽銭は結構ある程度はあります。そろそろ特別依頼も来る頃です？それより暇なのです。

K a t y u s h aでも歌おうかな？やつぱり止めておこう。あー、ピロシキとかボルシチとか食べたいです。

チリンチリン

呼び鈴です。誰か来たみたいです。

「ハイなのです」

東方紅魔郷く the Embodiment of Scarlet Devil.

第9話 瀟洒なメイド

私の名前は十六夜咲夜。紅魔館のメイドをしている。ある日、お嬢様が幻想郷なる所に行った方が面白くなると、運命が囁いてるわ。と言い、その所の人里の外れには、面白い神社がある。と言う。私はこの神社に向かいました。そして呼び鈴が置いていたので、鳴らしてみました。

チリンチリンと、甲高い音が鳴る。

「ハイなのです」

という声の中から聞こえる。10数歳位だろうか

「こんにちは、今日はこういった用件です？十六夜咲夜さん？」

なっ私の名前を？いや待て、此処に来てから。一切名前を言った事は無いはず。

「それでは、中にどうぞです。咲夜さん」

やっぱり聞き間違いじゃない。それよりお嬢様の事を。

「何故私の所へ来たのです？咲夜さん」

やっぱり、そのまま呼ぶのね。

「えっと、お嬢様が人里の外れには、面白い神社があると仰りまして」

「レミリアですか」

「はい」

何で知ってるの？未来人なのでは？それより。

「貴方の能力は？」

「私の能力ですか？私の能力は、触れたものの能力をコピーする程度の能力。なのです」

そんなの、触れられたら終わりじゃない。能力っていうのは、その人にとって自分だけが使える個別財産みたいな物なのに。それより、何故触れないの？」

「私は、今のままでも充分なのです」

「どんな能力を持ってるの？」

「境界を操る程度の能力と空を飛ぶ程度の能力。冷気を操る程度の能力と、闇を操る程度の能力です」

その数で充分って。

「それより、お嬢様がお呼びです」

「はいなのです」

「では」

目を開けると、レミリアが

椅子に座ってこちらを見ていた。

「おはようなのです」

「ええ、おはよう」

「どの様な用件なのです？」

「話が早くて助かるわ。私達は幻想郷をのっとりたいの」

「それに、私の力が欲しいのです？」

「ええ、引き受けてくれるかしら？」

「特別依頼って事で良いです？」

「特別依頼？」

「はい、依頼主^{マスター}に手を出すものを”やる”。という依頼なのです」

「ええ、それで良いわ。それよりお金の方は？」

「私の働きに見合うのであれば、0 銭でも」

「え、ええ。貴方がそれで良いんだったら」

混乱してるです。

「じゃあ問うです、貴方が私の、マスターですか？」

「ええ、そうよ」

右手の平を差し出す。勿論、コピーする気は無い。そしてレミリアは、手を置く。

「はい、マスター。これでマスターが、契約を解除しなければ、貴方が私のマスターなのです」

「それより、どうしたら幻想郷を私の物に出来るのかしら？」

「マスターは派手好きですか？」

「ええ。現に、この館は真つ赤だもの」

「では、赤い霧などはどうです？」

「霧ねえ。もうちよつと派手なのが良いわ」

「うーん」

駄目ですかー。

「神社の方は大丈夫なの？」

「ええ、此処を暫く離れると思う。と伝えているのです」

「じゃあ咲夜、お昼の準備」

「はい、分かりました」

「貴方はコピーしようとしなの？」

「コピーして欲しいのです？」

「いいえ、何故貴方がコピーしようとしなのか。気になってね」

「特に理由は無いですし、今のままで充分だと思ってるです。でも戦況次第では、増やすのも有りなのです」

「そう」

「昼食が出来ました。お召し上がりください」

「今行くわ」

「はいです」

昼食は私の自己紹介からはじまって、美味しい食事を食べながら満喫した。

「お風呂案内するわよ」

「はいなのです」

「ここよ」

広かったです。

これぞ、大浴場みたいだったです。

少女入浴中

脱衣場に戻ると、

ネグリジエが置いてあったです。

17世紀なのです？

まあいいです。それより、

何処の部屋で寝たら良いです？

うーんまあいいです。

あの後、結局適当に

空いてる部屋に入って寝たのです。

翌日

今日は館の見回りをするです。掃除は咲夜さんがやってくれるですし、食事なども全部咲夜さんですから、あまり、館内でする仕事が無いらしいです。ので、見回りをするです。

まず此処が大図書館ですか、大きいです。ちなみに、この紅魔館では、私の事はリーと呼んでもらってるです。

「おはようです、パチュリーさん」

「あらおはよう、早いね朝」

「はい、朝には強いので」

「まだ日も登って無いわよ」

「私の平均です」

「そう今の時間だったらまだ、レミイが起きてるかもね」

「たしかにそうですね、それでは」

「ええ」

少女移動中

ん？廊下の途中に随分古い石の扉があるです。

もしかしてフラン？だったら開けるです。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

開いたです、通路ですか？下に階段が伸びてる、この先です？あつ、これまた古い扉です。でも木で出来てる。

ギィ

「ん？新しいオモチャなの？」

違うんだけど、乗っておこう。

「まあ、そんなかんじなのです」

「貴方お名前は？私はフラン宜しくね」

「私は黒麗漓夢なのです。気軽にリーって呼んでです。宜しくね、フラン」

「うん！ 宜しくりー！」

そう言うのと、とても嬉しそうな顔でこちらを見ている。

「私……ずっと独りボッチだったから」

「知ってるです」

「そうなの？」

「はいなのです」

「どんな能力持ってるの？」

「えーっと、私は触れたものの能力をコピーする程度の能力。を持つてるのです」

「凄い凄ーい。今、どんな能力を持ってるの？」

「今はねー境界を操る程度の能力と空を飛ぶ程度の能力。闇を操る程度の能力と冷気を操る程度の能力」

「へえー、四つなんだー。私もして欲しいなー」

「コピーを？ですか？」

「うん、ね？良いでしょ？」

「分かったのです。では、手を出してです」

「うん」

ちなみに、何でもかんでも触れたものの能力をコピー出来るわけじゃなくて、使おうと思わないと使えないので、便利は便利。

「はい、コピーしました」

「じゃあ早速使ってみて」

うーん4つの能力に慣れてるとはいえ。です

「分かったです。まず、あの熊のぬいぐるみでいいですか？」

「うん良いよ」

「じゃあ、きゅっとしてドカーンです」

右手を出して手を握る。

すると、間が開いて熊のぬいぐるみが木っ端微塵に壊れる。

「こんな感じなのですか」

「凄いね。本当に出来るんだ」

「うん」

「良いなー、私も同んなじ能力が良かった」

「そんな事ないのです。普通、能力をコピーされるのは嫌だ。っていう方が多いのです」

「そうなの？」

「うん、あつもうこんな時間です、じゃあまた。なのです」

「うん、またね」

さて朝食の時間です。今日の朝食は、コーンスープにフランスパン。という簡単な物だった、もちろん美味しい。会話中に「フランに会って来た」と言ったら。少し顔を暗くしながら「どうだった？」とレミリアが返して、「変な子です。能力を使ってみて、喜んでる様子です」と返し、「そう」と小さく呟いていた。周りは驚いたのか。パンを食べる手が止まっている。「ごちそうさまなのです」私がそう言うと、レミリア以外が一斉に、「ごちそうさま」という。

やれやれ、今日は騒がしくなりそうです。

特別話新年

今日は大晦日、紅魔館にいる。

紅魔館で、新年を過ごす事になった。

「もうこんな時期だわ。」

時が進むのは、早い物ね」

「そうですね」

「そう言えば、今回は、

メタ発言しても良いのよね?」

良いよ。

「だ、そうです」

「じゃあ、咲夜。ご飯を用意して」

「はい、お嬢様」

「じゃあ、私は、能力を使ってみるわ」

「はいです」

少女退屈中...。

「面白い未来だったわ。まさか、あんな事が起こるなんて」

「あんな事って?」

「何でも無いわよ」

「何でも無いって何ですか?」

「ふふっ」

「ご飯の準備が出来ました」

「今行くわ」

「分かったです」

「なんか...。赤い料理が出てきたです、
ボルシチですか?」

「ええ、特別なボルシチよ」

「特別?」

「食べたら分かるわ」

「いただきます。です」

「いただきます」

少女食事中…。

「とても美味しかったです」

「ええ、そうでしょうね。だって」

「だって？」

「それ、人肉なもの」

「そう… ですか。美味しかったです。ありがとうございます…」

「それは良かったわ」

「はあ」

「瀉夢は、死なないわよね」

「うん、たぶん死なないと思うです」

「リー、遊ぼー」

「フランですか、良いですよ」

少女戦闘中…。

「騒がしいわね。もうすぐ新年だというのに、縁起でも無い」

「ごめんなさいです」

「はいです」

「良いじゃないですか、賑やかなんですから」

「賑やかと、騒がしい。は、違うわよ」

「さあ、新年の準備をするわよ」

「はいです」

「まず、何から始めますか？」

「そう言えば、ドイツから来たんですか？」

「何故そう思うの？」

「だってイギリスは、正月を簡単に済ませてしまうです」

「ええ、そうね。私は、キリスト教が嫌いだから、クリスマスなんか知らないわ」

「そうですね、十字架は、弱点ですからね」

「ええ、そうなの。元々、効果は無かったのだけれど。多くの人々が、それを信じたからだわ」

「に」

「・・・に？」

「にぱ♪なのです」

「にぱ♪？」

「では、ちやつちやと、宴を始めますです」

「そうね」

「ドイツではこの、大晦日の宴こそ、メインみたいな物ですもんね」

「じゃあ、ポーカ―でもやりましょう」

「分かったです」

少女遊戲中・・・。

「フオーオブアカインド。です」

「負けたー」

「何故この、私を持ってしても勝てなかったのかしら？リ―」

「そんな事言われても、です。イカサマは出来ません」

「確かに、咲夜もいるもんね」

「はい、不覚でございます」

「それじゃあ、そろそろカウントダウンを始めましょう」

「そうですね」

「一二三10!・・・9!・・・8!・・・7!・・・6!・・・5!・・・4!・・・3!・・・2!

・・・1!・・・0!ハッピーニューイヤ―」

「あけましておめでとう。です」

「ええ、今年もこの作品を、宜しくね」

「誰に話しているんですか？」

「何でも無いわ」

「そうですね」

「(この作品を見ている貴方だけに、この作品を読んでくれてありがとうございます。期待しないで待たないでください。って書いてあるけど、実際読まれるのは悪くないみたい。だから、これからも宜しくね)」

第10話 紅の悪魔

「そう言えば最近、神社にアイツがいないみたいだぜ」

「ええそうみたいね」

「しかも、暫く離れるかもって、事前に言ってたみたいだぜ」

「ふーん」

「興味無いのぜ？もうそろそろ何か起きるんじゃないかって考えてるんだぜ」

「何時もそんな事言って、何も起きないじゃない」

「今回はそうだな。もし、何も起きなかったら、人里で団子を奢ってやる」

「よし、それじゃあ、魔理沙の耳に届く前にかたずけてやるわ」

紅魔館

「うーん…、そうですね。やっぱり日光を遮り雨も降らさない為に霧がいいと思うです」

「でも、何かいまいち派手さが足りないというか」

「そうです？寝て起きたら空が紅くなっていつて。しかも日に日に病気にかかったり。紅い霧も大きくなって行くのは、かなりの恐怖だと思うのです」

「確にそこまで被害が及ぶのなら、名前を知らない人は居なくなるわね。霧の案採用よ。早速パッチェに伝えといて」

「分かりました」

「さて、妹とは仲良くやってるかしら？」

「ええ勿論です。最近では、行くだけで喜んでくれるです」

「私には出来ないから。ごめんなさいね」

悲しそうな表情をみせる。正直男だったらやばかった。

「私のマスターなんですから、行きたい方向にく、向きたい方へ向く。そして、それに私がついて行く」

「そうね。それじゃあ、呼び止めてごめんなさいね」

「いいえ、マスター」

今は晩御飯を食べ終わった後です。あの後、何があったと言われれば。

美鈴に刀で戦闘し勝って、素手では負けた。

何故かって？肉弾戦は嫌いです。

そして、その様子を見ていた咲夜さんが私の相手になってくれた。霊夢の勘の能力でもコピーしていたのか、適当に行った所が当たらないという事が沢山起こり、私が刀を寸止めをして、私の勝ちで決まった。

その後はパチュリーの作った頑丈な結界により行ったフランと戦いは、引き分けになった

パチュリーは弾幕で来て欲しい。と言ったです。でもあいにく、氷の弾幕しか出せないなので、アグニシャインを出されて溶けたです。私の負けなのです。その後、パチュリーに能力の事を伝え、パチュリーは自分の事をパッチェと呼んで欲しい。と、そして能力をコピーしなさい。と言ってくれたです。正直涙腺崩壊しそうです。ちゃんと能力をコピーしておいたです。

こんな感じで1日中戦闘をして2勝2敗1分。丁度いい感じになって、話があると言われて、幻想郷について話たりして、冒頭に戻るです(紅魔館の)。結局私の案である、紅い霧を使う案で決まり、そして、それをパッチェが実行する。という事で決まった。

私は、フランの所に来た魔理沙と戦うらしい。はあ。パッチェの能力も使える様にしないと。

その後、私達は各々戦闘に向けて。各自準備をしていた。

咲夜さんはナイフの手入れを。美鈴は気の練習。

私は、パッチェと魔法の練習。時々フランがやって来て弾幕の練習を受ける。

そんな感じで当日になった。

第11話 the Embodiment of Scarlett Devil

いよいよその時が来た。

「準備は良い？皆」

「「「「はい（なのです）」」」」

フランは部屋で待機です。

私はフランの部屋の扉の前に待機です。

「行くわよ、パツチエ」

「わかったわ、レミイ」

彼女は頷いて、本に目を通す。

真剣な表情であり、何かブツブツと言っている。

「衝撃にそなえて」

今は、幻想郷にいるが魔法で隠してあるので。

それを解くのに衝撃が来るらしいのです。

ドゴゴゴゴゴ

解くのにあまり魔力は必要無いようです。

「紅い霧行くわよ」

「ええ」

ドゴゴゴゴゴゴ

「やつとですね」

「そうだね」

「どうかしたのです？」

「いいや？何でも無いよ」

そう言い、可愛らしい声が中から聞こえる。

多分数日はそのままだろう

霊夢達が来るのは数日後だろうです。

『聞こえてる？』

「はいなのです、マスター」

『巫女が高速で来てるわ充分注意して』

「分かったです」

「どうやら、歴史が変わって来てるようです。」

「きゅつとしてドカーン。きゅつとしてドカーン」

可愛らしい声が聞こえてくるです。

『今、美鈴が相手してるわ』

「分かったです」

「そう言えば、フランの能力を使ってる時は、

治癒能力が高くなるみたい。」

「暇だからアレ歌うです?」

「うん」

『ちよつと、歌ってる暇じゃ無いでしょ』

「暇です」

『暇です、じゃないわよ』

「ごめんなさいです」

『そっちは、隣にいた白黒が向っているわ』

「分かってるです」

『頑張ってるね』

「白黒が来るみたい」

「白黒って?」

「魔理沙って言って、巫女の相方です」

「へえー、魔理沙。」

「そう言えば、巫女の方の名前は?」

「博麗霊夢って言うです」

「へえー。ん? 博麗霊夢、黒麗漓夢

・・・ 二言違いだね」

「話は此処らへんにするです」

「分かった」

「よう」

「ハイなのです」

「こんな所にいたんだぜ？」

「白黒がきたです、どうするです？（小声）」

「そうだね。戦ってみたい」

「分かったです」

私は扉を開ける。

「出ます」

「？」

「おはよう。貴方が魔理沙？」

「えっ、あつうん。そうだぜ」

「私と戦ってくれるのね？私はフラン。

フランドール・スカーレット」

「宜しくだぜ、フラン」

「うん、それじゃ始めようか」

「ああ、そうだぜ。外で良いんだぜ？」

「うん、行ってくるね」

「ハイなのです」

会話を終えると、魔理沙は、
箒を持ち、窓から外に出る。

フランもそれに次ぐ。

正直、見る事しか出来ないのはつらいです。

少女観戦中

どうやら、魔理沙の勝ちみたいだ。

「負けちゃったー」

可愛い。男だったら（ry。

『こっちは負けたわ』

「分かったですマスター」

「？」

「よし。行くです」

「ついて来て」

「えっあつうん」

少女移動中

「この部屋です。扉を開けるです」

「ああ、分かったぜ」

扉を開けると、そこにレミリアが座っている。

天井は……無い。どこかいったのです？

「ごきげんよう」

「ああ」

「さて降伏するわ。」

それと、たまに私の所に遊びに来なさい。

食事などは振る舞うわ」

「じゃあ、帰らして貰うわね」

「泊まって行かないの？もうこんな時間よ」

「そうね、蹴るのも何だし」

「名前は？」

「私は博麗霊夢」

「そちの白黒は？」

「白黒じゃ無いぜ。私は霧雨魔理沙」

「じゃあ、咲夜。食事の準備を」

「はい、かしこまりました」

「リー、ちよつと」

「何です？」

「確か、私が契約を解除しなければ、
ずっと私がマスターなのよね？」

「はいそうです」

「解除するにはどうしたらいいの？」

「えーつと」

少女解除中

「契約は解除されたです」

「最後に私の能力と咲夜の能力を、

「コピーして行きなさい」

「良いのです？」

「ええ。貴方は、充分強い」

右手を差し出す。そしてそれに触れる。

「ありがとうございます。レミリアお嬢様」

「レミイで良いわ。貴方は今から、私の友達よ」

「はいなのです。レミイ」

「お食事の用意が出来ました」

「分かったわ。今行く」

「はいなのです」

少女食事中

「あの、リーさん」

「ん？何ですか？咲夜さん」

「あの……。私の能力を」

あつ、成程です。

「分かったです」

右手を差し出す。

別に右手じゃないといけない理由は無い。

「はい、コピーしたですよ」

「それでは」

うーん。一気に2つもですか、取り敢えず。

咲夜さんの方から使えるようにしよう。

さてお風呂ー

少女入浴中

「色々あったのですー」

浴槽に浸かりながら、そんな事を言う。

「そうね」

「レミイ」

「何？」

「いや？何でも無いです」

「そう言えば、まだお金渡してなかったわよね」

「ええ、そうですね」

「どれ位渡そうかしら」

「私の働きに見合えばいくらでも」
「そうね。分けて渡しましょうか」
「ええ、それで良いです」
さてそろそろ出るとするです。
やっぱり、ネグリジエなのです。
ふーおやすみです。

翌日

「さて帰るですか」
「ええ、何時でも待ってるわ。リー」
とレミイ
「遊びに行くからね」
とフラン
「待っています」
と咲夜
「何時でも魔法を教えるわ」
とパツチエ
「待っていますから」
と小悪魔
「何時でも相手になりますから」
と美鈴
うわあ、皆。
「ありがとうございます」
「人気者ねえ」
「ああ、男だったらその立場を奪ってやりたいぜ」
正直私も男だっ（ry
「じゃあまたです」
私は神社に帰った。
なのです。

紅魔異変終了

第12話キャラ紹介？

紅魔郷異変は終わった。

そして、あまり長くは無い平和が訪れる。

そして私は、能力を使える様に練習していた。

「ふう、これくらいですね」

やっぱり、コピーした最初の方の能力は、魔力の消費が凄い事になるです。

あと、刀をどうするか悩んでいるのです。

うーん、どうしようです。まあいいです。

今日の依頼は何も無しです。休日ですか、暇ですね。

「遊びに来たよー リー」

「はいなのです、上がってください」

フランがやって来たのです。本日は曇りです。

「へー、日本の造りって、こうなってるんだ」

「麦茶で良かったら飲むです？」

「うん！ 飲む」

「分かったです」

フランはお茶が出来るまでの間、

物珍しい様な目でこの部屋を見ていた。

「はいなのです」

「美味しい」

「それは良かったです」

「それにしても、質素な造りなんだね」

「まあ、それが日本家屋ですから」

「ふーんそうなんだ」

暇

じゃあキャラ紹介でもしたら？↑作者

「そうですね やりましょう」

キャラ紹介

名前 黒麗^{こくれい}漓^り夢^む

身長155cm

容姿 APPl5 (可愛い位)

で、霊夢と色違いの巫女服、(黒い感じ)
を着ていて、髪の毛は、黒色。

ステータス

hp9, mp18, san95

str10, con9, pow18, dex8

appl5, siz10, intl8, edu12

アイデア90、幸運90、知識60

職業巫女

オカルト40、聞き耳70、経理30、心理学50

説得40、図書館60、信用60

趣味

我流剣術90、目星70、投擲70、

他の言語(ロシア)22、

回避15、母国語(日本語)60

(我流剣術の初期値は、20とする)

能力 触れたものをコピーする程度 of 能力

これまでコピーした能力

・境界を操る程度 of 能力

・空を飛ぶ程度 of 能力

・冷気を操る程度 of 能力

・闇を操る程度 of 能力

・ありとあらゆるものを破壊する程度 of 能力

・魔法を扱う程度 of 能力 (主に精霊や属性)

・火水木金土日月を操る程度 of 能力

・運命を操る程度の能力

・時を操る程度の能力

好きな物

自由，ロシア

好きな食べ物

人肉ボルシチ

嫌いな物

縛ろうとするもの（たとへば法律とか）

嫌いな食べ物

ラーメン，パスタ，甲殻類

性格

やりたい事をやるのが1番だと思っており。

怒る事は、あんまり無い。

ちよつとしたあらずじ

紫が、滴夢にしか出来ない事で、

未来を変えて欲しい。と言われ、名前をヒントに、

自分自身を元にした神様を作る事にした滴夢。

そして完成させると、そこに咲夜が来て紅魔館へ。

そして、特別依頼を受け紅魔郷異変を手伝う事に。

で、霊夢らによって攻略され、神社に戻った。

※ちなみに主人公のモデルは作者自身です

「へー。リーのモデルって、作者だったんだ」

「はい。そうみたいです。」

「sanって何？」

「たしか、正気度じゃなかったっけ？」

「へーえ、そう言えば、ロシア好きなの？」

「ええ。ロシアは好きなのですよ」

「へえー。そーなんだ」

「今思ったけど。今のままでも充分チートです」

「だね」

「何してるの？」

「久しぶりです。紫お姉ちゃん」

「ええ、それで、これは何やってるの？」

「物語が一区切りしたのです。」

「だから、私の設定をまとめてるです」

「へえー 好きな食べ物、人肉ボルシチねえー」

「気にしないでです」

「ねえー 遊ぼー」

「ああ、遊ぶ（殺し合いをする）のです」

「久しぶりだね」

「うん」

「貴方達…」

「何か言ったんです？」

「ん？何も」

「じゃあ位置に着くです」

「分かった」

距離を離れる。そして、

フランのきゅつとしてドカーンから、はじまる。

まずフランから向って来る、勘があるから

当たらない。だけど、吸血鬼の早さなら。

ドン

と重たい音が響く。

流石に、吸血鬼の早さは伊達じゃ無いです。

でも、私には咲夜能力があるから、

なんとか逃げれた、危ない危ない。

この後も、死闘を続け、引き分けて終わった。

第13話名無しの西洋人形

前編

人里には、様々なお店があります。例えば、うどん屋から団子屋、傘屋もあります。そして、子供達に人形なのが、人形劇です。

「はい、人形劇始めるわよー」

その声が聞こえると、前から座っていた子に加えて、十数人が集まり、人形劇が始まる。

「むかーし、昔、ある所に（ry」

人形劇は終わり、子供たちはとても満足気に帰って行く。

「おはようなのです」

「ええ、おはよう」

ちなみに、会うのはこれが初めてでは無い。

「面白かったですよ」

「ええ、もちろんだわ」

「シャンハイ」

隠れていた上海が出てくる。

「こら、上海。隠れといて、って言ったでしょ？」

「ふふっ」

「何？」

「いやあ、上海って可愛いなー。って」

「…もし良かったら、私の家に来ない？もっと人形があるわよ？」

「はい、そうするです」

「じゃあ、付いて来て」

「分かったです」

少女移動中

「ここが私の家よ」

「へー、洋風ですね」

「まあ、上がって頂戴」

内装は、窓から見れるため、ある程度分かる。玄関を開けるとまず、靴棚はあるが、使われていない事が分かる。そして、視線を戻すと。机や小さめの棚などの上に、様々な人形がある事が分かる。上海、蓬

茶、大江戸……。とにかく、一杯ある。

「はい、お茶」

「ありがとうございます」

「そう言えば貴方ってコピー系の能力を持っていたわよね」

「そうです」

「何でコピーしようとしなの？」

「逆に、コピーされたいって思う人。いるのです？」

「確かにそうね。自らは……ちよつとね」

「ですよね……」

「私で良かったら、どうぞ」

右手を差し出す。あれ？これ、右手じゃないといけない縛りでもあったです？

「妖怪の味方ですけど、それでも？」

「私は、人では無いわ」

「そうなのですか」

手を繋ぐ。

これで、アリスの能力をコピーしたのです。

「これで良いのかしら？」

「はいです、これでコピー出来たです」

「じゃあ、人形……作りましょうか」

「はいです」

私達は、一緒に人形を作ったです。私は、初心者だったが、能力のお陰で、作って動かす位の事は出来たです。ちなみに、動かすには魔力を使っているです。ちなみに、作ったのは自分をモデルにした人形で、鏡を見ながら作ったです。そこそこの出来です。それで、適当に話し合い、家に帰った。

ふー、人形を作るの、意外と難しいんですね。さーて、今日の晩御飯はー、人肉ボルシチです！大好きなのです！

「何があった」↑作者

少女食事中

美味しかったです。やっぱり、人肉ボルシチに勝るものなんて無い

です。よし、お風呂タイム。そう言えば右側の背中に、ボコって小さく、たんこぶ？みたいなのが出来てゐるです。何したらそうなるのですか？まあ、良いです。それじゃあ、おやすみです。

第14話名無しの西洋人形

後編

私は人形^{ドール}。名前はまだ無い。私はとある人に作られた人形^{ドール}で、その人を探している。私は、自律して動ける。だけど、エネルギーは自分で補給しなければならない。ちなみに、食べた物はエネルギーになるため、排泄物は気にしなくて良い。

さて、こんな話しは置いといて。此処が、こちら辺で一番大きい里ですか。流石ですね。さて、お母様はいるかな？何か、此処ら辺では見なかった洋服が、この里では見かける事があるです。声をかけてみましょう。

「あの、すみません」

「何だ？」

その女性は、まじまじと私を見ている。その女性は、とても美しい顔をしており、この地では珍しい銀髪で、頭には帽子？と思わしき、小さく青い物が、チョコンと乗っている。そして、青色のワンピースを着ていると思われる。

「ああ、すまない。名前を言っていなかったな。私の名前は上白沢慧音。慧音と呼んでくれ」

「慧音さん、ですか。実は私、探し人がいまして。」

少女説明中…

「そうだったのか。しかし、そのお母様。という人の名前や姿を覚えてないとは」

「はい、ですが。見れば分かる気がします」

「その、何か覚えてる事は無いか？」

「えー…っと、西の方の国から来ました」

「西か。じゃあ、神社を紹介するよ、今の事を話せば、理解して解決してくれると思う」

「ありがとうございます」

「えーっと、その神社は人里外れた場所にあるんだが、それでも良いか？」

「はい」

「分かった」

少女移動中…

「此処が黒麗神社。大きめですね」

あつ、参道を掃除してる人がいますね、子供でしょうか。

「あの…」

「あつ、お客さんですか？どうぞ、ご自由に」

「あの…」

少女説明中…

「成程… ですか」

「はい、そうなんです」

「じゃあ、見つかるまで、私の所に泊まれば良いですよ」

「え？良いんですか？」

「構わないですよ」

「ありがとうございます」

「じゃあ、今日はもう遅いから。晩御飯… カレーが良いです？」

「良いですよ」

少女食事中…

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまなのです」

「美味しかったよ」

「良かったです、それじゃあ。私は、お風呂に入ります」

「はい」

少女入浴中…

「それじゃあ、先におやすみです」

「おやすみ」

翌日

「んんっ、あーっ。おはようございます」

起きると、少し赤くなり始めた葉っぱが付いている木々を見て、何かを飲んでいるリーの姿が有る。

「おはようです」

「水ー」

そう私が言うと、リーは立ち、奥に消える。暫くして戻った時には、湯のみを持って渡そうとしてくる。

「はいです」

「ふー」

「はい、朝ごはん。ピロシキです」

「これって確か、ロシアの料理ですよね」

「はい、ロシアが好きなので」

「うん、美味しい」

「です」

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまなのです」

「じゃあ、探しに行きましょうか」

「ちよつと手を繋ぐです、じゃないと落ちるですよ」

「えっ？あー！浮いてるー！飛んでるー！」

少女移動中…

人里

「離れない様にして下さい」

「分かったです」

「こっちです」

「ん」

「こんな朝からいないですか、やっぱり」

「？」

「いや、次はこっちです」

少女移動中…

アリス宅

コンコンコン

「お邪魔するですよー」

「はい」

「じゃあ先に入るから、合図があるまで待つてるです」

「どういう合図？」

「入って来てつて言うから」

「何してるの？」

そんなアリスの声が聞こえる。

「いや？何でも無い。じゃあ行くです」

「分かったです」

「今日は随分と急ね、何かあったの？」

「まあ、仕事の関係上。かな」

「じゃあ、こんな所でのんびりお茶を飲んでる場合じゃ無いわよ」

「今日は、アリスに用が有って来たです」

「私に？何かしたつけ？」

「知らなかったら、別に良いんですけど…入って来て」

ギイイ

扉が開く、そこには、一目見て、人間。と見える程の人形ドールがいた。だが背丈は小さく、145cm位である。

「見覚えがあるような…」

「お母様？」

「お母s…、（。ヅ）ハッ！」

「思い当たる節があるですか？」

「ええ…。あまり、思い出たく無いのだけれど。何かあったのか。この子には、ちゃんと説明しないとね」

あれは、私が人形師になろう。と、修行してた時の頃。それで、人形をある程度作れるようになったわ。そこで事故は起きた。あまり覚えてないのだけれど、確か…。私は、大きめの人形を作ろうとして貴方を作ったわ。でも当時は、小さい人形でも1く2体操るのが、限界だったの。だから、置物状態だったわ。でも当時は、どうしても動かしたくて。人形を動かすには普通、魔力を使って作るのだけれど。

自律型を作るには、魂を削って、その人形に入れる作業をしたの。それで、人形を持って墓に来てたの。それで、容量の半分の他人の魂は、ちゃんと出来ただけれど。手順を間違えて、もう半分は……。私の魂を、ごっそり持って行かれたわ。もちろんすぐに、病院送りになって、人形には、会えなくなってしまったのだけれど。

「そんな事故が……。何で人形師を諦め無かったんです？」

「当時は、心に大穴がぽっかり空いた、っていう喪失感や、絶望感なんかを感じてたから、良く覚えてないわ」

「辛い事を思い出させてしまったです」

「お母様」

「そう言えば、名前。付けて無かったわよね」

「そう言えば、そうだったです」

「じゃあ、名前は……何が良いと思う？」

「ここで丸投げですか？」

「私は、人形を手放した訳だし、私が持つ資格はないわ。だからリー、貴方が所持しなさい」

「私ですか？」

「ええ貴方が」

「ん……。じゃあ、”暁”」

「暁、良いわね」

「私の名前は、暁です。よろしくお願いします」

「うん、私は黒麗漓夢。リーって呼んでです」

「分かりました。リー様」

「リー様って」

「ふふっ」

「帰りましょう、リー様」

「結局、そうやって呼ぶのですか。まあいいです。じゃあ、ダスビダーニャ」

「ええ。さようなら」

「そう言えば、人形って、”もの”なのですか？」

「私は貴方が、男であろうが、女であろうが。私は、貴方の物です。」
「そうですか」

「いったい、どこからその忠誠心が。」

その後神社に帰り、お風呂に入って寝た。

第15話文

私は、山を追っている。最近、人里外れた場所に、”黒麗神社”という神社が建ち、信仰を集めている。この神社は、依頼。と言い、対価を催促しないで、働きに応じてお金をお賽銭に入れば良いと言う。さらにその依頼では、人間関係改善や妖怪退治などをしている。そして、最近の出来事で少しの間、居なくなるです。と言い、本当に1〜2週間の間居なくなっており、その時期丁度、紅魔異変が起こった。

どう見ても怪しい。そう思い、まず霊夢の所に行った。

だが、紅魔異変には、滴夢は関係無い。と、そう言った。私は、ますます怪しく思い、魔理沙の所も行つて、取材した。だが、私は滴夢なんか見てないぜ。と、そう言った。

私は、ますます怪しいと思い、紅魔館に行った。が、美鈴に門前払いされてしまい。遂に明日、黒麗神社に直接行く事にした。日記はここで終わっている。

「昨日は、酷い目に会ったです」

本当ですよ。あれから、戻してくれて良かったです。

「美味しかったですよ?」

「感想は求めていないです」

もう、思い出したくないです。

”チリンチリン”

呼び鈴の音が響く。

「はーい、誰ですか?」

こんな時に。

戸を開けると、そこには、射命丸文がいた。

「あの、私。取材にきた、射命丸文と申します。以後、お見知りおきを。」

「取材なら受けるです。上がるです」
とりあえず上げる。

「何を聞きたいんですか？」

まあ、なんとなく予想は付くけど。

「じゃあ…、まず。今、紅魔館とは、どのような関係ですか？」
思い出したくない。けど、しっかりしないと。

「依頼を受け、それを、やっただけです」

「どんな依頼を？」

「幻想郷を、乗っ取るための力になる。という依頼です」

「でも、勝てて無いですよね？」

「元々、勝つのが目的じゃ無かったですから」

「それはどういう？」

「スペルカードシステムを広める為に、異変を起こしたですから」

「そうだったんですね」

「それで？」

「えっと、そう言えば、何で対価を催促しないんですか？」

「それは、お金に執着があんまり無いですから」

「そうなんですか」

「それに、相手を縛るのも、縛られるのも、嫌いですから」

「縛る？縛られる？」

「ルールや、法律の事です」

「へえ、そう言えば、能力は何ですか？」

「私の能力は、触れたものをコピーする程度の能力です」

「それはまた、チート級ですね」

「そうです」

ちなみに、暁は、動ける程度の能力。という能力だった。それと、空を飛ぶ程度の能力を付与してるです。

「あれ？何でコピーしようとしませんですか？」

「して欲しいんですか？」

「いいえ、気になっただけ。そう言えば、それは？」

「それ？」

「その、私から見て左のほうだけ、羽根？みたいなのがありますが」
「これは、フ란の羽根です」

「フラン：。。あの、吸血鬼の妹でしたっけ？」

「ハイソウデス」

正直今、紅魔館に関して、あまり思い出したくない。

「そう言えば、霊夢と魔理沙が、滴夢に対して、紅魔異変に、関係して無いっておっしゃってますが」

「それは、パツチエが魔法で、独断でやったみたいです」

「そうでしたか、それでは、失礼しました」

「はいです」

終わると、すぐさま妖怪の山方面へと、飛んで行く。

今日の晩御飯は。。。ステーキでいいや。

名称しがたき話

その少女は、名称しがたい存在だった。

その者は、”■■■ちゃん”、そう呼ばれていた。

その者は、■色のコートの用な物を来ており、

髪の毛は、■色で、顔はみえない。

その者は、困っていた。

その時。

イレギュラーが起きた。

もうそろそろ、紅葉を楽しめる時期である。

紅葉を見ながら、ゆつくりと

お茶を飲んで、ゆつくりする。

だが、その静かなひと時に、水がさす。

チリンチリン

呼び鈴の音だ。

「何ですか？」

戸を開ける、そこには。

黄色のレインコートを着た、少女？と思しき姿があった。だが、少女のあどけない顔が有るはずの顔は、左半分が名称しがたい事になっていた。そして、僅かに出ている左手は、イカの触手の用な物がちよつと出ていた。

この様な光景を見るのは中々無いので、s a n チェック。

S A N チェック

90↓05クリティカル

s a n 値減少無し

クトウルフ神話技能が5上がります。

(クリティカルが出たのでおまけ)

滴夢は、その子の姿が気になった。

目星

70↓20成功

その姿は、何度見ても慣れない。だが、ここは幻想郷。これくらいの事で、弱ってやるか！と持ちこたえた。

「何の用ですか？」

「あの、良い神社があるって言われて来ました」

何その良いお店知ってるから、一緒に行きましようみたいな…。その姿見た人全員sanチェックですね。

「入って下さい」

アイデア。

90↓63成功

じゃあ、本能的にあんまり関わったら死んじやう奴。だと、悟りました。なので、恐怖を若干感じ、sanチェック。

90↓60成功

減少無しで。

じゃあ、伊達に妖怪を相手にして無いので、減少しなかった。てか、そもそも自分自身が羽が生えてたりした事に気づく。

「私は、黒麗漓夢。巫女をやってるです」

「私は…。覚えてないです」

心理学50↓??。

特に、嘘をついてる様子は無い。

ここで、幸運どうぞ。90↓99ファンブル。

ここですかー…。しかも99って。

じゃあ、聞き耳で70↓48成功。

じゃあ、ギリギリ、変な音が聞こえ、異変が起こった事に、気づきました。それまで、ちよつとしか出ていなかったイカの触手が、貴方の方へ来ます。

??↓99ファンブル

では、イカの触手は漓夢が動こうとして、たまたま鞘からぬけた夜斬刀によって切れてしまいました。

ダメージ7

「いたっ」

そんな声が聞こえます。

”説得させるです。40↓09成功
収まるかな？

幸運90―40⇨50↓31成功

(高過ぎてつまらないので)

ふっと、さつきまで、赤く光っていた目に、金色が戻っていた。

「あれ？なにしていたっけ？」

「とりあえず上がるです」

少女は、自分の左手を見ている。そこで、斬られている事に気づく、そして、足下には、自分の手と、刀があった。

「これ、貴方が？」

「そうです」

心理学50↓??

足下にある手の方を見てるので、様子を伺えない。

目星70↓72失敗

特に何も分かる事は何も無かった。

「じゃあ、お邪魔します」

「ただいまです」

「帰ってきたんですね？」

その光景を、暁は見た。

san??↓07スペシャル

減少は無かった。

目星??↓24

その姿は、明らかに異形の物だったが、そもそも、自分自身も動く人形だった。と思った。

アイデア??↓68

特に何も分かる事は無かった。

「その子は？」

「自分の名前、思い出せないみたいです」

「そうですか、今日はボルシチです」

「やったです、大好きです」

「そう言えば、この子は暁」

「宜しく」

「宜しくお願いします」

この後、晩御飯を食べてそのまま寝た。

翌日

まだ、朝日は出て無い用だ。あの子がいない。

「あれ？」

縁側にでも、行っただすか？

幸運90↓06クリティカル

貴方が、戸を出ると右側に、少女の左側が見える。

その顔は月を見ていて、心理学しなくても悲しい目で見ている事が、分かります。

「何かあつたですか？」

振り返りはしない。

目星70―20≡50↓32成功

(月と星の明かりしか無いので)

では、ボソボソと口が動いていて、目も、涙が出ている事が分かります。

聞き耳70↓45成功

では、小さく、このような声が聞こえます。

「いあ いあ はすたあ？」

クトウルフ神話良いですか？

05↓05成功

では、頭にヒビつと来ました、その呪文は、”ハスター”という邪神を讃える為の物であり。少女の姿は、ハスターを人に召来させた時の姿と、まんまである事が分かりました。

近づくです。

その少女は、とても大きな涙を流しながら、抱きついて来て、そのまま朝日を見た。

第17話 ■■■ ちゃん

「……とりあえず、名前どうするですか？」
「うーん」

アイデア90↓00ファンブル
幸運90―40⇨50↓02クリティカル
(ファンブルがでたので)

じゃあ、名前を、思い付きました。

「じゃあ、名前は、エリカ？」

「似てる用な気がする」

知識60+10⇨70↓89失敗

(エリカに関して考えるので)

もう一度、今回はアイデア2分の1と幸運2分の1で。

アイデア45↓38成功

幸運45↓27成功

では、その子の姿を改めて見ると、ソニアという名前が、何故か引つ掛かります。

「ソニア？」

「え？」

「ソニアちゃん。…です？」

「そうだと思う。ありがとう」

心理学しなくても、とても可愛らしい笑顔を向けられており、とても嬉しい様だ。だが、少女の身体の左半身は以前、名称しがたかった。

「暁、朝ごはんにするですよ。」

「ううう、やっぱり、朝に強いですね」

「ほら、改めて挨拶するです」

「私、ソニアと言います。」

改めて、宜しくお願いします」

ここで、幸運どうぞ。

90↓01クリティカル

1d6時間の間、昨日の姿になりません。

1 (時間)

じゃあ、少しの間昨日みたいになる事は無さそうだ。

「そう言えば昨日、何であんな感じになってたです?」

「昨日? あんな感じ?」

心理学50↓??

思い当たる節が無さそうだ。

ここで、アイデアどうぞ。

90↓64成功

また、紅魔館に行かないと、いけない気がした。

sanチェック

90↓71成功

では、また紅魔館に行きますか?

行くです。

「また紅魔館に行かないといけないのですか」

「紅魔館?」

「咲夜さん凄かったです。あんな風になりたいです」

「じゃあ、行くですよ」

少女移動中…。

美鈴

「あれ? リーさん、来たんですね? その、先日は大変お世話になりました」

「あんまり思い出したくないです」

「今日は、何の用ですか?」

「この子の事で、です」

「?」

「この子は、ソニアちゃん」

「うっ」

「大丈夫ですか?」

心理学50↓??

そんなにやわでは無かった用だ。

「その子は？」

「分からない事が多いから、

ここだったらあると思って」

「通って良いですよ」

「ありがとうございます」

少女移動中…。

ヴァル魔法図書館

「あら、来てたのね」

「出来れば、余り来たくは無かったです」

「そんな事言わないで、

ほら、紅茶飲みましょう」

「飲まないですよ」

「良いわよ、飲まなくて。今度は、匂いだもの」

幸運90↓05クリティカル

「つつ」

紅茶は、凍った。

「その調子で、全部止めてみて」

アイデア90―80⇐10↓02クリティカル

（究極）

左手の甲に噛みつき、そのまま勢い良く引き、手に血が滴り落ちる。

甲を相手に向けて、伸ばしたまま、唱えはじめる。

「血は、血に！命は、命に！」

そう叫ぶと、背後に巨大な魔法陣が現れた。

「回る！回る！世界は回る！変わる！変わる！世界は変わる！」

そう叫ぶと、魔法陣が回りだす。

「バージョンチルノ！」

そう叫ぶと、そこには、黒麗漓夢は居なかった。

代わりに――

ua2000突破記念話 敵視点

この場所は、忘れられた場所。

私達は、そこに住んでいる。

私達。と言うからには、私以外にも人が居るという事だ。

此処には、私を含めて9人も人がこの場所に居る。

まず、皆をまとめあげていて、慕われている。

グルティブ・マーハン。愛称はティー

能力は、能力を無効化する程度の能力

無効化の範囲は半径2mで、ずっと有効。

という訳では無く、認識出来ていないと駄目。

因みに、このグループで唯一の男。

(周りは女子。後は分かるな)

次は、煉獄^{れんごく} 紅炎^{かれん}。

炎を操る程度の能力。

森林火災が起きているのをティーが見に行った所、

炎に身に纏った紅炎が居て、色々あつて戦闘に勝ち、今では主戦力として活躍している。

次、レスト・シユワート。

能力は、召喚する程度の能力。

真夜中に起きて、家を出てふと空を見ると、星が見えない事に疑問を感じ、目線を戻すと、目の前には人では無い何か(ビャーキ)が居て、戦闘になり、勝った。

今回の主犯格であり、見ただけで狂気になりそうな生物を召喚する。

次、疾風ハツサ。

名称しがたき程度の能力

紅炎とレストが一緒にたけのこ狩りをしていた時に、喘ぎ声が聞こえ、その方向に向かうと、紅炎とレストが、触手プレイみたいに絡まれている、とても見える物では無かったが、近くまで寄って能力を無効化して何とかなった。その後、姿を現したが、風の力で炎も消して

しまったが、ビヤーキーを呼ぶと攻撃を止めた。

その後、紅炎とレストは、責任を取って。

という事で、何故か一緒のベットで寝る事に。

次、ズブク・ミュージカ

音を操る程度の能力

最初の内は、ただの耳鳴りだと思っていたけど、

耳鳴りにしては長く続き、変に思っ、試しに能力を無効化させてみると、耳鳴りが消え、犯人は誰か探した所にやって来て、近くまで寄って、能力が効かない事を説明し、ティーの勝ちになった。

戻った時3人に、また増えた。みたいな顔をされ、仲間になった。

次は私。語部 作。

能力は、書いた通りにする程度の能力。

私は、ティーの噂を聞き、ティーと会えるように書き、妹と一緒に道に迷った時に、助けて貰った。

次、妹の語部 添。

能力は上書きする程度の能力。

姉と一緒に道に迷った所を、助けて貰った。

次、スフエア・パイチャー。

忘れる程度の能力

ティーの噂を聞き、面白そう。と思い、通行人を装って能力を使う。

使われたティーは、紅炎と会うより前の記憶になり、自分の後を付いたりしている美少女、左腕に身体をくっ付けている美少女などを見て、「君達誰？」と聞き、身体をくっ付けている子が、「何言ってるの？全員、貴方が攻略した女性に決まってるじゃ無い」と言い、6人が同時に首を縦に振る。此処から後は修羅場だった。

次、エアリー・パイチャー。

思い出す程度の能力

修羅場が片付いた所で可哀想になり。思い出させて、一緒に仲間になった。

私達は基本仲が良いが、ティーの取り合いになる事が多く、何故か

1日ずつ交代制で一緒のベットで寝る事で許されている。まあ、そう
したのも私が書いたせいなんですけどね。

「おーい、作。どうにかしてくれ」

では、私はこれで。

第19話バージョン

「バージョンチルノ！」

そう叫ぶと、そこには黒麗漓夢は居なかった。代わりに黒い霧みたいな物が現れ、そして一つに集まる。出来上がった姿はチルノだった。先に説明すると、漓夢の能力は、その者の身体的特徴もコピーする事が出来るため、集中すれば、その者になる事も出来る。

凍札「パーフェクトフリーズ」

そして、氷の弾幕の雨が放たれる。これが、1番手っ取り早いです。全部凍ったみたいです。

「終わる！終わる！世界は終わる！」

そう叫ぶと、また黒い霧の様になり、漓夢になっていた。

「???」

心理学しなくても、とても驚いている様子です。

「どうしましたです?」

「どうしましたです?じゃないわよ」

「リー様、懂れます」

「?」

「つていうか、

こんな事してる時間じゃ無いです」

幸運90↓07クリティカル

上から本が、目の前に落ちます。

読む。

1d10時間で振ってください。

5（時間）

図書館で振ってください。

60↓17成功

じゃあ、

ロシア語で書かれている様です。

22↓07成功

では、

”シヨゴス”と呼ばれる邪神の事について、ロシア語で書かれた物だった。

まとめると、こんな感じだった。

その邪神は、テケ・リリ、テケ・リという鳴き声で、その形は不定形で、虹色に黒い感じの色である。そして、その姿をあらゆる姿にする事が可能である。という事が分かり、使役する事は可能だが、知能が少ないため、言う事を聞くかは分からない。

貴方は本を閉じる。

時間は、12時前の用だ。

幸運90↓91失敗

貴方が本を閉じる。と、右にはソニアと思しき、黄色の服を着ている子が空を飛んで、左手からは、大きな触手が出ている。そして、それに対峙する様に、左にはこの本で見たばかりのシヨゴスが、そこにはいた。

s a n チエツク

90↓59成功

減少無し。

とめますか？とめませんか？

とめる。

また、詠唱を始める。

「血は、血に！命は、命に！回る！回る！世界は回る！変わる！変わる！世界は変わる！」

ひと幕置いて。

「バージョンレミイ！」

すると、身体は一瞬で黒い霧に変わり、また1点に戻ると、レミリア・スカーレットが、そこにいた。

神槍「スピア・ザ・グングニル」

躊躇はなく、弾幕用では無い。そして、シヨゴスに向ける。

そして、撃つ！

ドゴオン

重たい音が響く。シヨゴスは、どうやら居ない様です。

「終わる！終わる！世界は終わる！」

黒い霧になり、滴夢に戻る。

「貴方、その力…」

「何ですか？」

「いや、何でも無いわ」

「そうですか」

そうして、1日が終わった。

「駄目だったね」

「まさか、ロードがやられるなんてね」

「そんな事いったら、あのイレギュラーはロードにやられちゃったけど」

「どうやって入り込んだんでしょね」

「どうでもいいわ。さて、私の出番はこれで終わりね」

「次は私の番かー」

「頑張えー」

「この中で主戦力ですからね」

「がんばってね」

「ええ、頑張りましたよ」

第20話終わらない物は何も無い

今日、ソニアちゃんは死んだ。より正確に言うならば、昨日のショゴスの攻撃を受けて、どうにか保つてたみたいだ。が、家に着くと、バタンと倒れてしまった。応急手当は間に合わなかった。正直、90もあつたsan値は一気に、60まで減った。正気を保つだけでもやばい。

チリンチリン

呼び鈴の音です。

「何ですか?」

戸を開けると、そこには、魔理沙がいた。

「どうしたのです?」

「ちよつとな」

「用があるなら、上がるです」

「じゃあ、上がらせて貰うぜ」

「今日は、何故私の所へ?」

せめて、表だけでも。

「霊夢の奴と喧嘩して。それから、場所を転々としてるぜ」

「それで、私の所にも来たんですか」

「そうだぜ」

「暁、昼ごはんの用意」

「はい」

「暁?」

「私の人形ドールです」

「ドール。か」

「はいです」

「ピロシキ出来ました」

「分かったです」

「ピロシキ?」

「食べてみます」

「分かったんだぜ」

「いただきます」

少女食事中・・・

「ごちそうさまだぜ、美味しかったぜ」

「それは良かったのです。ごちそうさまなのです」

誰か、san値回復したいんですけど。

「ごちそうさま」

「そう言えば昨日、紅魔館に、正体不明の妖怪らしきモノ。が、居たらしいぜ？」

「良く知ってるですね」

「ああ、まあ、文々。新聞だから、信用出来るか分からないけど」

「そうなのですか」

「新聞読まないのか？」

「はい、読まないです」

「この前の記事なんか、びっくりしたぜ」

「です？」

「お前の事が書かれているんだぜ」

「ああ、取材を受けたですから」

「でも、私らの記憶がいじられていたのは気づかなかったぜ」

「私がやったんじゃ無いんですけどね」

「あれ読んだ後、すぐに紅魔館に行って、確認したぜ」

「どうだったですか？」

「”私がやったわ”って言ってたぜ」

「そうですか」

「あと、伝言を預かってるぜ」

「伝言ですか？」

「えっと、レミリアから、面白い未来が、今ならみれるわよ。だって」

「未来？」

能力の事ですか、そう言えば、1度も使った事がないです。

「分かったです」

能力を使うです。

能力を使うと、

私は、とある建物の中に居るみたいです。
え？映姫？って事は、地獄？

地獄で何してるんです？あつ終わったです。

「何だったんです？」

「どんなだったんだぜ？」

「私が、地獄に居る未来です」

「地獄、か」

「はい、地獄です」

「レミリアの奴は何がしたいんだ？」

「さあ、分からないです」

今日は、魔理沙が、ここに泊まった。

パツチエの能力を使って、弾幕ごっこで遊んだりしました。

東方妖々夢 Perfect Cherry Blossom

第21話乙

正気を保つので、精一杯です。でも、死にこだわり過ぎていたです。万物は、必ず終わる物だ。と思う事にしたです。私は、ソニアちゃんに入れ込み過ぎていた様です。たったちよつとの間居ただけなのに。あの様子だと、色んな所に行ったんだけど、あの姿がばれた日には追いつかれ、また別の町へ行き、またばれて、追い出される。そんな人生を送っていたのでしよう。ソニアちゃんは、悪くないのですのに。人は、物事を一方的にしか見ないのです。相手を悪だと考え、自分の正義を押し通そうとする。私は、常識に囚われる考え方をしない事にしました。

「カゝゴメ、カゴメ、籠の中のとくおり、いついつ出やる、夜明けの晩に、鶴と亀がすゝべった、後ろの正面だゝあれ？」

「何の歌ですか？」

「怖い歌ですよ」

「？」

「まあ、気にしないでです」

「はい、分かりました」

「籠の中の鳥。ですか」

「？」

「籠の中の鳥に、自由はあるのかな？」

「無いと思います」

「…嫌われる者の、味方になりたいです」

数日後

チリンチリン

呼び鈴がなるです。

「はいでゝす」

「こんにちは、こちらが、黒麗神社で合っていますか？」

そこには、魂魄妖夢がいた。もうそんな季節なのか。

「あの、幽々子様に言われて、ここに来ました。此処に来れば、面白くなる。と言われて、来ました」

「そうですか、入って下さい」

「はい、入らせて貰います」

「暁、お茶を入れて」

「はい」

「妖怪でも、人間でも無いですよね」

「暁は、私の人形です」

「ドール？」

何か言いたそうですね。

「はいです」

「お茶どうぞ」

「はい、ありがとうございます」

「それで、どうして欲しいです？」

「噂になってるんです」

「何がです？」

「貴方が、紅魔異変に関わった事」

「実際。特別依頼で、頼まれたです」

「特別依頼？」

「特別依頼は、マスターに手を出すものを、やるという依頼です」

「それを、紅魔館は？」

「了承してくれたです」

「あの」

少女説明中…。

「つまり、特別依頼を受けたい。という事ですね？」

「はい」

それしか無いですからね。

「じゃあ、暁。お留守番宜しくです」

「はい、待っています」

「じゃあ、行きましょう」

「はいなのです」

冥界 白玉楼

「此処が、冥界。白玉楼です」

「へー、此処が冥界、白玉楼ですか」

「凄いです。」

「では、お入りください」

「失礼するです」

「貴方が滴夢？」

「ええ」

「そこに、幽々子がいる。」

「その刀は？」

「この刀は夜斬刀。夜を斬れる位の、刀です」

「そうなの、さあ、上がって」

「はいなのです」

「幽々子様は、何故滴夢を呼んだのですか？」

「アイデアをくれると思ったの」

「アイデア？」

「ええ、あそこに、桜の木があるでしょう。あの桜を、咲かせたいの」

「幽々子様……」

「あの桜……。なのですか」

「ええ、何かしってるの？」

「ハイなのです。あの桜は西行妖。満開になると、西行寺幽々子は、死んでしまうです」

「そうなの？」

「ええ、あそこに貴方の死体が、あるはずなのです」

「ありがとう」

「いえいえ」

「妖夢、お茶を出しなさい」

「はい、分かりました」

「それで、あの桜を咲かせるには、どうしたら良いのかしら？」

「幻想郷中の春を集めれば、良いんじゃないですか？」

「春を？」

「はい、春を集めるのです」

「わかったわ」

「はい、お茶です」

「ありがとうございます」

「んーそう言えば、何処流の剣術を使うの？」

「我流剣術なのです」

「そうなの？じゃあ妖夢。戦ってみて頂戴」

「え？私ですか？別にいいですが」

「良いですよ？それに、実力も知りたいですから」

「はあ」

「それじゃあ、始めるです」

「ええ、…そんなので、大丈夫なの？」

私は、妖夢に対して左足を前にして、左手は垂らし、右足は後ろに開き、右手は、膝に乗せ、刀を構えているです。

「大丈夫です。問題無いです」

「じゃあ、始め！」

滴剣「五芒星」

右下に構えている刀を左上に動かし、右にスライドさせ、左下まで動かして真ん中の上まで動かし、右下まで戻す。この動きが、五芒星なのです

ですが、最初の動きで楼観剣によって止められる。

こうなつては、不利なのはこっちです。

「中々やりますね」

「いえいえ、不利なのは、こちらですよ」
力を抜く。

すると妖夢は、慣性の法則に従って前に出る。そして、2個目の斬撃。左から、右に動かすだけ。そして、右上から左下に斬撃。左下か

ら上へさらに斬撃。上から右下へ戻す為に振り、五芒星は終わる。と、思っていたのですか。最後に真ん中を突いて、終わりです。最後の斬撃。

キィイーン

金属どうしがぶつかり合う、高い音が鳴り響く。

そして、両者とも吹き飛ばされる。

そう、最後の斬撃は、楼観剣によって阻まれた。

「つつ、なのです」

「喋ってる暇、あるの？」

「無さそうですね」

両者はだんだんその距離を詰め寄り、間近まで寄った所で。

「両者止め」

その幽々子の声で、終わった。

「ありがとうございますでした」

「ありがとうございます」

「これで、実力も分かった訳だしね♪妖夢」

「申し訳ありません。幽々子様」

「そう言えば、特別依頼？だっけ？どうすれば良いの？」

「えーっとですね」

こうして、私は白玉楼で、桜を開花させる為に知恵を貸したり、妖夢と戦ったりして、幽々子がマスターになった。

第22話桜の木

西行妖

その根元には、幽々子が埋まっているのです。それを聞いてなお、満開の桜を見たい。ということです。幽々子の話によると、「貴方なら、呪いからも守ってくれそうだわ」と、言ったです。正直、呪いから守れる自信が無いです。でも、レミイの能力を使って、そう言う未来にする事は出来るです。でも、それじゃあ、面白くないです。

「そう言えば、お金をどうしましょう」

「幾らでも良いですよ」

「そうなの。じゃあ、幾らにしましょうかしら」

「幾らでも良いですよ」

「あらそう、追い追いね」

「そうですね」

「そう言えばその刀、楼観剣に当たって良く切れなかったわね」

「ええ、天下五剣位じゃないと、互角で戦えないみたいですから」

「そうみたいね」

「そう言えば、何故貴方は何故、依頼なんて受けてるのかしら？」

「私は、黒麗様を信じてくれたら、それでいいです」

「何故黒麗様を信じてくれたら良いの？」

「黒麗様は、私自身を神様とした形ですので、信じてくれれば、私の力になるのです」

「なるほどね。さて、散歩でもしてくるわ」

「ええ、いつてらっしゃいます」

「行ってくるわ」

「さて、能力の練習でもやるのです」

咲夜さんから、ナイフの手ほどきを受けていたです。それに、懐中時計もくれたです。今回は、咲夜さんの能力を使える様にする事にしたです。前々から思ってたですけど、咲夜の能力は魔力の消費が他の能力とは違って結構多いです。なので、使う時は懐中時計を使うのです。

少女練習中…。

ふう、今回は、この位にします。

「何してるのですか？」

「いえ、見ていただけです」

「そうですか」

「何をしていたんですか？」

「能力の練習です」

「練習？」

「ハイなのです。上手く使える様に、練習してるです」

「そうだったんですね」

「ハイなのです」

「貴方の能力って何でしたっけ？見た所、瞬間移動系ですか？」

「私の能力は、触れた”もの”の能力を、コピーする程度の能力。なのです」

「触れた”もの”の能力を？」

「はい、そうなのです」

「チート。ですね」

「ハイなのです」

「そう言えば、幽々子様は、どちらへ？」

「散歩に行ってるみたいです」

「散歩ですか。では、もうすぐ帰ってこられますね」

「あらゝ二人して、何話してたの？」

「私の能力についてです」

「能力？」

「私の能力は、触れたものの能力を、コピーする程度の能力。なのです」

「今持つてる能力は？何なの？」

「今持つてる能力はですね、境界を操る程度の能力と空を飛ぶ程度の能力。闇を操る程度の能力と冷気を操る程度の能力。ありとあらゆるものを破壊する程度の能力。魔法を扱う程度の能力（主に精霊や、属性）と火水木金土日月を操る程度の能力。運命を操る程度の能力と

時間を操る程度の能力。そして、人形を操る程度の能力」

「何順？それにしても多いわね」

「手に入れた順です」

「もう、チートってレベルじゃ無いわよ」

「そうなのよね」

「あ、お姉ちゃん」

「久しぶり、リー」

「紫？この子と知り合いなの？」

「ええ、この子を泊めてた時期があつたの」

「妖夢、警戒しなくて良いわよ」

「あら、そんなに簡単に、良いの？」

「何しに来たの？紫」

「あらあら、見に来ただけですのに」

「そうなのですか」

「リー。貴方、その羽根はどうしたの？」

「私の能力は、コピーした者の身体的特徴もコピー出来るみたいなのです」

「そうだったの」

「ハイなのです」

「元気そうで何よりだわ。じゃあ、たまには帰って来なさい」

「ハイなのです」

「結局、何しに来たの？紫は」

「さあ。紫の事だから、何か企んでるんじゃない？」

「分からないです」

こうして私達は、紫が来た事に違和感を感じながら、1日を過ごしていった。

第23話 Perfect Cherry Blossom

そして、ついに、異変を起こす日今日がやって来た。

「いよいよ今日ね」

「そうなのです」

「貴方の事は、こっちで何とかするわ。とても助かったわ。お金の方は、何とかするわ」

「それは良かったです。でも・いや、それに値する事を私がしたんでしたら、別に良いです」

「お金の事かしら？」

「ハイなのです」

「そうね・・・」

「です？」

「能力。コピーする？」

「身に余るです」

「今更じゃないの？」

「そうだったです」

忘れてたです。

「私の能力じゃ、使う機会があんまり無さそうだわ。そうね、妖夢」

「何でしょう、幽々子様」

「コピーしなさい」

「えっ？」

「流石に駄目ですよ」

一応、コピーする時は了承を得てから、コピーしてるんですから。
「そうね、本人がそう言ってるんだし。さて、じゃあ、玄関までは送るわ」

「分かったです」

「本当にありがとうね」

「気にしなくても良いです」

「それじゃあ、さよなら」

「はいです、ダスビダーニヤ」

「あの、冥界の出入り口まで送っても良いですか？」

何かあるのです？

「良いわよ」

「じゃあ、行ってくるです」

「さようなら」

「ダスビダーニヤ。です」

さようならです。

「じゃあ、見送り頼むわね」

「はい、幽々子様」

「あつ、雪が強くなつたです」

「あの…」

「何ですか？」

？

「あの、私の能力をコピーして下さい」

「良いのですか？」

「ええ、貴方と対峙する事で、私もまだまだ半人前である事が分かりましたから」

「ハイなのです」

「では、私はここまでですね」

「ダスビダーニヤ。です」

「さようなら」

「ええ」

こうして私は、冥界を去り、
幻想郷に戻ってきた。

森の中

「ねえ、スター、様子はどう？」

「大丈夫、気付かれて無いと思うわ」

「サニー、準備は良い？」

「ええ、万端よ。ルナ」

「じゃあ、作戦開始よ」

「分かったわ」

「気をつけてね。相手はチート使いだわ。気を引き締めて」

「分かってるわ」

「大丈夫よ」

「そうね」

ん？視界がおかしいです。

森の中を歩いている筈なのですが、もうすぐ出てもおかしく無い筈なのですが。視界にも入らないです。

視界？

…もしかして、三月精です？三月精だったら出来るですね。ちよつと乗ってみるです。音が急に変になってるです。わざとですか？別に良いです。そのまま進むです。

やっぱりそのままじゃ、抜けられないですか。じゃあ、帰りますか。

「ちよつと待って」

？

「何ですか？」

「私達、プリズムリバー三姉妹っていうの」

「何の様なのです？」

この現れ方は、罨としか思えないです。

「音楽を聞いて欲しいの」

「音楽？ですか？」

「私はルナサ。鬱^{うつ}の音を演奏するわ。使う楽器はバイオリンよ」

「私はメルラン。躁^{そう}の音を演奏できるわ。使う楽器はトランペット」

「私はリリカ。幻想の音を演奏する。使う楽器はキーボード」

「二聞いてください。Melody！」

少女演奏中…。

パチパチパチパチパチ

良い曲過ぎると思うのは、気の所為です？

「良かったですよ」

「良かった」

「満足して貰えた様ね」

「とても良かったですよ」

「それは良かったわ。そうだ、能力をコピーする？」

「良いの？」

そんなに簡単に、良いのです？

「この3人の中で、誰が良いの？」

「じゃあ、リリ力で」

「分かりました」

「じゃあ、コピーするですよ」

「はい」

そしてコピーし、手を振って家に帰った。

「ただいまなのです」

「おかえりなさい、リー様。」

しかし、最近は雪が降りますね」

「そうですね」

「これも、何かの異変なのでしょう。まあ、リー様が、少しの間居なくなっただけの事は、異変を起こす手伝いをした。って事なのでしょう」

「その通りです」

そして白玉楼は、春冬異変は終わり、何時も通り宴会が始まったのです。私はウォッカを飲んでるです。でも、もう慣れてしまったです。

チリンチリン

呼び鈴です。さあ、行かないと。

東方萃夢想 Ⅰ Immaterial and
Missing Power.

第24話失われた力

チリンチリン

呼び鈴の音。私を呼ぶ音。

「はいでーす」

戸を開けると、伊吹萃香が此処に居た。

「ちよつと依頼を頼みたいんだ。それより顔、真っ赤だぞ?」

「さつきまでーウオツ力を飲んでたんですよー」

「なら、一緒に飲むか?」

少女飲酒中.:.。

「うつぷ。もう無理です」

「私も、飲み過ぎた」

:.: Now Resting.

「それで? 依頼ですか?」

大体の予想はついてますが

「遠くまで散らばったあいつらを、此処に戻ってきて欲しいんだ」

「あいつら。です?」

「私達の仲間。つまり、鬼」

「そうですか:.: 良いですよ」

「受けてくれるの?」

「はい、アイデアは貸しますよ」

「頼んどいて悪いね」

「うーん。三日おきに宴を開く様に出来ないですか?」

「何で?」

「三日おきに宴をやる事で、鬼を萃めるのです」

「なるほど。っていうか何で、能力を知っているの?」

「色々あるのです」

「腹が減ったから、帰るよ」

「よかったら、食べて行くです?」

「良いのかい?」

「はい、暁」

「もう出来上がりますよ」

「何がでるんだ?」

「・・・ボルシチです」

ただのボルシチじゃ無いですけどね。

「ボルシチ?」

「ロシア料理です」

「ふーん」

「出来ました」

「頂くのです」

「頂きまーす」

「頂きます」

少女食事中・・・。

「ごちそうさまです」

「ごちそうさま」

「いやー美味しかった。ごちそうさま」

今思ったですけど、鬼って昔人を食べてた筈ですから、懐かしい筈です。

「それは良かったです」

「そう言えばお前、強いらしいじゃないか」

あーー。

「そう・・・ですね」

「今の間は何?」

「自信が無いのです」

「なら、一丁やるか?」

「やるって何を?」

「そりゃあ、その刀で来いって事だよ」

「良いのですか?」

「来い」

「分かったです」

滴剣「五芒星」

技を使うが、全て萃香の手によってすべての斬撃が返されてしまった。

「技の萃香。ですか」

「そうだよ」

左手をちぎる。

「血は血に、命は命に！回る回る世界は回る変わる変わる世界は変わる！バージョン妖夢！」

そこには、妖夢がいた。

「私と同じ様な事が出来るのか」

「喋ってる場合じゃ無いですよ」

神鬼「未来永劫斬」

思いつきり斬り、続けて見えない速度で斬り込んでいく。でも、感触が変ですね。

「降参こうさーん」

「どうです？」

「ああ、どうやら本当のようだ」

「終わる終わる世界は終わる」

「結局、それは何なんだ？」

「私は、コピーしたものの身体的特徴もコピー出来るのです」

「そうだったのか」

「はいなのです」

「じゃ、帰るか」

「役立って良かったです」

「私も、まだまだだな」

「ダスビダーニヤ」

「バイバイ」

第25話 Immaterial and Miss Sing Power.

萃香の話によると、幻想郷では鬼の対処法は忘れ去られており、封印出来る者は限られてくるという。退治するです？って聞いたら、やめてくれよ。といって、三日置きの百鬼夜行は始まった。萃香は、此処に泊まるようになっていた。そして、萃香の能力もコピーできて、最近はおざわざ血を出さなくても、出来る様になってきた。

そして今日遂に、霊夢にばれて異変を終わらせなければ、ならなくなつた。

「いやー。駄目だった」

「そうなのですか」

「最後に、スペルカードで来てくれ」

「良いですよ」

場所を移動する。森の中です。

紫奥義「弾幕結界」

あらゆる方向から弾幕が発生して、放たれるです。

「こんなもの？」

勿論、これで終わりでは無いです。今度は、さつきよりも多い量が飛んでくる。

「ちっ」

鬼符「ミッシングパワー」

萃香が技を放つ。こっちに向かってきてるです。

神槍「スピア・ザ・グングニル」

打ったはず…です。でも、まだ向かって来てるです。瞬時に右へ避ける。こっちに向かってきてる。もう一回グングニル。まだ向かって来てるです。

禁忌「レーヴァテイン」

大きく振るです。

当たった筈ですけど、まだ向かってくるです。

うーん… そうだ！

神鬼「未来永劫斬」

こつちからも向かって行くです。因みに、夜斬刀でやっています。

「？この刀。何で私の身体も？」

「何言ってるのですか？」

「いや、ちょっと考え事」

「考え事なんて、余裕ですね」

「いやー、失礼」

（その刀、何で霧状の身体まで斬れるの？）

「そろそろ止めにするのですか？」

「そうだな、ありがとな」

「失敗したですけどね」

「まあ良いさ。それより、気がむいたら旧地獄に来てみると良いよ。
歓迎するよ」

「分かったです」

「じゃあな」

「ダスビダーニヤ」

「行つたです。出てくるです」

「いやーバレてましたか」

鴉が居るです。

「最近、貴方の二つ名が付いたので、お伝えしようかと」

「遅いと思うです」

「いやー。最近、貴方の所に行く程の暇が無くて」

「どんな二つ名なんです？」

「闇より黒い神の巫女」

「闇より黒い神の巫女。です？」

「ええ、」

カッコイイです。

「良いと思うのです」

「それは良かった」

「あと、異変の事について、聞きたい事があれば言うです」

「それは助かります」

「聞いて来て良いですよ？」

「では、先程萃香殿が居られましたか」

「依頼です。鬼の仲間を集めたいって、依頼が来たのです」

「では、春冬異変については？」

「春冬異変では、アイデアを渡しただけです」

「そうですか…。あれ？羽根は？」

「普段は見えなくしているのです」

「ありがとうございます」

「もう良いですか？」

「では、私はこれで」

三日置きの百鬼夜行 終了 第26話キャラ紹介

チリンチリン

扉を開けると、レミーが居た。

「一人です?」

紅魔館での出来事は、

出来るだけ思い出したくないです。

「ええ、今回の異変。

貴方が口出したんでしよう?」

「とんでもないです。

依頼で呼ばれたから、行っただけです。

流石に呼ばれても無いのに行く勇氣は無いです」

その通りです。

「そうなの。それで?今回は?」

「今回は、キャラ紹介です」

「まあ、チートよね」

「さて、早速やって行きましょう」

名前：黒麗漓夢

二つ名：闇より黒い神の夜

職業：巫女

能力：触れたものの能力をコピーする程度の能力

境界を操る程度の能力

空を飛ぶ程度の能力

闇を操る程度の能力

冷気を操る程度の能力

ありとあらゆるものを破壊する程度の能力

魔法を扱う程度の能力（主に精霊や、属性）

火水木金土日月を操る程度の能力

運命を操る程度の能力

時間を操る程度の能力

人形を操る程度の能力

剣術を扱う程度の能力

手足を使わずに楽器を演奏する程度の能力

幻想の音を演奏する程度の能力

密と疎を操る程度の能力

能力説明

任意でコピー出来て。

コピーする時にも、若干の魔力を消費。

使う時は、その能力に慣れていた方が消費が少なくなる。

あと、使う時は任意だが、危険が迫った時には、

自動で使われる物も有る。(例 霊夢の勘)

バージョンは、コピーした者の身体的特徴を、魔力消費で使える物。

また、特定の能力は、その身に直に影響を及ぼす。(例フ란の羽根)

好きな物：自由

好きな食べ物：ピロシキ 人肉ボルシチ

嫌いな物：自由では無い事

嫌いな食べ物：ラーメン パスタ 甲殻類

性格

基本的に、常識に囚われない考えを

持ちたがっており、ソニアの事で嫌われ者達の味方になりたいと思う様になり、白では無く、黒で良い。そう、思う様になっている。

あらすじ

目を覚ますと、そこは幻想郷で、

刀の封印を解くために、月に行った。

そして、名前を元にして神社を建て、依頼を募った。初めての特別依頼が紅魔館の物で、紅い霧を提案した。そして、人形の制作者を探しにアリスの元へ。そして、もうその人形は貴方の物だと言い、暁。と名前を付けた。

そして、名称し難い事に巻き込まれて、バージョン。を覚える。

そして冬になり、白玉楼に、今度は西行妖の開花方法を教えて、帰った。

家に帰ると、またもや依頼を受け、

三日置きの百鬼夜行のアイデア

を出す事になった。

そして、呼び鈴が鳴り、レミーが来る。

名前：暁

二つ名：夜明けの人形

職業：巫女手伝い

能力：動ける程度有能力

（卑猥な意味では無い）

好きなもの：リー様

好きな物：リー様と一緒に

好きな食べ物：Pー

嫌いな物：〃

嫌いな食べ物：〃

性格：お察し下さい。

あらすじ

ふと幻想郷に迷い込んだ所、慧音に言われ、黒麗神社へ。

そして、一緒にお母様を探して貰い、ましてや持ち主になって貰った。

「今更だけど、チートよね。まあ、私が言えた事じゃ無いけど」

「そうですね」

「バージョン。私目の前で見てないのよね」

「見るです？」

「良いの？」

詠唱を始める。

「血は血に、命は命に！回る回る世界は回る！変わる変わる世界は変わる！……バージョンフラン！」

そこまで、黒麗瀛夢だった物質は、フランに変わっていた。

「こんな感じです」

「ふーん」

「意外と反応薄いですね」

どうしたんです？頭打ったんですか？

「いや、考え事をしていただけよ。気にしないで頂戴」

「分かったです。もうそろそろ雨も、止むですかね」

「ええ、長かった冬も終わり春をすぎ、夏になるのだわ」

「たしか、三日おきの百鬼夜行。だっけ？」

「何の事？」

「いや、何でも無いです。さて、そろそろ私は寝るです」

「そうね。ここら辺でお暇するわ」

第27話夜を斬れる程度の能力

私は、暇だったー。

三日置きの百鬼夜行も終わり、梅雨も過ぎた頃。

私は暇だったから、刀を振って新しい技のアイデアを探してした所だったです。

そして、夜斬刀の能力が夜を斬れる程度の能力という、能力が気になったので、夜ってどういう状態かを、考えていた時です。

もし・・・あの状態の事を言うんだったら。

そして、結果は予想通りだったです。

何をやったかと言うと、影を斬ってみたのです。影を斬ると、その物体も斬れる様です。

光が当たらない黒い部分を夜だとするならば、この刀で斬れると思ったからです。そして、影の濃さは濃いめの方が良く斬れるみたいです。

チリンチリン

「ちよつと待つてです」

呼び鈴の音。私を呼ぶ音。

「こんにちは、リーさん。阿求です」

「こんにちはです、どうしたんですか？」

「幻想郷縁起に、貴方の事を載せようと思いましたが。

情報が足りなさ過ぎたので」

「そうなのですか」

「まず2つ名は、闇より黒い神の巫女。ですね？」

「はい、そうですね」

「単刀直入にいいいますね。異変を起こす気はありますか？」

「無いのです」

「そうですか」

「上がってです」

「では、上がらせてもらいます」

「では、改めるです」

「そうですね…」

こんな感じで、話をしてたです。

「では、私はこれで」

「ダスビターニャ」

阿求は帰って行ってしまった。でも、

「妖精。いるのです?」

気配がするのです。

「そこですね」

「あーあ。捕まっちゃったー」

サニ―を捕まえる。もちろん、コピーはしない。

「お茶はどうですか?」

「仕方ないわね。ルナ、スター」

「何やってるの、サニ―」

「さあ、良ければ上がってお茶を飲むです」

「ここはおとなしくしましょう」

「ぶー。はなせ、はなせ」

すっ。551の肉まん。

「それは!肉まん!卑怯だぞ、私が肉まん好きだって知ってたのか!」

「上がるですか?」

「分かった」

…Now Low d i n g

「何で私達の場所が分かったの?」

それはですね…

「眼と耳には、自信があるのですよ」

「…嘘だ!」

まるで、どつかのアニメみたいです。L5なのです?

「急にどうしたんです?」

「私達の能力が、眼と耳が良いだけで場所が分かる筈無いでしょ」

… 本当にそうなんですけど。ここは適当に理由をつけるのですか。

「実は先の運命を見て、居る事は分かっていたです」

上手く丸めた気がするです。

「そういえば、そんな事も出来たんだったね。私とした事が」

「そういえば、何しようとしてたんですか？」

まあ、どんな理由でも許すんですけどね。

「そのーなんて言うかー黒の巫女の実態って、どんな物なのか。って
気になっただけ」

「じゃあ、次回に回すです」

「次回？何の事？」

第28話 瀉夢の日常

私の朝は、牛四つ時から始まる。

(3時30～4時00)

「ふあゝ」

おはようなのです。まだ日も出てない今日。
まずは着替える。

そして、箒を取って掃除です。

まだ暗いですね。

私は慣れてますが、皆さんはどうなんです？
どうでもいいですけど。

静かな神社内。

寂しく箒の掃く音だけが聞こえてくる。

しゃっ　しゃっ　しゃっ　しゃっ　しゃっ　しゃっ

その音は、誰も聞かない筈なのに、
一定の感覚で、その音は刻まれていた。

掃き終わった頃。

時刻は寅二つ時になっていた。

(4時30～5時00)

「おはようございます。リー様」

「おはようなのです」

何時も掃除が終わった時に、暁は目を覚ますのです。
掃除が終わったぴったりの時に。

「さて、暇ですね」

「何なら、続きでもします？」

本当に止めて、r—l8に成るから。

「冗談ですよ」

「もうちよつと遅く起きれば良いのに」

「聞こえているですよ」

「朝ごはん作るとききますね」

「・・・」

スルーですか。まあ良いです。お互い気にしなければ、特に問題は無いのです。

朝ごはんも食べ終わり、朝の体操を始めるです。

まずは適当に身体をほぐすです。

それから夜斬刀を使い、瀉流剣術を磨くのです。

それが終われば、空を飛んで今日の様子を見ます。そして終わるです。

・・・参拝客が来なければ、暇です。

実に暇です。

何をしようか悩むですね。

チリンチリン

「はいなのですー」

戸を開けると

「遅れたわー」

「遅れて申し訳ありません」

「いえいえ、上がって行くです」

幽々子と妖夢が来た。

「白玉楼はどうしているんですか？」

「心配なんてしなくても、誰もあんな所に行かないわ」

「そう言えばそうだったですね」

私が居た時も、誰も来なかったですからね。

「今日はどうしたんですか？」

「暇すぎて耐えかねて、ね」

「そうだったんですか」

「私を抜いて話を進めないでください」

「そこまで進んで無いわよ」

「そ、そうだったみよん」

「ポーカーでもします？」

「ポーカー？」

「ポーカーね、やるわ」

「何です？ポーカーって」

「ファイブオブアカインド。です」

エースが4枚と、ジョーカー1枚のペア。

「あゝあ、スリーオブアカインドね」

4が3枚と、6が1枚と8が1枚。

「私なんてツーペアですよ」

6が2枚と、4と3と2。

「ロイヤルストレートフラッシュ。私の勝ち」

「暁の勝ちですか、やるようになって来たですね」

「へえゝ強いのねゝ。その人形」

「ツーペアですよツーペア」

「幽々子も強い方の手札ですよ」

「そうなの？」

「そうなのですよ」

私達の札がおかしいのです。

「もうすぐ昼ですが、食べて行きますか？」

「ええ、最初からそのつもりだわ」

「幽々子様」

「いいのよ、ね？」

「食べて行くと良いですよ」

「今日はチャーハンです」

「チャーハンですって？」

「幽々子様、そんなに食べては駄目ですよ」

「分かってるわよ」

「それじゃあ、暁が作ってる間は、3人でポーカーするですか」

「私はちよつと」

「私はやるわ」

「じゃあ、ブラックジャックって知ってるです？」

「あのメス使いの方？」

それは違うブラックジャックの方です。

「違います、トランプゲームです」

「そっちの方ね。だったら、紫とやった事があるわ」

「私がディーラーするですね」

「構わないわよ」

ターン1 まずはトランプを配る。

漓 エース ??

幽 エース キング

「ナチュラルブラックジャックですか、最初から凄いの引くですね」
「スタンドだわ」

ターン2 勝負

漓 エース クイーン

幽々子 エース キング

「こっちもナチュラルブラックジャックです」

「これじゃあ勝負が付かないじゃない」

「仕方ないですね」

ターン1

漓夢 10 ??

幽エース 9

「微妙ですね」

「20：： スタンドでいいわ」

ターン2

漓10 エース

幽 エース 9

「ナチュラルブラックジャックです」

「このトランプどうなってるの」

「ディーラーするですか？」

「分かったわ、やってみるわ」

ターン1

幽10 ??

漓10 7

「うーん、17ですか」

「どうする？」

「スタンドするです」

「勝負しに来たわね」

ターン2

幽10 6

漓10 7

「引くわ」

ターン3

幽10 6 6

漓10 7

「バスト。ね、良く勝てたわ」

「出来ましたよー」

「頂きます、なのです」

「それじゃあ、頂くとするわ」

少女（？） 食事中

「美味しかったわ、白玉楼の料理も任せたいわ」

「冗談は止めて下さい。幽々子様」

「美味しかったですよ」

「はい、リー様」

そして、昼御飯を食べると帰って行き、暇な時間を過ごして1日が終わった。

u a 三千突破話 敵視点

異変は、秘密裏に起こっている。

誰も認識出来ないこの異変は後に、忘却異変と呼ばれる事になる。

この異変は、起こった出来事を忘れさせる為、誰も気づけない。

もし万が一気づけたとしても、その時点ではもう遅い。

私達の目的は、この幻想が集まったこの地を幻想で塗り固め、一気に解放する事で、人や妖怪が狂気に犯される事。という、何とも言い難い目的である。

何故こんな事を目的としているか？それは、此処から出る為である。

私も、出来ればこんな事はしたく無かった。でも、どうしても此処から出なければいけない。

ティーも能力を試してみた。けど、そもそも有効範囲が狭い為、意味は無かった。

だから、私達はせめてこの場所を最後まで見届ける事にした。

狂気でこの地が落ちないと、私達は出られない。

能力持ちだから、帰してくれる理由が無い。

あの黒麗の所だったら、帰してくれるかもしれないけど、期待は出来ない。

私達は元々10人だった。けど、私のお兄ちゃん。語部かたりべ 語はかたる、何

処かへ言ってしまった。何度合うように書いても、来なかった。お兄ちゃん的能力は、語った事を本当にする程度の能力。だから、何度書いても来なかった。妹の能力を使っても、語お兄ちゃんは来なかった。

■ 此処から出てどうするのかって？それは ■ 勿論、ティーとのこd o ■ ごほん。本来の目的は、此処から出る事。■ 此処には、たまたま迷い込んでしまっただけで、何の恨みも無いけれど。

でも、子供を作りたいのは本当だけど、寝ている時、ティーは違和感を感じ取ると、すぐに起きてしまう為、しようとしても出来ない。

1回、全員とする様に書いてみても、その夜はティーが無意識に能力を使ったのか、そんな展開にはならなかった。

まあそんな事、此処に書く程でも無いですね。

暇ですから、ティーの事でも書きましょう。

ティーの能力の副作用で相手の能力を見る事が出来る。でも、本人曰く凄く疲れるみたい。

ティーの武器は刀で、名前は「へし切長谷部」。

え？リーに持たせるべきだって？気にしない気にしない。

此処から下は質問コーナー。私が聞きたい事をティーに答えて貰います。

1番好きな物は何ですか？

「好きな物・自由。かな？」

この女の子8人の中で1番は誰ですか？

「1番は居ない。全員が2位」

何で寝ている間にしようと思わ無いの？

「・何度か理性を失いかけた事は有る」

勿論、1番にするなら、私ですよ？

ティーの右腕を取り、右腕をあんまり無い胸で挟み、脚を使って腕を又で挟む。

一瞬、伸ばしかけた左手を戻し、冷静に答える。

「それは分からない」

これで、このコーナーは終わりです。

「終わったのに、何で手を離さないんだ？」

それは、このままお酒を飲みに行くからです。

「酒はあんまり好きじゃないけど、仕方ない。何を飲むんだ？」

それは勿論、飲んでからのお楽しみです。

「どうなっても知らないよ」

ティーがしようとしなからです。

「そんな事を言われても、その見た目だと、強制性交等罪で逮捕になるよ」

そう、私達8人は全員、幼女みたいな姿だが、能力のせいで、中身の年齢が上回っているのです。

この幻想郷には、そんな法律は無いのですよ。

「確かにそうだけど。・ああ、ありがとう」

お酒は、期待していて良いです。

「そうなのか。折角だから、飲む」

私は、このお酒を飲むと必ず酔う様に書いている。しかも、用意したお酒はウォッカの為、酔うことは間違いないだろう。

東方永夜抄 〵 Imperishable Night.

第29話うどんげえ

チリンチリン

誰か、私に用のある人がやって来たです。

「あのーお薬要りませんか？」

鈴仙・優曇華院・イナバ。ですか。

「何の御用ですか？」

「いえ、お薬を売りに来たんです」

「正直に言うです。永遠亭に來い。って事です？」

「何でもお見通し？流石、お師匠様が目を付けるだけは有るみたいね」

「それで？です。何の用ですか？」

「貴方の噂を聴いてお師匠様が、「私達だけじゃ思いつかない事でも、この子には分かるかもしれない」って」

「そうなのですか」

多分、完成には信用していないと思うのです。

今日も多分、最悪睡眠薬を飲まされていたかもしれないので
す。

「行くですよ。歩きが良いですか？それとも飛んだ方がです？」

「迷いの竹林の前までは、飛んでいきます。そして、竹林内は歩きます」

「では、行くですか」

「はい、私も素直に来てくれた方が、楽で良いので」
「やっぱりなのですかー」

迷いの竹林

「ここからは、迷いの竹林となります。後ろを離れないようにして下

さい」

「分かったのです」

ドゴン グシャ

などと、鈍い破壊音が聴こえてくる。

「あれは？何ですか？」

「あれは、うちの姫様と妹紅の喧嘩ですよ。見てみますか？」

「いいのです」

「では、永遠亭へ」

その後も歩き、しばらくすると和風な建物が見えてくる。

永遠亭

「こちらが、永遠亭です。中へどうぞ」

「お邪魔するです」

多分、移動している間に信用が高まったと思うのです。
信用60って何とか成る物なのですね。

「貴方が瀆夢ね。ようこそ、永遠亭へ」

永琳が挨拶してくれる。

「私は、此処で病人の治療をしている。八意永琳よ」

「宜しくなのです。さっそくですけど、何の様ですか？」

「月の追っ手にどう対処するか。あなたにアイデアを求めたの。それと、今回の件は異変と思われる可能性が有るから、貴方呼んだの」

「そうなのですか。では、永琳さん」

「はい？」

「貴方が私の、マスターですか？」

右手の平を出す。もう何度か見慣れた光景である。

「マスターじゃないわ、永琳お姉ちゃんよ」

そう言い、手を置く。

「契約成立です。永琳お姉ちゃん、宜しくなのです」

「はうっ」

凄く顔を赤らめているのです。

「これから宜しくね」

「何そこでたむろしてるの？」

「あつ姫様。そんなに汚くして。お客の前ですよ？」

「何？この子。神霊？それとも現人神？」

「どちらかといえば、現人神ですけどね」

「詳しい話は中입니다。付いてきて下さい」

第30話永遠に留まったままの――

部屋に通される。

さして狭くも無く、広くも無い様な部屋。

「さて、では説明してもらいましょうか」

「そうですね。では、単刀直入に言いますね。私達は、月の追っ手がここまで来ない様にしたいんです。できそうですか？」

いや…聞かれてもですね…。

原作の通りにしか動かしようがないですし…。

「それだったら、月を偽者の月にしてしまうのはどうです？」

「偽者に？」

「そうです、大きな月にするのです」

「なるほどね。偽者にすり替えて、分からなくするのね？」

「そうですね」

そういえば、アクシデントは有ったけど、一応原作通りに進んでるです。まあ、原作通りに進める必要なんてないのですけどね。でも、まだ夜を長引かせるだけの理由…。

「多分人間は、その変化にはきずかないはずですよ」

「そうですね」

「そして、月の影響を受けやすい妖怪が、人間を連れて解決しようと動くはずですよ」

「そうですね」

「そこで妖怪は、夜を止めてでも異変を解決しようとするはずですよ」

「ちよつと良い？」

「なんですか？永琳お姉ちゃん」

「なんでそんなに言えるの？」

「…未来から来た。って言ったら信じるですか？」

「そういえば、外来人でしたね」

「そうですね」

「しばらく此処に居ると良いわ。お嬢様が“良い”と言えただけど」
「分かったです。良かった場合はしばらく居ることにします。」

「では」

数分後…

「お嬢様が、戦ってみたい。だそうです」

「分かったです」

「それでは、準備をして御待ち下さい。呼んでまいります」

数分後

輝夜を連れて永琳がやってくる。

「御待たせしたわね」

「いえいえ。さて、初めるです」

両方とも空高く飛びあがる。

「どうするの？」

「何がですか？」

「スペルカードか、戦闘をするか」

輝夜は、そんな2択を出してくるです。当然、この世界で行われている

「スペルカード。です」

「じゃあ、始めちゃいましょうか」

先に輝夜が動き始める。後ろの方へ下がって行く様だ。確かスペルカードは。

難題「龍の頸の玉 ―五色の弾丸―」

放たれた弾幕は様々な色を放ち始める。

神鬼「未来永劫斬」

放たれた弾幕をもろともせず、一気に斬り。そして切り刻む様にして、斬る。普通の人間なら、オーバーキルも良い所だ。が、輝夜はそうならない。振り向いて見ると、まだ輝夜はそこに居る。

「どうしたの？この程度？」

「いいえ、まだまだです」

「そう。・なら」

神宝「ブリリアントドラゴンバレッタ」

先程もそうだったが、今回はより高難易度になっている。

容赦の無い弾幕が滴夢に当たる。―筈だった。当たる寸前に時が

止まったのだ。瀛夢の能力は、その身が危うくなると自動で使われるのだ。

「そういえば、どうやったら私の勝ちになるんですか？」

不意にそんな考えを思い浮かび、口に出していた。でも確かに、私はどうやったら勝つのですか？まあ、勝てなくても良いですけどね。そう思い、ある程度距離を取って再開した。

「ふーん。厄介ね、貴方の能力」

「そういえば、どうやったら私が勝ちになるんですか？」

そう聞くと、輝夜はニヤリと口を吊り上げ、まるで口裂け女のようなその口から発せられたその言葉は。

「私が満足するまで」

第31話待たせたな!

「た、大変です」

鈴仙が急いでこちらに向かつて来る。

ん? 何が起こったんですか?

「何? 私達の戦いに水をささないで」

そんな事を輝夜は言う。

「何が起きたんですか?」

「竹林が! 燃えているんです!」

燃えているのですか。

多分、妹紅では無いのです。

「本当?」

「ええ。今、妹紅さんが、犯人を探しています」

「私も犯人探し手伝うです」

正直、輝夜との戦闘でもうすぐ奥の手を出す所だったですから。危なかったです。

「中々やるな」

「いえ、何回焼いても生き返るのは、貴方が初めてです」

「そうか」

こんな会話をしているが、こいつがこの竹林を焼いた犯人だ。さて、どうしてくれようか。このままじゃ、あの野郎に濡れ衣を着せられてしまう。

こいつは、炎を出しても自分の力にするからな。手の出しようもないな。こんな時に、あの野郎が居れば、って、何を考えているんだ。私はあの野郎には馴れ合えない。そんな事より、先にこいつをどうにかしないとな。

「早くしないと燃えちゃうよ」

チツ

調子に乗りやがって。1発。いや、何十発か殴らせろ。

キイイン

透き通った様な音が発生した。

「なんじゃ、こりゃ」

「動けないんだけど。どうなってるの？これ」

一瞬にして炎が凍ってしまったのだ。

「うわー凄い事になってるです」

相手の能力は、炎を操る程度の能力。ですか。

「仕方ないです。奥の手を使うしか無さそうです」

「1・2・3・4・5。5枚ですか・行けるですね」

ヒュッ

5枚全てを、炎に向けて投げる。炎で焼けない所を狙って。

キーン

先程まで炎だったそれは、全部氷に変わっていた。

これが奥の手です。紙に能力を付与しておいて、必要になったら使うのです。そうする事によって、魔力の消費を抑えられるですし、威力も上げる事が出来るです。

「こんなの、物語に書かれて無かった筈」

そう、こんな物語は有り得ない。私が、氷漬けになってる物語なんて。絶対に無い。あいつ、絶対に許さなえ!!

ゼツタイニ。ゼツタイニ。ゼツタイニ。ゼツタイゼツタイゼツタイ
ゼツタイゼツタイゼツタイゼツタイゼツタイゼツタイゼツタイ
ゼツタイゼツタイゼツタイゼツタイゼツタイゼツタイゼツタイ
タイゼツタイゼツタイゼツタイゼツタイ。

ぼうつ・ジュー

さつきから何なんだ？急に炎は凍るし、凍ったと思ったら、また炎が上がる。

炎を出すための対価が、出した炎を氷にしてしまう事なのか？でも、それだったら、私の身に纏う様に使うんじゃ無くて、相手の体にまわりつく様に使う筈だしな。

鈴仙の能力で波長を見ようとしたら、狂わしちゃったです。多分今、狂気に脅かされている筈です。・今は、あの人をどうにかするのが先ですね。スキマに入れるです。・

コドコ。沢山ノ目ニ見ラレテテ気持チ悪イ。

人影が現れる。

誰。

「私は、瀛夢。リーって呼んで。です」

リー。誰ソレ。ソレヨリ私ハアイツラを許サナイ。アイツラハ私ヲ売ツタンダ。

「私には、貴方の気持ちは分から無いですが、復讐に燃えている事位分かります。どうです？手を貸すですよ？」

フザケルナ。私ハ、才前ヲ倒ソウトシテココマデ来タンダ。今更味方ニ成ルナド、都合ガ良スギル。

「そう・ですか。では、その狂気を無くすです」

ヤメロ。私ハアイツラニ復讐スル。

「目を開けて、受け入れるです。そうすれば、その痛みも収まる筈です」

吐息がかかる位まで顔を近づけ、目を開ける。波長を見て、収める。

「あれ？ここは？」

目を覚ましたみたいです。

「つて、離れて。何しようとしてるの。そんな事をして良いのは、ティーだけだ・し。それに、何ここ？気持チ悪いんだけど」

「では、ダスビターニヤ」

何だっただんだ？

って落ちてる！

やばいやばい。

・あれ？衝撃が来ない。しかもここ、私達の屋敷の目の前だし。

「何してるんだ？早く中に入ったらどうだ？」

あつていー。
「何でもない」
「そう」

東方忘却録く be a forget to

第32話何かがおかしい。

「邪魔が入ったけど…出来そう?」

「です。でも、魔力消費が少ないのが何処か頼りないです」

「そう…頼りにしてるわ。リー」

そう言い、中へ戻って行く輝夜。私は今、満月に右手を開いた状態で向けている。幻想郷で見る月は大きくて綺麗です。と思いながら、右手を閉じる。月を偽者に代える魔法は、魔力消費が思ったより少なく済み、どこか頼りない。

「永遠亭一同、貴方に礼を言うわ。私達に協力してくれてありがとうね」

輝夜がそれを言い終わると、頭だけ下を向け、顔を上げる。それに合わせて、永琳と妹紅と鈴仙も頭をさげる。

「ダスビターニヤ。です」

そう言い、此処から離れて行く。着いた所で、目を疑う事になるとは知らずに…。

此処は先程まで、炎で焼かれていたはずである。しかし、此処から見えるのは何処までも続く竹であり、焼けて開いた土地では無かった。

無論、そういう能力が有るのだろう。事実を隠せる様な能力…です。か。そう思いながら、神社までスキマで移動した。

目の前には、ただの空き地があつた。神社があつた筈のそこは、最初から何も無かつたかのように、目の前には森が見える。何か建物が立っていれば、少し位隠れるだろうこの光景は、完全にこの建物が無くなっている事を指していた。

sanチエツク60↓03 クリテイカル

o h . . . フアンブルの方が美味しかった。視聴者的にも、此処は発狂する流れだったと思うけど？リーちよつとダイス目腐って無いかな？

えーでは貴方は、特に神社が無くなった事に対して思う事は無いでしょう。（さいつていだww）

どうしますか？

紫の家にスキマで行きますか。自ら地獄の道へと（ボソツ）。いえ、何でもありません。

スキマで紫の家の玄関先まで来たりー。目の前には、懐かしい八雲邸があります。

目星70↓36 成功

何かおかしいと思う様な事はありません。

どうしますか？入ります？入りませんか？

入りますか。チャレンジャーですね。では、描写をします。

えー。まず、ノックをしたら、反応が有ります。

時間？今の時間は、馬3つ時位だと思う。

ああ、1:00→1:30までね。

では、目の前の戸が開かれて、紫がやって来ます。

貴方を見ると眼を細め、話かけて来ます。

「貴方、どうやって入ったの？立ち入り出来ないはずよ」

心理学ね。

心理学50↓??

紫が、貴方に対して何かを疑っており、良くない方向である事も分かる。

アイデアで何かを思い出す事が出来ます。

アイデア90↓50 成功

貴方は紫に、何時でも来ていい、と。言われていた事を思い出します。そして、何時でも良いのなら、こんな質問をしない筈です。そんな考えに浸っていると、紫がまた話かけて来ます。

「貴方は、外来人なの？」

そう、聞いて来ます。？能力はちゃんと今までの分はあるよ？話かけますか？では、ロールプレイ R Pお願いします。

「私は黒麗漓夢。です」

まさか、自己紹介を紫にする羽目になるのですか。。

「黒麗漓夢。やっぱり、外来人ね。能力持ちと考えた方がいいかしら？」

心理学50↓??

では、嘘をついている様には見えませんでした。

「能力持ちです。では、確かめたいことがあるので、ダスビターニヤ。です」

・そう言つて貴方は、この場を離脱するでしょう。何処に行きますか

・紅魔館、ね。

？

――紅魔館――

貴方は今、紅魔館の門近くの木で隠れています。どうぞ。

目星70↓87 失敗

特に何も分かる所はありませんでした。

門に向かいます。か。

貴方が門に向かうと、美鈴が門に体を預け、寝ているのが分かります。

そんな事をするのですか。いえ、構いません。描写をさせて貰います。

これまで、幾度と無くナイフを受けて来たが、この痛さは意識もまなならない為、貴方の意識は、深くなります。

く時間は少し遡るく

美鈴に向かってナイフを投擲。腹部にですか。いいですよ。3本同時に？構いません。振ってください。

投擲 7 0 ↓ 3 8 成功

投擲 7 0 ↓ 3 1 成功

投擲 7 0 ↓ 3 3 成功

全部 3 0 台えゝ。ダイス目が凄いな。分かりました。では、描写をします。

リーがナイフを投げると、全て美鈴の腹部に命中します。

ダメージロール ↓ 1 0

ダメージが殺しに来てる。

c o n ? ? ↓ 9 7 ファンブル

なんでや。0 1 クリティカルの流れやったやろ。まあええわ。描写するわ。

では、ナイフを投げた腹部から、凄く血が出ています。

s a n c 6 0 ↓ 1 9 成功

1 D 2 でどうぞ。2。

では、s a n 値が 9 3 になります。

殺っちゃったのですう。

第33話 忘れてしまう事の辛さ

美鈴は倒れています。

入りますか？ん？妹紅から貰った刀を付ける。良いですよ。

えー右腰に、妹紅から貰った今いまのつるぎ剣が有ります。

門は、触ると開きます。

入る？分かりました。

コツコツコツコツ

ブーツが床を蹴る音が、館に響く。

暫くすると、ナイフが突如私の周りに出現する。

が、そのナイフが出現する前に、私のナイフを周りに投げていた為、
両方のナイフは落ちる。

スキマで一氣にレミリアの所まで行くです。

ーレミリアの部屋

スキマから出ると、昼間なのにも関わらず、普段の服装でベットに
腰掛けているレミリアの姿がある。

「ここに来てしまったのね」

「覚えているのです？」

来てしまったってなんですか？

「ええ」

私はその日、能力を使って未来を見ていたわ。その日はリー、貴方の未来を見ていたわ。そうして見ていると、あらゆる妖怪や人々が貴方の事を忘れている未来だったの。しかも、私や稗田の所の子や、あの閻魔までも、貴方の事を忘れていたわ。

そこで私は、起きた出来事を紙に書いて、いつ起きても対応出来る様にしていたわ。

そして、こうして起きてしまったわ。咲夜もフランも、更にはパチエや小悪魔、美鈴と私を含めて、全員忘れてしまったわ。

そして、私は手記を見て思い出したわ。でも、皆はどれだけ言っても、信じてくれなかったわ。

「これが経緯よ」

一旦忘れてしまったのですか。まあ、仕方の無い事なのです。生きていれば、いつかは忘れてしまう物なのです。

「ごめんなさいね。本当に。肉体関係まで持ったのに、忘れてしまうなんて」

「とつても落ち込んでるのです。どうかしたいのです。」

「です。こつちに来てです」

「え？ああ、分かったわ」

近寄つて目の前に立つレミリア。

「何をするの？」

そして、ぎゅっとハグする。

「え、何？ビンタでもするかと思ったじゃない」

「大丈夫なのです。例えば忘れられたとしても、私が覚えていれば。何も問題無いのです」

「貴方には問題無くても、それを思い出した時に辛くなるのはこつちの方なのよ」

「それが、今の状況なのです。今は、冷静に判断して、異変の黒幕の所まで行くのです」

「分かったわ。咲夜」

突如として現れた咲夜。何か、威圧を感じるのです。

「はい、何でしょうか」

「数日間開けるから、頼んだわよ」

「はい、かしこまりました」

消える前に一瞬、とてつもない量の殺気を向けられた気がするのです。

「さあ、行くわよ」

「はいなのです」

第34話ルーミアは仲間

「何してるのだー?」

空を飛んでいると、ルーミアが現れる。レミリアは、別方面へ異変解決しに行っている。

「異変解決ですよ」

「そーなのかー。滴夢の実力が見たいのだー」

忘れて無いのです。何で忘れて無いのです?

「良いですよ」

「開幕スペル行くのだー」

月符「ムーンライトレイ」

ルーミアの弾幕が、夜を危うく照らす。

幻象「ルナクロック」

まずは奇数弾を放ち、近くまで寄った所で時を止め、ナイフを放つ。
ピチューン

ルーミアが私の弾幕に当たる。

夜符「ナイトバード」

左右にルーミアの弾幕が放たれる。

幻幽「ジャック・ザ・ルビドレ」

適当に大型弾幕を放ち、時を止めてナイフを大量に放つ。1ボスに
対して容赦しない弾幕なのです。

ピチューン

またしても、ルーミアが当たってしまう。これには、ルーミアも認め
たようだ。

「霊夢よりも強いのだー。私も少し、本気を出すのだ」

漆黒符「ジ・ブラックアウト」

先程まで空に有った偽の月や星辰の光を漆黒が塗りつぶしていく。
完全に真っ暗闇になってしまった。でも、案ずる事は無いのです。ま
だ耳と感覚神経が残ってるのです。目を閉じて音を感じて、空気の流
れを感じる。

時は来たのです!!

滴刀「夜斬刀」

スパッ

居合で斬ってしまおう。音は出なかったが、空気の流れが変だったのです。

「ここまで完膚無きまでに倒されると、尊敬すら覚えるのだー」

「そうなのかー?」

「そうなのだー」

「わはー」

「私も異変解決手伝っていいのかー?」

「いいのだー」

こうして、ルーミアも仲間になった。

私達が今いるのは森の中。道案内はルーミアに頼んでいる。木々が不規則に生えている中、木々が生えていない円形の場所にたどり着く。しかし、ただの円形の場所では無かった。その真ん中にはレミイが居たのだ。

「あら、待っていたのよ。リー」

カリスマを放ち、威圧さえ感じさせるその姿は、普段の碎けた感じとは全然違う物であった。

「何で待っていたのです?」

「それはね、貴方を倒す為よ」

「な、何ですか?」

「白々しいわね。これまで、私達異変を起こす側に付いて、戦わずにここまで来れたんですものね?羨ましい限りだわ。そうやって、自分は戦わずに仲間・いいえ、手駒と言った方が良いのかしら?を使って楽して来たのは、何処の黒巫女さんでしょうね?」

神罰「幼きデーモンロード」

夜闇にレミリアの出したレーザーの光が交差し、私達を囲んでいく。そして、そこに弾幕が放たれる。

霊符「夢想封印」

私の弾幕が放たれる。

第35話 go to the hell.

弾幕がぶつかり合い、中和して消えていく。

「私、何も知らないのです」

因みに、ルーミアは戦闘に参加させる理由にも行かないので、森に隠れてもらっているのです。

「じゃあ、吐くまで続けるだけだわ」

獄符「千本の針の山」

大量の弾幕が放たれ、隙間を埋めて行く。

私もスペルを放てれば良いのですが、魔力消費が溜まって来て、スペルを発動出来ないのです。

つまり、避け続けるしか無いです。

何度か危うい所はあったのですが、何とか避け続ける事が出来たのです。

はあ、ちよつと疲れて来たのです。

「あら？ スペルは使わないの。まあ良いわ。結局、私が食べてしまうもの。さぞかし美味しそうだね」

神術「吸血鬼幻想」

大弾幕が放たれ、その後を続いて小弾幕が並ぶ。

今回も、スペルを放てそうに無い。

「はあ、はあ、はあ」

何とか避け続けたのです。疲れたのです。もう、ピチュっちやうですか。でも、まだ何も分かって無いのです。

漆黒符「ジ・ブラックアウト」

視界が完全な闇に染まる。私は今スペルを使えないから、ルーミアがやったのです。

意識は遠のく。

目が覚めると、とても暗い所に居るのが分かるのです。そして、水を漕ぐ音が聞こえ、人の声も聞こえるのです。

「お、起きたか。あたいは小町だ。宜しくな」

「よ、宜しくです」

「早速だけど、伝えにやらん事があるんだ」

「なんです？」

「本当ならお前さんは、ここで死ぬ筈じゃあ無かったんだ」

え？・死ぬ筈じゃ無かったって、現に今、死んでるですよ。

「まあ、そこら辺はあたいからは何も言えないから、えーきに聞くと良い」

「そうなんですか」

「そういえば、能力は使え・無いですね。これは本格的に困ったのです。」

「あれが閻魔殿だ。えーきの野郎に挨拶して来い」

見ると、全体的に赤い建物である事が分かる。とても禍々しい。

入ると、目の前には四季映姫が居る事に気が付く。

「おはようございます」

「覚えていなくても、罪は罪ですからね」

「何の事です？」

「結論から申しあげると、貴方にはこれから地獄の方で働いて貰います」

「です？」

働くって、経験は無いですよ？

「ノルマを達成出来なかったら、説教をみっちりとしますからね。後、死神の事はそこに居る小町にでも聞きなさい」

うわー。恐怖政治、怖いのです。 取り敢えず、小町さんに色々聞く事にしたのです。

「色々面倒になって来たもんだ。ほら、奥へ行くぞ」

その後私は、服装や持ち物をチェックされ、黒の袴に死神の鎌とい

う姿になった。

第36話死神

「まず、何からすれば良いのです?」

「船は漕げるか?」

船ですか? だったら、一応漕げるのです。

「漕げるです」

「なら大丈夫だな。あと、あんまり鎌を振り回すなよ。人の体くらい、簡単に切れるから」

「分かったのです」

「なら、あたいは寝とくから、適当にやってくれ」

「ノルマを達成出来なくても知らないのですよ（ぼそっ）」

「さーて亡者はどこだい?」

変わり身が凄いのです。さて、私もそこら辺に居る人を捕まえるのです。

あれ? そういえば、ノルマって何人なんです? 一応、一人運んできたのですが…。

「あの、着いたのですよ。起きるのです」

起きないんですが…。どうするです? ううん。鎌の柄の先で突いてみるですが、反応は無いのです。運ぶしかないのですか。お姫様抱っこをして運ぶのです。

「次の亡者は…っと。なんで入ってるの?」

「起きなかったのです。だから、運んで来たのです」

「なら、そこに置いてくれる?」

「分かったのです」

少年を地べたに置き、踵を返す。

今日はこれをして、合計5人運ぶ事が出来たのです。因みに、ノルマは3人だったのです。

「こちらが、今日から住んでもらう部屋になります」

映姫に連れられ、部屋に入ります。部屋の感じは、可もなく不可もなくと言った所です。

「食事は、食堂が有るから好きにして」

そして、映姫は返ってしまふ。

「どうしたら良いのです？」
「取り敢えず、ベッドに飛び込んで寝るです。」
「？」

「ん？今何時です？」

「って、この部屋には時計も無いのですね。」

今日は休みなのです。この部屋を出て、他の死神さんと挨拶に行ってくるのです。

コンコンコン

「はい」

扉が開くと、白い袴の女性の死神が居ります。

「こんにちはです」

「貴方が映姫が言ってた新人なの？」

「はい、そうです」

「宜しくね。私は幻想郷のもう一人の方の閻魔の死神」
名前が何なのか気になるのです。

「そうなのですか」

「これから仕事だから、後でね」

行っちゃったのです。次は食堂に行くのです。

「パン一つ下さいです」

「はいよ」

そして、渡されるのはパンと牛乳である。

「何で牛乳です？」

「まだまだ成長期じゃないの」

失礼なのです。私はこれで良いと思っているのです。
今日は仕方ないので、パンと牛乳を食べたのです。

能力を使えないのが一番体に來てるのです。せめて何か有ればいいんですけど。弓道場が何故地獄に有るのです？

まあ良いのです。有るのなら、やってみるだけです。見よう見まねですが。

当たったのです。しかも真ん中に当たったのです！

それから何ヶ月か死神として働き、慣れてきた頃に、それは訪れた。

東方花映塚くPhantasmagoria of
Flower View.

第37話ボスは意外と優しい

「はあ」

今日も此処で起きるのです。今日は、仕事の日なのです。

岸に着いたのです。さて、適当に人を探すのです。

何で霊夢さんがいるのです？

「何か幽霊が多いとおもったら、貴方がサボってたからなのね」

「サボってなんか無いのです」

「取り敢えず、どうやってこの異変を終わらせられるのか、教えて貰おうかしら？」

「え？」

「夢想天生」

霊夢の周りに8つの陰陽玉が現れ、弾幕を放ってくる。

全く、人の話しは良く聞いた方が良いのですよ。

今の私には、何も能力は無いですから、頑張って避け続けるしか無いのです。

「はあはあはあ」

「貴方、中々やるわね。名前は？」

「リー。です」

「ふーん」

「全然亡者が来ないと思って居たら、こんな所で遊んでいたのね」

「貴方は？」

「私は四季映姫。幻想郷の閻魔をしているわ」

「つまり、貴方がこのリーのボスって理由ね」

「だったらどうするの？業が強過ぎて地獄にも行けないその体で」

「地獄になら行けなくても良いわ。あの世に行くだけだもの」

「閻魔の裁きはそんなに生易しい物では無いわ。1度決まった事は、絶対に覆せない。私だったら、貴方は黒ね」

「失礼ね！妖怪退治が仕事なんだから、仕方が無いじゃない」

「泥棒だって、人殺しだって、戦争だって、それが仕事の人もいる。仕事だからと言って、その罪が許される事は無いわ。少しでも罪を少なくする為に、善行を積みなさい」

「そう、まずはこの異変が解決してから、考えるわ」

「紫の桜の木は、罪深き者達が宿る。貴方はその紫の桜が降りしきる下で、断罪するが良い！」

異変の原因となった四季折々の咲き誇る花達も、時が経てば次第に元へと戻って行った。

「じゃあ、貴方の裁判を始めましょうか」

「はいです」

私は今、四季様の裁判を受けているのです。

「貴方は、自らが現人神になるうとして、その身を妖怪におとした。ここまででは間違って無いわね」

「はいなのです」

「じゃあ、その浄瑠璃の鏡の前で、自分の今の姿を見て見なさい」

鏡の姿を見ると、右目が青に左目が赤。そして、フランの羽。

どう見ても人では無い。

「そう、それが今の貴方の本当の姿。これじゃあ、畜生道にも行けないわね」

「何処になるのです？」

「浄瑠璃の鏡だったら未来は覗けない」

「ん？何です？」

「貴方は幻想郷に返すわ。過去を見せようかとも思ったけれど、やっぱり見せるべきでは無いわね」

個人的には、見たい所です。

「居るんでしょう？小町」

「あちやーバレたか」

「そんな事を言っている暇が有るのなら、早く地上に連れて行きなさい。これを知っていて、貴方はこの子の体を大切に預かっていたんでしょう？」

「それも知ってたんですか。分かりました、すぐ連れて行きます」

「その服とその鎌は、思い出位に持つて行くと良い」
「はいなのです」

「その鎌には、魂を狩る程度の能力が付いている。正真正銘の“お迎え用”の鎌だ。だから、生者がそれを使う時は気を付けろよ。自分の魂が知らない間に狩られているかも知だからな」

怖すぎるのです。

「まあ、そんな事は滅多に起きないから、気にした方が負けってもんだよ」

「そ、そうなのかー」

「ほら、岸にもうすぐ着くから、出る準備をしておけ」

「ありがとうございます」

「良いつて事よ。後、暇な時は此処に来てくれよ。あたいも暇だしさ」

「怒られても知らないですよ」

「怒られる前にこれば良いだけだろ？」

「それでは、ダスビダーニヤ」

第38話脱線させる程度の能力

「若干臭うですね」

歩きながら、そんな事を呟く。まあ、死体なんて放置していたら普通は腐ったりするですから。

あ、レミイが居るのです。声を掛けづらいのです。仕方ないのです。

「あの、レミイ？」

「ああ、リーね。ごめんなさいね。仕方が無かったとはいえ、貴方を殺してしまうだなんて」

「仕方なかったのです？」

「ええ、どれだけ未来を見ても、貴方が死ぬ未来だったの。そこで、出来るだけ負担が少なく、かつ生き返れる未来を選んだの」

「他の未来はどんなのだったです？」

「良くは覚えていないけれど、焼け死んだり、触手で凄い事になって死んだり、色々な事があって死んだりしていたわ」

「うわー。凄い事になって死んだりするのですか。それは嫌ですね。」

「その鎌はどうしたの？」

「この鎌ですか？これは、“お迎え用”の鎌らしいのです」

「未来はいつでも変わるね（ボソツ）」

「何か言ったのです？」

「何も言って無いわ。さて、暫く私の館に住むと良いわ」

「そうするのです」

「おかえりなさいませ、お嬢様。とリーさん？」

「そうよ。暫くここで住む事になったから、宜しくね」

「はい、分かりました」

「暫くすれば、貴方の事も皆んな思い出すわ。個人差があるけれど。そうね、大体1〜2週間で元に戻るんじゃない？」

「ありがとうございます」

「何時でも来たい時には来て頂戴ね。何時でも歓迎するわ」

カッカッカッカッカッカッゴンゴンゴン

時計の音が鳴る。今は6時である。

目を覚ます。そこは、新しい天井だった。紅魔館に居た事を思い出
し、食堂へと向かう。

「頂きまーす」

今日の朝食は、目玉焼きにハムとサラダと言う、簡単な物だった。
美味しかったのです。

「あら、一足先にご飯を食べて居たのね」

「はい、ごちそうさまです」

「そういえば、あの刀はどうしたの？」

「多分有るですよ」

スキマを開き、刀を取り出して見ると、夜斬刀は茶色くなっている
事が分かるのです。

「そんなに茶色かったかしら？」

「こんなに茶色く無い筈なのです」

「じゃあ、なんで茶色になったのかしら」

「私が死んだから、茶色くなったと思うのです」

「ん？」

「この刀は主人を選ぶのですが、多分、主人が死ぬと、新しい主人を探
す為に、準備をしているんじゃないですか？」

「そうだったのね。刀が主人を選ぶだなんて、随分自分勝手な刀なの
ね」

「そうなのです」

「そういえば、刀って何でこんな形なの？」

「それは、刀は切れ味を求めたからです」

「刀は切れ味なのね。じゃあ、剣は？」

「剣は、切れ味より丈夫さが求められるのです」

「何で？」

「剣は、そもそも血が付いたりすると切れなくなったり、盾があつたりするので、切れ味を求めても無駄だと思われて、丈夫さを求めたのです」

「そうね」

「刀は、そもそも日本では鉄が少なく、盾が作られる事何てありませんでしたし、護身用として持つ物でしたから、そこまで大きい物も作れなかったのです」

「そうだったのね」

花映塚は終わった 第39話外の世界

「で？どうするの？」

私は今、朝食を食べているのです。

そして今、今後の事をレミリアを話していたのです。

人里に戻るか、もうここに住んでしまうか。その決断を今、レミリアと考えていたのです。

「私的には、外の世界にも興味が有るのです」

「そうねえ。・良いんじゃないかしら？」

「良かったのです」

「これが外の世界ですか」

私は今、黒いキャップに黒のYシャツ。それと、黒のパンツを穿いている。

この服は、外の世界に紛れる為に着た服なのです。さて、市内散策でもするのです。

「貴方、可愛いわね。モデルにならないかしら？」

美しい女性がそう言ってくる。

「すいません。お断りします」

頭を下げて、走って逃げる。

「はあはあはあ」

膝に手を付き、前傾姿勢になる。

結構走ったのです。・ここは？

見ると、ここは神社がある事が分かります。それにしても、大きいしめ縄ですね。折角です、参拝するのです。神社の前に有る鳥居の前でお辞儀をし、中に入ります。

まず、手を清める為に、手水舎で手を清めるのです。

左手に水を流し、持ち替えて右手に流す。左手に水を流して貯め、

口に運んで簡単に清め、左手で口元を隠して静かに出す。最後に残った水を左手に流して、縦にして柄を清めれば、お清めは終わりなのです。

柄杓を戻し、参道の端を歩く。この時、真ん中は避けた方が良いでしょう。理由は、真ん中は神様が通るからなのです。

スタスタと歩き、お賽銭箱の前に立つのです。

お賽銭を1000円入れ、鈴を鳴らす。

カランカラン

そして、仁礼二拍手をします。

そして、挨拶するのです。

「こんにちは、私はリーと言うのです。宜しくなのです。暇が有ったらまた来るのです」

「何だ。久しぶりに参拝客が来たと思ったら、ただの現人神か」

背後から声が聞こえ、瞬時に振り向くが、誰も居ないのです。

「ひゃん」

肩を掴まれ、その方を見ると諏訪子が居る。

「お、おはようなのです」

「どこから来た？」

「忘れられた者達が住む町、幻想郷」

「ふーん。まあ、この町は良い町だから、ゆっくりして行くと良いよ」

「はいなのです」

「本当に良い町だったのです」

「ならよかった」

「じゃあ、今日はこの辺りで」

「なあ、幻想郷ってどんな感じの所？」

「一言で言うなら、面白い所です」

「ふーん。じゃ、また」

「どうだった？」

「良い町だったのです」

「そう、それは良かったわ。ご飯は少し遅くなるから、お風呂に入って来なさい」

「分かったのです」

服を脱ぎ、裸になる。

第40話最近あんまり書いて無い

今日は、大阪にお邪魔するのです。

「ここが大阪城ですかー」

今、大阪城を眺めているのです。それにしても、人が多いのです。中には入らないのですよ？

入らないですよ？

そして、ここから離れた所に元稲荷神社があるのです。折角ですから、参拝して行くのです。

パン パン

百円を入れたのです。

願い事はして無いですよ？

ちゃんと挨拶だけなのですよ？

▪
▪
▪
でかいのです。

何がでかいのですって？

それは勿論、目の前に有る森なのです。

え？森が何だって？

これはですね、大仙陵古墳なのですよ。

だから何って？

五月蠅いのです。黙って読んでれば良いのです。(蔑む^{さげす}様な目)

「ひ

ま」

暇なのです。凄く暇なのです。

1度幻想郷に戻るのです。

「おかえり。随分と早かったじゃない」

「暇だったのです」

「そう。お風呂なら清掃中だから、夜になってから入ると良いわ」

「ありがとうございます」

「ゆっくりして行くと良いわ」

「分かったのです」

ボスッ

ベウツトに身体を投げ出す。

とてもふかふかなのです。

意識が遠のくのです。

「晩御飯の用意が出来たわよ」

頬を優しく叩く。

「うゝ」

目を擦り、欠伸あくびもするりー。

「こんばんはなのです」

「さ、早く食べないと冷めるわよ」

「ですゝ」

まだ眠たそうなりーを微笑ましく思いながら、腰掛けていたベットから降りる。

「ふー」

物事が一段落し、一息つく。

「疲れたのですー」

外の世界は慣れないのです。魔力量が少ないので、回復が出来ないのです。

でも、魔力がそもそも多いから良いのです。でも、切れるとこつちに戻れないのです。

おやすみなのです

おはようなのです。

今日も1日頑張るのです！

今日は、人里を散策するのです。

要は霊夢と合わなければ良いのです。

人が多いですー。

カモフラージュの為に、黒い和服を着ているのです。

「すみませーん。団子1つ下さい」

「はいよ」

みたらし団子を1つ買ったのです。朝食にしては、ちょっと遅い気もするのです。が、気にしないのです。

人里を歩いてしていると、角を曲がった所に霊夢が居る。

行くべきか・行かないべきか。

ここは通行人のフリをするのです。

ザッザッ

ザッザッ

ザッザッ

「あつ。貴方！」

霊夢がこっちに気づいて、追って来るのです。

ここはスキマの中に逃げるのです。

「はー。ですー」

疲れたのですー。最近、能力をあんまり使って無いのです。そのせいなのです。

次は何処にするのです？

—ω・ゝ—

—ω・ゝ—

「もう1回長野に行け」です？

仕方ないのです。行くのです。

41話―諏訪湖

やって来たのです！L^{ラー}a^クr^クk^ク S^スu^スw^ワa！
え？何で英語かって？

気にしない方が身のためなのです。

カランカラン

パンパン

諏訪大社でお参りしたのです。

「目の前に神様が居るんだから、直接言えば良いのに」

「ただの挨拶なのです」

「そう」

視線を上げると、お賽銭箱に座っている諏訪子が見れる。

「そう言えば、幻想郷に連れて行ってくれないかい？」

アイエーナンデ!?スワコナンデ!?

「何ですか？」

「そりゃあ、信仰力が無くなって来てるし、他の世界も考えたけどさ。
1番幻想郷が面白そうだったからね」

「そ、そうですか」

「という訳で、連れて行ってくれないかい？」

両目を閉じ、魔力を探る。・足りそうなのです。

「貴方だけが行くのですか？」

「まあ、物は試しだ」

「分かったのです」

右手を伸ばし、スキマを発生させる。

「それは？」

「幻想郷への扉です」

「ふーん。じゃあ入るから。案内でも頼んだよ」

「分かったのです」

「ここは？」

「ここは魔法の森です。キノコ好きな魔法使いが出没するのです」
「ふーん」

「ここが、その魔法使いが住む家です」
「ふーん」

「ここは妖怪の山。天狗のテリトリーです」
「ふーん」

「どうです？」
「中々面白かったね。また宜しくね」
「わ。分かったのです」

こうして、こっちに来ては諏訪子を幻想郷を運び、幻想郷に帰る日々を何度か過ごし、バレそうになった時もあったのです。

でも、毎回諏訪子は待ってましたし、バレないように最善は尽くしたつもりなのです。

「ねえ、幻想郷に連れて行ってくれないかい？」
「またですね」
「毎回すまないね。今回は、この建物ごと移動させて欲しいんだ」
「何ですか？」

「そろそろ信仰力も限界だし、貴方が私達に力を流しているのは気づいているから」

「気づいていたんですか」

「そりゃあ、急に力が増すなんて事は起きないからね」

「そうですか」

気づいていたんですか。まあ、白々し過ぎたのです。

「それで、妖怪の山に運んで欲しいんだ」

「何ですか？」

「1番合いそうだったから」

「そ、そうですか」

「なら、早速始めてくれ」

「でも、大丈夫なのですか？」

「大丈夫だ。問題無い」

両手でサムズアップする諏訪子。

本当に大丈夫なのですか？

「では、始めるのです」

「分かった」

両目を閉じ、自らの身体に流れる魔力を感じる。

そして、目を見開き、手に魔力を集め、巨大なスキマを発生させる。

もう一方は、妖怪の山中腹。

跡形も無く消えた諏訪大社。

「じゃあ、次は私を。その次は、神奈子と早苗を連れて行ってやってくれ」

「分かったのです」

第42話

「じゃ、宜しく頼むよ」

「分かったのです」

諏訪子はスキマに消え、後には綺麗な夕日と街並みが残っていた。暫くして、階段を勢い良く駆け上がる音が聞こえる。

「諏訪子様ー」

その声が聞こえる方を見ると、緑色の髪に紺のセーラー服を着た少女が見えて来る。

「そう、早苗なのです。」

「。」

早苗は階段を昇り、神社が無いことに気がついたのだろうか。目を見開き、絶句している。

「あな・たわ?」

「私はリーです。お引越しを手伝いに来ました」

「おひつ・こし?」

顔を傾け、言っている事が分からない動作を早苗はする。

「へ?」

突如として早苗の足元にスキマを発生させ、妖怪の山の守矢神社に飛ばす。

「うちの早苗に何の様だ?」

後ろから声がし、振り向くと神奈子が居た。私は能力を発動させ、スキマを作る・のですが。

「どうした?その程度か?」

「こうやって挑発して来るのですー。どうしたら良いのですー。弾幕ごっこをここでする理由にもいかないですし。」

「そう言えば、黒い奴が来て私達をどこかへ連れて行くという話は諏訪子から聞いたが、もしかしてお前か?」

「ですー!」

勢い良く返事すると、神奈子は苦笑いし始めたのです。何ですか?

「いやあ。腕試しして欲しいと言われたからにはやるけど、こんな小さい子供相手だとは。」

「腕試し・です？」

「ああ、諏訪子の奴から腕試しをしてくれと言われている。そう言うわけで、弾幕ごっこ？をやるうじやないか」

強制イベントなのですー。

奇祭「目処挺子乱舞」

まずは神奈子のターン。両端からレーザーが放たれ、追い込まれて行く。

しかし、私は何とか避け、スペカを使わずに済んだ。

神穀「デイベイニングクロップ」

またしても神奈子のターンなのです。

円形の弾幕が交互に放たれる。

これも、なんとかスペカを使わずに終わったのです。

神秘「ヤマトトールラス」

またしても私のターンは無く、神奈子のターンなのです。

ナイフ弾のような弾幕が飛び交う。

これも、なんとかして避け続けるのです。

天竜「雨の源泉」

弾幕が降つてき、それが小弾になり、追いかけてくる。

なんとか乗り切り、また神奈子のスペカが発動する。

「風神様の神徳」

花形に弾幕が並び、それが飛び交う。

弾幕に追い詰められ、スペカを使わざるを得なくなる。

霊符「夢想封印」

スペカを発動し、大量に魔力を消費する。

魔力が食うから、使いたく無かったのですが。・・。

何とか凌ぎ、弾幕ごっこが終わる。

「中々撃たなかったわね」

「魔力が勿体ないのです」

「ふーん。じゃ、幻想郷とやらの連れて行ってくれ」

「良いのですか？」

「そんなに避けられたら、当てる気も失せる」

「そうなのです。じゃあ、開くのです」

スキマを開き、そこに神奈子が消えて行く。

第43話タイトルを考えるのが面倒臭くなった人↑
私だ。

「良い所じゃあないか」

神奈子は目線を動かし、周辺の様子を見て、そのような感想を言う。
「こつちなのです」

神奈子を神社に案内するのです。

「よ」

諏訪子が待っていたのです。

「待たせたのです」

「構わないさ。それより、神奈子を連れて来られたって事は、納得したのか？」

「まあ、まあまあね」

「負けるのを分かっているやっただらう？」

「まあ、強いのは分かっていたけど・・・」

「誰か来る」

諏訪子が小さくそう呟くと。

「待たせたわね」

霊夢が飛んでやって来るのです。

「待って無いのです」

「じゃあ早速、退治させてもらうわね」

霊符「夢想封印」

霊夢が弾幕を発動し、周りに大弾幕が発生する。

漓符「夢想天生」

半透明になり、弾幕が効かなくなる。

「なんでリーは私の邪魔をするのよ」

そう霊夢が聞き、思い出してみる。

未来を変える為

思い出したのです。未来を変える為だったのです。
ある意味、もう叶っているのです。

「何黙ってるのよ。撃つわよ」

「撃たないで欲しいのです」

「それで？何でじゃまするのよ」

「それは・未来を変える為なのです」

「未来を変えるためえ？」

「そうなのです」

「貴方ねえ。未来から来たわけじゃ無いんだから」

「分からないのです」

「はあ」

「それでは、失礼するのです。ダスビダーニヤ」

「あつ。スキマに逃げた」

「内の神社になんか用かい？」

ふー逃げきれたのですー。

とどこにいこう？そう考えていると、不意に後ろから声が聞こえてくる。

「私を忘れて無いかしら？」

「紫お姉ちゃん」

「ぶはあ」

「ど、どうしたのです？」

「い、いえ。何でも無いわ。それより、久しぶりに私の所に来ない？丁度暇してるみたいだし」

「そう・ですね」

久しぶりに帰って来たのです。

紫が玄関の力ギを開け、扉を開くと、走る音が聞こえてき、

「リーさまー」

気が付くと”それ”は胸に飛び込んで来た。

「藍様と紫様からお話は聞いてたんですが、中々会えなかったの」
橙である。

「そうなのですか」

「藍様が晩御飯を作っています、もうすぐ出来上がる筈です」

「橙。紫様が帰って来たんですから、あまり迷惑をかけないように」
「はい」

そう言い、橙は戻って行く。

「ご馳走様なのです」

晩御飯を食べ終わり、寝る準備に入る。

思い返せば、もうこの幻想郷に来てから何ヶ月も経っているのです。

長かった用で短かった用な。そんな気がするのです。
未来を変える

ですかー。確かに、原作と比べれば大分と変わったのですが、おおまかな流れ自体は変わって無いのです。

異変が起きる↓霊夢が解決する↓宴会↓時が流れて↓異変が起きる。

この繰り返しなのです。

そう思いながら、静かに眠りに着いた。

第44話 イツヌ

「ふわぁ」

意識を起こし、目を開ける。

まだ暗いが、日は出ている事が分かる。

紫お姉ちゃんはまだ寝ているのです。

さて、何をしましょう。

今日は暇つぶしに、黒麗神社の前まで来ているのです。

とつても、懐かしい感じがするのです。

「あつりー様！」

中から暁が飛び出て来て、私に向かってくる。

「久しぶりなのです」

「プリブエート」

「プリブエート」

ロシア語の挨拶なのです。

「入っても良いですか？」

「勿論です」

了承を得た為、戸を開け中に入る。

そこは、以前とは変わらない様だったが、“何か”が足りない様だった。

まあ、その“何か”は何かは分からないのですけど。

靴を脱ぎ、床に上がる。畳ならではの感触を感じ、懐かしさを感じる。

このまま寝てしまうのです。

意識を覚醒させ、目を開ける。

そこに広がっていたのは、何時も見ていた天井である。

私の見ていた懐かしい何時もの風景。

此処は ■ ■ ■

幻想郷だ。

幻想郷なのか？

ふと違和感に駆られ、体を起こす。しかし、その違和感はもう通り過ぎてしまった。

一体何だったのだろうか。気になるけど、どうしようも出来ない。まあ、気にした方が負けなのです。

そう思い、今日はもう寝ることにするのです。

朝になって起きる。

日はもう出ていて、とても明るい。

しかし違和感がある。なぜなら、知らない女の子が私の体の上に乗っかっているのです。それに、起き上がれないのです。

「どいて下さいのです」

「いや」

「何ですか？」

「何でも」

退いてくれないのですか。なら、

「血は血に！命は命に！回る！回る！世界は回る！変わる！変わる！世界は変わる！バージョンルーミア」

滴夢は黒い粒子になり、少し離れた所にルーミアの姿をした滴夢がいた。

そのまま飛び去ろうとすると、足を掴まれ、こんな声を聞く。

「異変は、終わってない」

言い終わると、手を離し、自由になる。

そしていつのまにか、居なくなっている。

夢だったのだろうか。いや、確かに掴まれた感触があつたから、夢では無い筈なのです。

不可思議な現象なのですが、私も似たような事が出来るので、不思議では無いのです。

さて、何をしよう。

暇なのです。

ひまなのです

『とまるんじゃ　ねえぞ』

どこかから、そんな声が聞こえてくる。

『ものがたりには　おわりがある　から　さ』

『とまるんじゃ　ねえぞ』

ミカァ

さて、気を取り直すのです。

何をしよう。そう言えばさつき、異変はまだ終わってないって言うてたですね。何だったのです？

45話 すいません

まあ、良いのです。

気にしないで進むのです。

「ここは？です？」

そう疑わなければ、こんな光景を受け入れられないのです。
家々は焼け、人里の面影も無く、ただの焼け野原なのです。

▪ なんでこんな事になってるのです？

▪ 考えても無駄なのです。

▪ 早く鎮火させるのです。

ふー。何とか鎮火したのです。

でも、どうしてこんな事になったのです？

▪ 考えていると、ある言葉を思い出す。

▪ 異変は、終わって無いのです。

でも、始まってすら無いのです。

▪ どういう事なのです？

▪ 分からないのです。

▪ まあ、する事も無いですし、再建するですか。

なんとか人里を元の町並みに戻し、ひと仕事を終える。

「ふー。疲れたのです」

今は、紫お姉ちゃんの所に居るのです。

「あら、帰って来てたの？」

「そうです」

「随分早いね。まあ、ゆっくりしていけば良いわよ」

そう言われ、ゆっくりする為に横になって眠る。

『異変は、まだ終わっていない』

何か聞こえた気がしたが、木の聖だと思い、眠りに着く。

目を覚まし、辺りを見渡す。

特に何も異常は無い。

特に何もやる事が無い為、人里を見に行くのです。

「なんで、です」

その風景は、人里の物では無かった。

建物が全て、強い風でも有ったかの様に、壊れている。
どうしてこういう事になったのです？

人里は、再建した筈なのです。

「久しぶりだね」

声のした方を見ると、見た事のある人が立っていた。しかし、
「誰だったのです？」

「紅炎。煉獄紅炎よ」

名前を聞いても、しつくりとは来ない。

そもそも、名前なって聞いて無かった気がして来るのです。

「何の用なのです？」

「えっと、もう気づいていると思うけど、私達はここから出る為に、異
変を起こしているの」

「出る為、ですか？」

「そう」

「なら、私が出来るですよ？」

「へ？」

とても驚いているのです。

「私の能力で、元の世界に戻ることが可能なのです」

「どういう事？」

「体験してみたら分かるのです」

足下にスキマを発生させる。

「きゃっ」

紅炎はスキマに消え、私もスキマ空間に移動する。

？

「ここは？」

「スキマ空間なのです。ここから、あらゆる場所に行けるのです」

「じゃあ、私達の居た所に戻れるの？」

「そうなのです」

「じゃあ、異変を起こさなくて良いの？」

「はいなのです」

「じゃあ1度、見てみても？」

「いいのですよ？どこが良いのですか？」

「じゃあ」

「ん」

目を覚ますとそこは。

.....

第46話伊勢界

「ここは？」

目を覚ますとそこは、普通の森に思えた。しかし、違う事が分かる。ここが何処かは、私の記憶には無いのです。

「ここはどこなのでしょう？」

「ここはー」

紅炎は辺りを見渡す為に、首を動かすが、見回してもただの森ではない。

「ちよつと分からないわね」

「そうですね。取り敢えず、辺りを探索するのです」

しばらく歩いていると、街に到着する。

「見覚えはあるですか？」

「しばらく来れなかったから、分からない」

「じゃあ、散策でもするのです」

2手に別れ、この街を散策する。

「どうです？」

「ここじゃ無いみたい。でも、ティーの出身みたい」

「役に立って良かったのです」

「うん。ありがとう」

「また、用が有るなら来て欲しいのです」

「お世話になるわね」

紅炎を家に返し、私は元に戻っている人里を見る。

「もう、壊されなくて済むのですね」

そう語り、紫お姉ちゃんの家に帰る。

ドアを開け、中に入る。物音は一切しない。つまり、誰もいない。もう夕方だが、寝てしまおう。

「おやすみなのです」

「晩御飯よ。起きて」

体を揺さぶられ、意識を覚醒すると、目の前に晩御飯が並んでいた。
ボルシチだ。

「頂きます」

「ご馳走様なのです」

綺麗に食べ、睡魔が少し襲ってくる。

「おやすみなのです」

意識を深くし、眠って行く。

意識を覚醒し、目を開ける。

特に変化は無い。

人里を見に行く。

それは、普段の人里そのものだった。何も変わらない、普通の光景。
しばらく見ていなかった気がするのです。

この、平和な人里を。

「ねえ」

聞いた事のある声を後ろから聞き、後ろに振り向く。

紅炎だ。

「どうしたのです?」

「私達の元の世界を探してくれない?」

「勿論、良いのですよ」

「えっ? 良いの?」

「勿論なのです」

そう答え、スキマを開く。

「次は、どこの世界に行きたいのです?」

「じゃあ、前に行ったティの出身の所」

「わかったのです」

スキマに自ら入って行き、移動を始める。

目を開ける。こんどは、街の外れに出ている。

なぜ真ん中じゃ無いかと言うと、人の目が多すぎるので、スキマから出るには向かないからだ。

「今日は、ゆつくりと街を見渡したい」

「勿論、良いのですよ？」

拒否する理由も無いのです。

この街は、霧の街ロンドンの雰囲気似ている。

偶には、ゆつくりと観光を楽しむのも、また良いのです。それに、この雰囲気もあいまって、楽しいのです。

キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン
鐘の音が鳴り響く。

その鳴っている方を見ると、ビックベンらしきものが有った。

第47話 ロンドン

ビックベンそのものであった。

やはりここは・。ロンドンそのものだ。

「どうかしたんですか？」

隣に居る紅炎が、そんな疑問を投げかけて来る。

「いえ、何でも無いのです」

もう、太陽が沈みかけている。たそがれどき 黄昏時なのです。

「そろそろ帰るのですよ」

「りようかーい」

元の世界に戻る為のスキマを開く。

「明日も、よろしく」

「良いですよー」

簡単な挨拶をし、帰る事にする。

紫の家に着く。

「そういえば最近、どこに行ってるの？」

「外なのです」

「そう・あんまり、外の世界には関わらない方が良いわよ」

「分かったのです」

布団に入り、寝る。

目を覚ますと、視界が真っ黒である。

目が見えなくなったのでは無い。ただ単に、太陽が出ていないのだ。

要は、あかつき 暁の時間帯なのです。

暇ですから、人里にでも行くのです。

普段通りの、人里である。ただ、違う所を挙げるとすれば、真っ暗

な事だけである。

・暇なのです。

朝になるまで、とても暇なのです。

・なにをするか、考えてみても、特になにも思い付かないのです。

・神社にでも行つて見るのです。

普段から黒い神社だか、日が出ていない事で、より一層黒くなっている。

チリンチリン

呼び鈴を鳴らしてみる。流石に、こんな時間には起きていないだろうけど。

扉が開き、中から何かが出てくる。

「はい。って、リー様じゃ無いですか！どうしたんですか？」

曉だつた。

「いえ、なんでも無いのです。ただ、暇つぶしに來ただけなのです」

「えー、ここに住む準備をする為に來たのかと思つたのに」

「ただの暇つぶしなのですよ」

「そう言えば最近、何をしてるんですか？」

「外の世界で、色々としているのです」

「色々？」

「主に、街の散策なのです」

「連れて行つて下さい」

「です？」

風の音に遮られ、良く聞こえなかった。

「私も、一緒に見に行きたいです」

「なんでです？」

「それは・秘密です」

「まあ、良いですけど・。取り敢えず、朝になるまで居させて貰うのです」

「はい、お茶を入れて来ますね」

「その子は。どこかで見たような見えないような。」
「暁です。宜しくお願いします」

暁は自己紹介をし、私の隣に立つ。

「じゃあ、あそこで良いですか？」

「分かった」

スキマを発生させ、移動する。

街の外れに、出てくる。

「ここが。外の世界。」

暁は周囲を見渡し、風景を良く見ている。

「じゃあ、各自夕方まで自由行動なのです」

第48話霧の街

空を見ると、もう太陽が沈みかけている。
時間の流れは非常な^{とき}のです。

さて、帰るのです。

「帰るのですよ」

まず、紅炎から迎えに来た。

「んー。分かった」

スキマを発生させたいが、ここは街中の為、外れに移動する。

「じゃあ、スキマを出すのですよ」

スキマを発生させ、紅炎はその中に入って行く。

さて、暁も迎えに行くのです。

「帰るのですよー」

暁を迎えに来た。

「もうですか？」

「そうですよ」

「時間が流れるのは早いですね」

「そうですね」

スキマを開く。ここは、街の外れの為、開いても構わないのだ。

「帰るのですよ」

「分かったのです」

暁はしぶしぶといった感じで、スキマに入って行く。

「ありがとうね。毎回私のわがままに付き合ってくれて」

紅炎はそう言い、少しお辞儀をする。

「いえいえ、構わないのです。むしろ、役に立つならそれで良いのです」

「じゃあ。今度は、皆で行っても良い？」

魔力が足りるかの問題は有るが、そんな事は小さな問題なのです。

「良いですよ」

「じゃあ、また明日」

「パカパカ」

紅炎と別れ、今度は暁の所へと行く。

「あつりー様！」

「どうしたのです？」

「今日はここに泊まって下さい」

「良いですよ」

「やったー!!今日は、腕にふるいをかけますね」
中に入り、居間でくつろぐ。

「出来たですよー」

出されたのは、ボルシチである。

「頂きます」

食べてみると、懐かしい味がする。暫く、しばらく食べていなかったからな
のです。

「どうですか？」

「美味しいのです」

「良かったです」

食べ終わる。

「ごちそうさまです」

「暇ですね」

「そうですね。ブラックジャックでもするですか？」

「したいのです」

「じゃあ、私がディーラーをします」

滴 3 ??

暁 エース ジャック

「あっ」

「ナチュラルブラックジャックですね」

「スタンド・です」

漓 3 エース

暁 エース ジャック

「負けたのです」

「もう1回しましょう」

漓 3 ??

暁 4 キング

「15・6以下が出れば良いんですよね」

「そうですね」

「引きます」

漓 3 9

暁 4 キング キング

「バスト・ですか」

「もう1回するです」

漓 8 ??

暁 8 9

「17・バストしてくれる事に賭けます。スタンド」

漓 8 7

暁 8 9

「16以下ですから、引くのです」

漓 8 7 5

暁 8 9

「20で私の勝ちですね」

「もう1戦だけして、終わりましょう」

漓 3 ??

暁 6 9

「また15ですか・。今度こそは・」

漓 3 ??

暁 6 9 5

「20!!スタンド!」

漓 3 3

暁 6 9 5

「16以下ですね」

漓 3 3 クイーン

暁 6 9 5

「またですか」

漓 3 3 クイーン 2

暁 6 9 5

「18で私の負けですね」

「やったー」

「じゃあ、そろそろ暗くなってきたので寝るのです」

「お休みです」

「お休みなのです」

第49話こーいっし

「おはようなのです」

「ううんっ。おはようです」

暁は目を覚ます。

「じゃあ、掃除してきます」

■そうして暁は、神社の清掃の為に出る。

■
とつても暇だ。

■暇つぶしをしながら、暁を待つ。

チリンチリン

しばらくすると、鈴の音が鳴り響く。

- 戸を開け、来た人を確認しようとする。

■ 誰も居ない。

頼みたい事があるの

そう、声が聞こえる。

誰もいない筈なのに、声が聞こえる。

「誰です？」

そう答えると、目の前にとある少女が現れる。

古明地こいしだ。

「どうしたのです？」

「頼みたい事があるの」

「何です？」

「お空が暴走して、止められなくなっているの」

「止めて欲しいのです？」

そう言う、こいしは頭を縦に振る。

「良いですよ」

暁に一言入れ、紅炎の所までスキマで移動しようとする。

「あつ。今日は、全員で来るんだった。」

「あの。」

「なに？」

「明日でも良いですか？」

「なんで？」

「用事が有ったのを忘れていたのです」

「そう。じゃあ、また明日」

「パカパカ」

こいしと別れ、スキマで紅炎の所まで向かう。

スキマから降りると、そこには1人の男性と8人の女の子がいた。
その中には、紅炎もいた。

「来たのですよ」

「あつりー」

「いちいち来るのも面倒ですから、この中で魔力が1番高いのは誰ですか？」

「僕だけど」

「じゃあ、手を出して下さい」

男は、特に気に止めずに手を差し出す。

私はそれに触れる。

スキマを扱う。という、劣化したその能力を、付与する。

「これで大丈夫なのです」

「何をしたんだ？」

「それは後で答えるのです」

そうして、足下に巨大なスキマを発生させ、移動を始める。

「ここは？」

先に、男が声を出す。

ロンドン（仮）の郊外に出てくる。

「凄く懐かしい感じがする」

「うん、だってここにティーが居たのは特定済みだから」

紅炎はこの事実を伝える。

「え？」

「少し前に、来たことが有って」

「散策とかは大丈夫？」

「勿論ですよ」

そう答えると、男は独りでに移動するが、皆が付いて行く。

はあ。また、暇ですね。

「とつても懐かしい感じがするね。ここは」

私は、そんな事を呟く。

「ここに住んでたんじゃ？」

「うん。とても懐かしいな。」

ふと、幼い頃のまだここに居た時の事を思い出す。

「あの子はまだいるのかなあ」

「あの子ってなんなんですか？」

そう放った紅炎に続き、皆がその事について尋問をかけてくる。

「ただの、幼い頃の友達だよ」

「本当に？」

「ほんとに本当だよ！」

「まあ、そこまで言うなら仕方ない」

■ そう言うと、女性陣は各々アイコンタクトを取り、頷く。

■ とても嫌な予感がする。

第50話 太陽信仰

外の世界を堪能し、もう夕暮れ時である。

街の外れには、この世界に連れてきた少女がいた。

「さて、使い方でも教えるですか」

「なんの？」

「スキマです」

その言葉を聞いて、はつとする。そうだ、ロンドンを回っていて、すっかり忘れてしまっていた。

「その・スキマってやつはどうやって使うんだ？」

恐る恐る聞いてみると、その少女は右手を上に掲げ、下まで下ろす動作をする。

「この真似をするのです」

そう言われたので、私も右手を掲げ、真っ直ぐ下ろしてみる。

ひゅうおーん

不気味な音と共に、楕円形の形をした物が現れる。その先は、沢山の目が見えている。

「それがスキマです。こっちだと、魔力の消費が大きいので、早く帰るのです」

・その少女は、私の作ったスキマに消えていく。

・そう言えば、名前もまだ聞いていない。

コンコンコン

戸を叩き、開かれるのを待つ。

「あつ。帰って来てたのですか。リー様」

「はいですよ」

・中に入り、羽を休める。

・何か、変な感じがするのです。

・そう思うと、それが実体を現した。こいしだ。

「何の用ですか？」

「助けて欲しいの」

「お空が、どうかしたのですか？」

こいしは小さく頷き、早く来たと急かすのだった。

「それで？お空を助けたいって訳？」

「はい、そうなのです」

私は、目の前のサトリに向かって言う。

「分かった。付いてきて」

そう言うのと、サトリは移動を始める。私はそれについて行くのです。

そこは、溶岩だまりになっており、下には降りられそうには無い。そして、中央の方には人影が見える。あれがお空だろう。

「お願いします。お空を止めてやって下さい」

私は、サトリの言った事に対して頷く。

そして、飛んで様子を見に行く事にした。

そこには、お空が居た。勿論、普通では無い事は見て取れるのです。

・じゃあ、やるですか。

「核熱「核反応制御不能」」

丸弾がまず全方位に発射され、その後、巨大な恒星弾を撃ってくる。

「滴剣「五芒星」」

夜斬刀を振り、弾幕を消して行く。

「爆符「ペタフレア」」

赤みを帯びた、白い超特大弾が連発される。

距離を置くと、どんどん小さくなっていき、そこに隠れていた小玉弾も見つかる。

私は、チルノの能力を使って弾幕を凍らせる。これには、お空も驚いたように、うにゅ？と声をあげる。しかし、攻撃は続く。

「焰星「十凶星」」

巨星弾を自分の周りに発生させ、回転させる。そして、丸弾を全方位に発射する。

夜斬刀を使い、丸弾を斬りつつ、近づき、ほぼゼロ距離になったところ

「滴剣」「五芒星」

東方星蓮船　　Undefined Fantastical Object.

第51話「」

「うにゆる。やーらーれーたー」

どうやら、元に戻ったみたいなのです。

「さあ、戻るですよ」

「お空を元に戻してくれて、ありがとうね」

「いえいえ、構わないですよ」

「お空の能力を貰って行きなさい。役に立つと思うわ」

「良いのですか？」

「勿論。な能力は、お空が持っていて、宝の持ち腐れだもの」

「じゃあ・」

お空に触れ、能力をコピーする。

「それじゃあ、帰るですね」

「まあ、暇があったら来たら良いんじゃない？」

「そうするです。ダスビダーニヤ」

スキマを使って神社に帰る。

「おかえりなのです」

神社に戻ると、暁ともう1人、ここにいるのが分る。

「こいしだ。」

「なんでこいしが居るのです？」

「スキマに入ってたのー」

「そ、そうですか」

しばらく話をしていると、暁が晩御飯を持って来てくれる。

「いただきます」

「頂きます」

「ごちそうさまなのです」

「ごちそうさまー」

食べ終わり、布団に入る。

「ふあー」

目を覚まし、体を起こす。

特に変わった所は無い。

果たして、今日は何をしよう。

今日は、伽藍堂がらんどうに過ごす事にする。

今日は、朝の宣言通り何事も無く終わった。偶たまには、こんな日も良いかもしれない。

そう思いながら、今日はもう寝る事にした。

暁に起きる。特に、変わった事は無い。そんな、変わらない日常の筈だった。

チリンチリン

鈴の音が鳴る。

戸を開けると、そこには村紗水蜜むらさみなみつが居た。

「どうしたのですか？」

「飛倉とびくらの破片を見なかったか？」

「なんですか？その飛倉の破片っていうのは？です」

「その・白蓮様を復活させる為に必要なの」

「じゃあ、手伝うですよ」

「良いの？」

「はいなのです」

そう答えると、ムラサは私を案内してくれる。

いま、とある船に乗っている。それも、普通では無い。空に飛ぶ船だ。名前を聖輦船せいれんせんと言う。

今日から、飛倉の破片を探す事にしましたのです。

適当に空を飛ぶ。・中々見つからない。どうすれば簡単に見つけられるだろうか。そんな事を考えていると、下に飛倉の破片を発見する。

取りに行こうと近づこうとすると、そこに誰かが居るのがわかる。

霊夢だ。

素早く隠れ、様子を伺う。

「隠れてないで出てきなさいよ」

仕方なく出て、霊夢と顔を合わせる。

「やっぱり。変な物があるから、なにか大切な物だと思って待ってたら、こうして会えたという事ね」

「なにか用があるのですか？」

「そりやそうよ。貴方、また異変を起こす気でしょう？口答えしても無駄よ」

第52話UFO

今回は本当に違うのですけどね。まあ、言っても無駄ですか。

「霊符「夢想封印」

答えないでいると、霊夢が攻撃を始める。が、私は霊夢の周りにスキマを配置しているので、弾幕は私の所には来ない。

「何のつもりよ!!」

「誰も弾幕ごつことは言って無いのです」

「そうね。でも、流石にスキマで消すのは無いんじゃないかしら？」

「一方的に攻撃しようとした人が何を言うのですか？」

「うっ。」

それを境に、霊夢の弾幕は途絶えた。その隙に、スキマを使って飛倉の破片を手にする。

霊夢は動こうとするが、私のスキマが邪魔で、思ったように体を動かせないようだ。

そして、ここから離脱する。

「もう1つめか。早いね」

私が渡した、そのUFOみたいな形をした物に対して村紗は言う。

ある程度集めると、村紗がこういう。

「それぐらいあれば大丈夫だな。じゃあ、皆の所へ向かう」

「もう見つけたのか？思ったより早かったじゃないか。それに、その子は？」

まず、ナズーリンから会いに来た。

「黒麗漓夢。リーって呼んでです」

「ふーん。これから、どこに行くんだい？」

「一輪の所だ」

「分かった」

そう言い、ナズーリンは聖輦船に乗る。

船は出発する。

「あら、村紗にナズーリンじゃありませんか。どうしたのですか？」

「飛倉の破片が集まったから、皆を集めようと思って」

「そうでしたか。それで？そちらの方は？」

今度は、村紗が説明する。

「黒麗漓夢だ。私達の飛倉探しを手伝ってくれたんだ」

「成程、そうでしたか。では、次は・星ですね。会いに行きましょう」
一輪も船に乗り、船は動く。

「もう準備が出来たのですか？なら、付いて行きましょう」

寅丸星はそんな事を言い、私の事は気にも止めずに船へと入る。

「じゃあ、法界へ向かいましょうか」

「不思議な場所ですね」

「そうだね」

声あまり響かない、不思議な所なのです。

「復活を手伝って貰える？」

「勿論なのですよー。何をすれば良いのですか？」

「この飛倉の破片を1箇所に集めて、魔力を流す。でも、並々の魔力じゃ姉さんは起きないから、注意しないといけないけど」

「分かったのです」

このUFOみたいな何かに、魔力を流し込んでみる。

しばらくすると、それが現れる。聖白蓮だ。

「ううっ。あつ、貴方達！」

気が付いた聖は、すぐさま村紗達の所へ向かい、再開を喜び合っている。

そして、私の事も話した。

「そうでしたか。今の時代にも、私の様な考えを持った人がいたなん

て」

「いえ、とんでもないのです」

こうして、星蓮船は幕を閉じ

■ ■ ■

た？

星蓮船はおわった

第53話 幻想的なオブリジェクト

ひまなのです。今、外の世界は夏らしいのです。

この幻想郷でも、段々暖かくなってくるのを感じるのです。

それはそうと、今日は命蓮寺の人達から食事の誘いが来ているのです。

というわけですので、暁と向かうのです。

「今日はどうも起こし下さいました。お食事の用意はもう出来ております。どうぞお入りください」

柄にも無く、ナズーリンはそんな事を言っている。

気にも止めず、私は中に入る。

中に入るまでの、小道。そこには、隠れきれていない小傘がいた。

「うらめしやー!!」

「こんにちはなのです」

「うう。今回も驚いてくれなーい」

「ごめんなさいなのです」

小傘に謝り、私は中へと入る。

「こないだ、私の復活にご協力頂き、改めて感謝します」

「いえ、また何か用があれば、向かうのです」

「まあ、今日はお礼も兼ねて、今日はお造りだから、遠慮なく食べてね」

「分かったのです」

目の前に、色々なお造りが有る。サーモンや中トロや大トロを初めとした、様々な切り身があふのです。

「」「」「頂きます」「」「」

皆で頂きますをして、お造りを食べ始める。

「こちそうさまでした」

私は先に食べ終わり、くつろぐ

「そういえば、なんで私に力を貸してくれたんだ？」

そんな些細な事を村紗は聞く。

「暇だったからなのです」

「それだけかい？」

「ええ、そうなのですよ？」

「ふうん」

「どうしたのですか？なんでそんな事を聞くのです？」

「いや、本当にそうなら良いんだ」

「じゃあ、さようならなのです。ダスビダーニヤ」

「さ、さようなら」

「また、暇な時に来てね」

「はいなのです。ダスビダーニヤ」

そうして、私は命蓮寺を後にする。

帰る為にスキマを出して、移動しようとすると、ふと、違和感をおぼえる。

後ろに振り返ってみるが、誰もいない。

貴方が飛倉の破片を集めているのね

「誰なのですか？」

「レッサーパンダとでも名乗っておこうか」

「鶴？」

「ははっ。外の世界じゃレッサーパンダと思われてるから、言ってみただけ駄目だったか」

そう言い、鶴は姿を表す。

「何か用なのですか？」

「飛倉の破片を集めていただろう？」

「ええ、集めていたのですよ？何か問題があったのですか？」

「いや、ちよつと気になっただけさ」

「そうなのですか。ダスビダーニヤ」

「ええ、さようなら」

鶴と別れ、スキマに入る。

「なんだったのです?」

「さあ?」

ただ暇だっただけだろうか。

まあ、そんな事を置いておいて今日は寝よう。

第54話ギニョル

「そういえば、昨日のは何だったのです？」

「分からない」

「うーん」

「そんな事より、もうお昼の時間ですよ？」

「そうですね」

昼食を食べ終わり、暇もてあそを弄ぶ。

暇なのです

ひまなのです

ひまなのです。

「ひーまーなーのーでーすー」
「知りません」

そんな、冷徹な事を曉は言う。

「そろそろ終わろうなのです」

「まだ後、813文字もありますよ」

「メタい事は私が担当なのですよ」

「そうなのかー」

「そうなのですよ」

・ ・ ・
ポーカーでもするのです。

「私はストレートなのです」

「ロイヤルストレートフラッシュ」

勝てる気がしないのです。

ん？何の音なのです？

外から、ドスンドスンと重たい音が響いてくる。

外を見ると、そこには巨大な何かが動いていた。

とても大きなソレは、ロボットのようにも見える。

それは、きつと非想天則だろう。

「あれは何ですか？」

「非想天則。ただのハリボテなのですよ」

「でも、それにしても自然に動き過ぎていませんか？」

「まあ、あれはああいう物ですからね」

「近くで見たいけど」

「私は留守番でもしてるですよ」

「ヤッター!!」

「未来水妖バザー？」

目の前に掲げられている看板が目を引く。

どうやら、未来水妖バザーという物の宣伝だったようです。

「非想天則って誰が作ったんです？」

看板を持った、幼い少女に話をかける。

「そうだ。あれは、私が河童に作らせたんだ」

「貴方が？」

「ああ、そうだ。何か問題でも？」

「いえ」

少し屋台でも見て、帰る事にする。

「どうだったです？」

「蛙・をモチーフにした感じの子が、河童に作らせたとか行つてましたね」

「ああ、諏訪子ですね」

「諏訪子？」

「あれでも、一応神様なのですよ」

「え。そうだったのですか」

「知らないで話を聞いてたんですか」

「さて、もうすぐ昼なので、準備をしますね」

「ソリティアでもしてるのです」

「いただきます」

今日の昼ごはんは、ボルシチにパンという、質素な物だった。

「ごちそうさまなのです」

食べ終わり、ソリティアの続きをする。

ソリティアが終わり、眠りにつく。

朝の光を感じ、私は起きる。今は、6時。
暇だから、時計でもする。

結局、8個しか揃わず、時計は終わる。
そんな事をしている内に、暁は起きる。

「おはようございます」

「おはようなのです」

「また時計をしていたのですか？」

「まあ、8個しか揃わなかったんですけどね」

第55話 はーつくぎよくろう

「頂きます」

出された朝食を、食べるのです。

ここは、白玉楼なのです。

今は、妖夢が用意してくれた朝食を頂いているのです。

何故、こんな所にいるかと言うと、暇だから遊びに来たのです。

「久しぶりね。こんなに急に来るなんて、何か有ったの？」

「いえ、暇だっただけなのです」

「そう。なら良いわ。ゆっくりしてね」

最近、やる事が無くなつて来たのです。

そろそろだと私は考えた。

体が、持たないのです。

徐々に、力が体を蝕んで来る。

もうそろそろ、耐えられなくなる。

その時、私は暴走すると思うのです。

だから――。

「だから、殺せって言うの？」

幽々子が、冷たく呟く。

「聞こえていたのですか」

「そりゃあ、死を請う人々の声位は聞こえないと」

「そういう物なのですか」

「そうよ」

「それで？殺してくれるのですか？」

「いやあよ」

「なんでですか？」

「折角、色々手伝って貰った仲なのに、殺すなんて。それに、貴方は1度死んだ筈よね？」

「そうですよ？」

「なんで平然と生きてるの？」

「へいぜんとは生きていないのです」

「そうみたいね」

「何の話をしているのですか？」

私達の会話に、急に妖夢が入って来る。

「いえ、特に何でも無いのよ。そんな事より、買い出しには行かなくて
も良いのかしら？」

「あ、今すぐ行つてきます!!」

そう言い、慌てた様子で部屋を出て行つた。

「どうするつもりなのです？」

「別に？ 貴方自身の寿命はまだまだ先だから、死ぬのには早いと思つ
ていただけ」

「答えになっていないのです」

「そうね」

「まあ、良いのです。じゃあ、そろそろ帰るのです」

「ん。さようなら」

「ダスビダーニヤ」

「何処に行つていたのですか？」

私が帰ると、暁が疑問を問いかけて来る。

「白玉楼に行つていたのですよ」

「そうですか。随分と早かったみたいですね」

「会いに行つただけですから」

「他のところにも会いに行つたんですか？」

「白玉楼だけですよ」

「そうですか」

暁は席を立ち、昼ごはんの準備を始める。

「ごちそうさまなのです」

食べ終わり、皿を片付ける。

・とても暇なのです。

・皆に会いにでも行くですか。

・神社の掃除をして、出掛ける準備をする。

まずは、紅魔館なのです。

嫌な予感しかしないのですが、行くしか無いのです。

「それで来たって訳ね」

「ええ、そうなのです」

「まあ、私達も少し退屈をしていたところだったから、丁度良かったわね」

今、レミイとの会話に浸っている。

「それで？何かをシたりだとかは？」

「しないのです」

「つまんないの」

第56話 紅の館

「久しぶりね」

「久しぶりなのです」

「ここは魔法図書館。世界中の魔法の書グリモワールが集まる図書館である。

私は今、紅茶を飲みながらパッチェとの会話をしているのです。

「そういえば、何かと言ってあまりここに来ないわよね」

「暇なのですが、こっちに来れる程では無いのです」

「へえ、そうなの」

「それにしても、暇なのです」

「そうね。私も、いつも暇だけど、動かないもの」

そのタイミングで、飲み終わった紅茶をこあが淹れてくれる。

「ありがとうございます」

「いえ。いつもの事です」

「そうなのです」

「こあ、続きの本を」

「はい、パチュリー様」

「そう言い、今読んでいる本を渡す。

「チェック」

盤上の駒を動かし、パチュリーはチェックと言った。

そう、チェスをしていたのです。

私も動かすのですが、パチュリーの勝ちで終わってしまった。

「負けちゃったのです」

「でも、貴方が本気を出せば、絶対に負けないのですよ?」

「まあ、そうですね。使わなければ、その程度という事なのです」

「まあ、そういう事で良いわ」

「なんか静かですね」

「そうね。毛玉も最近出ないし」

「咲夜さんが、掃除をしているのですかね」

「つて、止まるんじゃないぞって言わせたいだけでしょ?」

「バレたですか」

「一応、外の世界の事については詳しいつもりだからね」
「そうだったのですか」

「つてこあ、フリージアを流き無いの」

「すいません。つい」

「まあ、完全に静かよりかはマシなですよ」

「それはそうだけど」

「・暇ですね」

「そうですね。館内を回ったら良いんじゃないかしら」

「そうですね。館内を回ってみるのです」

そうして、歩いているとフランを見つける。

「あつ。リーだ！」

「久しぶりですね」

「ねえ、遊びましょう？」

「なにで遊ぶのですか？」

「隠れんぼがしたいーい」

「分かったのです。どっちが鬼なのですか？」

「リーに頼んでも良い？」

「良いですよ？」

そう言い、私は目を隠し、数を数えていく。

「もう良いですか？」

「良いよー」

声がした為、隠れている筈のフランを、探しに行く。

・ 見つけたのです。適当に部屋を探していると、部屋の奥に、うずくまっているフランを見つけたのです。

隠れてすら無かったのです。

「見つけたのです」

「見つかったやつた」

「隠れて無かったですよね？」

「気の所為ですよ」

「そうなのですか」

「こんどは何をするのですか？」

「うーん。トランプをしたいです」

「何をするのですか？」

「ポーカーをしたいのです」

第57話フォーオブアカインド

カードを配り、それぞれ何枚か捨て、山札からカードをとる。
そして、手札を開く。

「ストレートフラッシュなのです」

「フォーオブアカインドで負けちゃった」

両方とも、良い手札なのですが、ここは私がストレートフラッシュで勝ってしまった。

「もう1回やるの、ですか？」

私がそう言うと、フランは首を頷^{うなず}ける。

また、カードを配ったりする。

そして、手札を開く。

「フォーオブアカインド」

なんと、二人ともフォーオブアカインドだったのだ。

この場合、数が大きい方が勝ちなのですが。

フランが、キングのフォーオブアカインドで、エースだった私に勝った。

「やった！勝った」

「強いですね」

今の時間を確認する。もうこんな時間なのかと思った。

「そろそろ、帰るです」

「バイバーイ」

「パカパカー」

「おかえりなさい」

「ただいまなのです」

「お昼は食べて来たのですか？」

「まだ食べて無いのですよ」

「では、今から作りますね」

「ありがとうございます」

「ご馳走様なのです」

「そういえば何をしていたのですか？」

紅魔館で起きた出来事を一通り話し、少し時間が経つ。

「そういえば、最近こちら辺で正体不明の霊が湧いたり消えたりしているのです」

「そうなのですか。幽々子の所にでも聞きに行くのですか？」

「それが確実だと思うのです」

嫌な予感しかしないのですが、仕方無いです。

私達は翌日、幽々子の所に向かった。

コンコンコン

白玉楼のドアを叩く音が響く。

叩いていると、直ぐに誰かがやって来た。

「はい。どちら様で・ってリーじゃ無いですか。どうぞ上がってください」

そう言い、私達は居間へと通される。

「あら、リーじゃ無いのどうしたの？」

「いえ、最近霊が現世に湧いたりしているみたいなので、聞きに来たのです」

「ああ、それは神霊ね。欲が具現化した、悪い霊ね」

「何処に行けば止められるのですか？」

「そうねえ。命蓮寺辺りかしら。最近出来た墓地は、あそこ位だもの」
「じゃあ、向かってみるのです」

着いた。ここは、墓地だ。

その墓地には、人が居た。

「貴方達は誰なのですか？」

「おお、人の子。・か？」

そう聞いてきたのは、そこに居た一人、物部布都だった。

「お主、本当に人間か？」

「その筈ですよ」

「そこまでよ」

誰かが急に来た。その誰かと言うのは霊夢だった。

「また貴方達は異変を起こそうとしていたわよね？」

「違うのですよ。話を聞いていただけなのです」

「嘘よ。絶対異変を起こそうとしていたわよね」

「そもそも、異変って言うのはなんじゃ？」

そう、布都は首を傾げた。それが、霊夢には白々しく写ったのだらう。

まず布都から弾幕勝負で片付けて行くようだった。

第58話 霊夢う

「最後は貴方ね」

と、霊夢は言う。気が付けば、他の人は倒れていた様だ。

「本当に何もやって無いのですよ」

「そうなのかもしれないけれど、どちらにしろ倒さ無いといけないからね」

「そーなのかー」

そう、私が言葉を放った途端、霊夢は弾幕ごっこを始める。

結構長続きし、布都や神子や屠自古などが私達の弾幕勝負を見ているようだった。

「夢想天生!!」

霊夢は、叫ぶようにその言葉を放った。すると、彼女の体は半透明になり、空に浮かんた。

そして、弾幕が放たれる。

私は、その弾幕をどんと避けていく。

「やっぱり、全部避けられたわね」

「想定済みだったのですか」

「そりゃあねえ。でも、これで終わりよ」

「どうするつもりなのですか?」

「こうよ」

その瞬間、何かが起こったような気がするが、多分気の所為なのです。

起きる。しかし、そこは見慣れた光景では無かった。

そこは、博麗神社の中だった。

そして、自分の身体には御札が沢山貼られていた。

「おはようなのです」

「よくそんなに護符を貼られてて、平気で喋るわね」

と、霊夢は素っ気なく言った。そして、霊夢は護符の力を強めた。
全身に、締め付けられる感覚を感じる。

「どうするつもりなのですか？」

「さあ？」

「じゃあ、なんで動きを封じるのですか？」

「それは、貴方が居る事で、異変が起こるからよ。直接の関係が無くても、貴方が居る事で、異変が起きている気がするの。だから、こうしてどうしようか悩んでいるというわけ」

「そーなのですか」

「うーん。やっぱり、殺してしまうのが一番早いのかしら」

「物騒な事は言わないです」

「でも、死なない可能性も有るわね。どこか、こことは違う場所にでも飛ばした方が良いかしら」

「そうしたら、その世界でも悪者扱いされるのです」

「そうね。その世界の”正義”に悪いわね」

「そういう問題なのですか」

「そいえば、来るの遅いわね。アイツ・何してるのかしら」

「誰ですか？」

「呼ばれて飛び出て魔理沙だぜ」

「遅かったじゃないの」

「ごめんなんだぜ。寝坊したんだぜ」

「まあ良いわ。さて、始めましょう」

「で？どうするんだぜ？霊夢。やっぱり殺すのか？」

「確実なのはそれだけど、大人しく死んでくれるとは思えない」

「あの札って、能力を封じる物じゃないのか？」

「そうだけど、普通に喋れている時点で怪しいわ」

「喋れるのか」

「そうなのですよ」

「うん。そうみたいだな」

「ね？有り得なくは無いでしょ？」

「そうみたいだな」

第59話 ケツイ

「じゃあ、どうするんだ？」

「本当に、どうしましょうかね」

「早く解いて欲しいのです」

「うーん。どうやったら倒せるのかしら」

「この至近距離からマスパでもする？」

「無駄なのです。この御札のせいで、能力が弱くなっていますが、それでも攻撃を避ける位の事は出来るのです」

「この御札は、魔力を吸っているのですが、それでもある程度、能力が使えるのです。」

例えば、紫の能力は使えるのです。っと、忘れてたのです。刀を、今の内に神社に送っておく。

「どうなってるんだぜ？」

「本当によね。チートにも程があるわよね」

「能力を使えないように、魔力を吸うのはどうだぜ？」

もう既に、この御札が魔力を吸っているのですが、そこら辺はどういう事なのでしょう。

「そうね。あとは、どうするかね」

「なんで死ぬ方向で決まっているのですか？」

本当にです。勝手に死ぬ方向で決めないで欲しいのです。

「仕方ないじゃない。貴方が居る限り、異変は起きるのですから」

「そんな事も無い気がするのです」

「まあ、死んでも異変が起きたら、その時はその時だぜ」

とても無責任なのです。それに、次に異変が起きた時、私以外の誰かが犠牲になってしまうのです。それだけは、阻止したいのです。

「まあ、そうね。今考えられる原因が貴方というだけだからね」

「なんか、扱いが酷いのです」

「仕方ないわよ。貴方は、この世界に置いて、存在しているだけで害悪になるもの」

「ひ、ひどいのです」

本当に、扱いが酷いのです。もつとちゃんと扱って欲しいのです。

「ま、がんばるんだぜ」

「死ぬかもしれないのに、がんばるってなんなのですか
か」

「気にしたら負けなんだぜ」

「そうなのですか」

「まあ、どうしようもない”運命”なのだから、気を楽にする事ね」

”運命”なのですか」

運命という単語に対して、強く私は反応したのです。

運命を操る程度の能力。

それを使う時が来たって事なのですか。

「どうにか出来るかもなのです」

「どうやって？」

「能力を使ってるのです」

「今、御札が身体中に貼られているの？」

「こんな程度、どうにでもなるのです」

そう言い、身体中に貼られている札の効力を効かなくする。

そうすると、御札が身体から剥がれていく。

「どうやったの？」

「説明はあとなのです。どういう”運命”にしたいかを言って欲しい
のです」

呆れたような感じで、霊夢は口を開く。

「本当に能力を使う気なのね。分かったわ。異変が起きないようにし
て欲しいわ」

”異変が起きないように”ですね。理解したのです」
能力を使い、未来を変化させる。

”異変が起きないように”

第60話黒麗異変

つつ。

此処は、何処なのです？

周りを見渡すと、雪だとも勘違いしそうな程、一面真っ白な空間に私は居た。

幾ら視線を動かそうと、白が視界を染めるばかりだ。

しかし、ここで違和感を覚える。

まぶたを閉じようとしても、それが無いかのように真っ黒に染まる事は無かった。

手で自身の状態を確認しようと、腕を動かそうとするが、ピクリとも動かない。

もしかして、死んだのだろうかと思い、どうにかして動こうとする。一応、簡単に動く事が出来る様になった。しかし、この感覚はいつまでも慣れない。

適当に移動していると、色を発見出来る。そこに近づき、入る。

そこは、見慣れた地形だった。勿論、幻想郷だ。

ちゃんと、異変が起きなくなっているかを確認したいのです。

そう思っていると、人里の上空を霊夢が慌ただしく飛んでいる。着いて行ってみるのです。

着いて行くと、そこには空から逆さに建つ城に辿り着く。

そこには天邪鬼が居た。

霊夢と喋り合っているが、離れていて聞こえない。

しかし、暫くすれば段幕を打ち合つて、戦っているようだ。

勿論、流れ弾が当たっても痛くも痒くも無い。

不思議なものだと思いつつ、その天邪鬼は倒されてしまった。

そして、次へ進む。

そして、進んでいると小人が現れる。

そして、話し合いをしているようだ。

やはり、異変が起きているみたいなのです。

結局、私が死んだとしても異変が無くなる事は無かったのですか。これから、この幻想郷はどうなっていくのだろうと考えつつ、神社の様子を見る事にした。

神社に行くと、そこには暁以外に一人、少女が居た。

その少女は、私がしていた格好をしていて、腰にはあの刀を下げて居た。

あの刀には、もしも能力が無くなってしまった時の為のバックアップで全ての能力を付与していて、あの刀は主人を選ぶ為、こんなにも早くあの刀を持つ人が現れるとは思ってはいなかったが、こうして現れてしまったのなら仕方がない。

それにしても、今回の異変には関係して無いのですかね。ゆっくりしてるですけど。

まあ、平和なのなら、それで良いのです。今の黒麗の巫女が、不憫な思いをしないように、私から出来るだけ全ての加護を、その少女に与える。

すると、暫くして視界が霞む。

きっと、私がこの世界に残る為の力を使い果たしたのです。

そのまま意識は朦朧とし、視界は白くなり、やがて全てが無くなってしまった。

しかし、ほんの少しだけ、雀の涙程、私の意識は残った。

それが何故かは知らないが、私はほんの小さな隙間から、この世界を覗く事にした。

第61話 二代目へ（仮）

今日も、朝早くに起き、あそこへ行く。

今日も、あの人は掃除をしている。

こんな時間じゃ無いと会えないのは、仕方がない。

無期^{むご}の後に、あの人は掃除を終え、部屋に入ってしまった。

そして、私も家に帰る。

翌日、黒麗瀛夢が博麗の巫女によって捕まえられたという内容の新聞が出された。

その後に、神社に行くと言っていたのがあの人じゃ無かったのは、そういうことだったという事だ。

しかし、偶に居ないため、一丸には言えない。

確かめる為、敷地内に入り鈴を鳴らす。

「はい、誰ですか？」

そこに居たのは、先程まで掃除をしていた女性だ。

「えっと、私は・来^{らい}夢^むと言います。名字はありません。それで、用があるのは瀛夢さんなのです」

「そうですか私は暁と言います。そして、リーさんは今日はもう帰って来ないのですよ」

「何で分かるんですか？」

そう、これが異変だからと言って、今日中に帰って来ないとほ限らないのだ。

・分かる時は、何か判断材料がある筈だ。

「・。それは、刀がここに送られたからです」

「刀[・]を見ても良いですか？」

「危ないですよ。主人を選ぶ刀の様ですから、不用意に触らないで下さいね」

「分かったのです」

返事をし、部屋の中に入る。

そこには、とても茶色っぽくなっている刀があった。

あの人を持っている時は黒かったが、先程言った通り、主人を選ぶ

らしいので、その影響だろう。

「はあい」

ここで、急に中から出てきている女性が現れる。

「あ、紫さん。どうしたのですか」

「成程ね。主人達は引かれ合う。と言った所かしら」

「どういう事ですか？」

暁が先に答えた為、私は答えを聞いておく。

「貴方、この刀の主人になる適性が有るわ」

「つまり」

「貴方も、この刀を持つに相応しいという事よ」

「その刀を、その子に渡せって言うの？」

「あら、良く分かったわね。察しが良いじゃない」

なんか、私が参加していない間に話が結構進んだ気がします。

「ねえ、その貴方、」

「はい？」

呼ばれたので返事をしましたが、一体何の用でしょう。

「今日から、黒麗の巫女として生きていく気は無い？」

「どういう意味ですか」

「この刀には、滴夢の能力が全てコピーされているの。つまり、この刀の主人になるという事は、黒麗を継ぐと言う事になるわ」

「そ、そうなのですか」

まあ、願ったり叶ったりなのですが。

「明日まで待つて下さい」

「良いわよ、勿論。暁も良いわよね？」

「私は、本人が良いなら止める権利は無いかと」

「それなら、また明日、ここに来るからね。ダスビダーニヤ」

「ダスビダーニヤ」

そう言うのと、紫と呼ばれる人物は消えて行く。

「良いのですか？」

後半押され気味だった気がしたので、聞いてみる。

「ええ、跡継ぎが出来るのは良い事ですから」

「無理して無いのですか？」

「貴方は優しいのね、大丈夫よ。貴方がなったらなっただ、その時は宜しくね」

そう言い、暁は手を差し出す。

私は、その手を握る。

「結局、私が暁の手を握るように運命は収束するんでしょ？」

翌日

「で？どうするの？」

「後を継ぐのです」

「なら、この刀を持って、月に行かないとね」